

おくのほそ道

く猫と歩けばおくのうそ道く

もり
まさのり
森 真紀

プロローグ

俳人。

このふた文字をほどいてみてください。

人非人。

人であって人にあらず。

ろくでなし。

俳句とはろくでなしのひとりごとだったんですね。

古今の名句もじつはろくでなしたちのひとりごと、そうおもえば気が楽になる。

そしてひとは気が楽になるとついその作品や作者をいじくりたくなるらしい。

あちらからもこちらからもパロディ俳句なるものが生まれてくるのであった。

1 閑かさや岩にしみ入る蝉の声

毛利「この座談会。

そんなパロディ句を採りあげて、われら三人、お酒酌み交わしながらしゃべくりあおうという趣旨のもとに始めました。

一平師匠、トム・カテツロ氏、そしてわたくし毛利。この三人、もちろん人非人ではありませんので、これまで俳句とはほとんど無縁だった者ばかりでございます。ではよろしくお願いたします。

最初のパロディ句の原句は、芭蕉の『閑かさや岩にしみ入る蝉の声』

師匠「いきなり『奥の細道』かよ」

トム「それただしくない。『おくのほそ道』。日本人のくせして、そんなことも知らない」

師「どうでもいんだよ、そんなことあ。はなっからけんか売ってんのか？」

ト「けんかを『売った』ことはいちどもない」

師「なにもんだあ、こいつあ」

毛「そうでした、そうでした。われら三人、まったくの初対面ですもんね。

わたくし毛利と申します。

ひまなのでたまに雑文などちょこっと書いたりしておりますが、俳句は半年ほど前に一句だけつくったことがあります。その経歴を買われてか、司会進行役をやらせていただくことにあいました。

一平師匠は元芸人さんだそうで、失礼ですが、おいくつですか？」

師「わすれた」

毛「そうとう古びてはおられますね。トムさんは、正式のお名前がトム・カテツロ・ジャン・ポレンスキー・ジュニア。ナニジンですか？」

ト「ガイジン」

毛「それはわかりますが」

ト「いちどくわしくしらべたけど、じぶんの先祖のふるさとどこなのか、わからないでおわった」

毛「ずいぶんと、いろいろな国を旅してこられたということですが」

ト「結果的には、旅をしてきた、ということになるのかもしれないが、ぼくはいつもその国にずっと住みつくつもりで暮らしてきた」

毛「ずっとおひとりで？」

ト「だから、アメリカのママからしょっちゅう心配の電話がかかってくる」

毛「それにいたしましても、『奥の細道』がほんとは『おくのほそ道』だったなんてぜんぜん知りませんでした。漢字だとくすんだ茶色い匂いが漂っていて、ちよつと近寄りがあったんですけど、ひらがなにするとずいぶん新緑の風が吹いてきますね。ではテキストのページ目にある最初の作品です。

閑かさや居間にしみ入る蟬の声

前書に、『わかれ話 その場で一句』とありますが

師「ちくしょうめ、身にしてみる」

毛「」経験ありそうですね」

師「かかあのやつ、いまごろどこでなにしてんかな」

ト「あなたがわるかったのか？それとも、かかあがわるかったのか？」

師「・・・・・・・・」

ト「あなたが女つくったのか？それとも、かかあが男つくったのか？」

師「・・・・・・・・」

ト「あなたがあり金ぜんぶもって夜のお勝手口からこつそりとにげだったのか？それとも、かかあがあり金ぜんぶもって夜のお勝手口からこつそりとにげだったのか？」

師「・・・・・・・・」

毛「その『・・・・・・・・』なぜか蟬の声のようですね。トムさん、もうやめてあげてください」

師「あと一行なんかいったら、おれあける」

ト「原因、知りたかっただけ。悪気なし」

師「そっちに悪気なくとも、こっちは悪い気になるんだよ」

毛「まあまあ。この句が身にしてみるひと、あるいは身につまされるひとけっこういらっしやるんじやあないでしょうか。映画のワンシーンみたいですね。そよとも風のない庭、開け放たれた窓、聴こえてくるのは蟬の声だけ。あかるくて怖いですね。『その場で一句』っていうのがいい。妙に醒めた感じがじつに出ております」

ト「滑稽句」

毛「たしかにそうですね。前書ってあんがい重要ですね。それにいたしましても、かなり深刻な状況に身をおきながらも、さざりとうまく詠んでおります」

ト『水かさが居間に増してく波の音』トム

毛「トムさん、ちいさいお家とはいえやっとこさ新築した直後にかなりひどい浸水被害に見舞われたそう。でもその句、たしかに深刻な状況を詠んではおりますが、作品としてはぜんぜんおもしろくありませんね。つぎの作品。」

閑かさや烏賊にしみ入る蟬の声

じつにおいしそうですね。縄に吊り下げたままの烏賊に蟬の声がたっぷりとしみ込んで、ゆっくりと干し上がるわけですもんね。噛めば噛むほど烏賊と蟬の味が混じりあって……えーっとどんな味なんですかね？」

師「どこが、おいしそう、なんだよ」

ト「絵としては、とてもいい」

師「そんなんでいんなら、おれも一句、

閑かさや皺にしみ入る蟬の声

こんなもん、いくらでもできる」

毛「師匠のボロボロのお姿が目に浮かびます。では、わたくしも、

閑かさやビラにしみ入る蟬の声

若かりし頃の学生運動。警官に殴られたあとの口惜しさ、道路一面に散らばったおびたしいビラ、思い出します」

ト「じゃ、ぼくももう一句、

閑かさや地下室(ちか)にしみ入る蟬の声

毛「トムさんのお家、浸水の後片づけもなんとか終わりそのあとご自分で何カ月もかけて壁紙やフローリングを新しく張り替えた直後、こんどは、裏山からの土砂崩れに見舞われ地下に生き埋めになられたそうで」

*

毛「ところでトムさん、芭蕉の『おくのほそ道』読んでどうでした？」

ト「英語訳で読んだとき、旅行ガイドブックか、おもった。こんな旅行ガイドブックが、なぜ日本のすばらしい文学なのかと。

でも日本語で読んだら、いろいろな種類の文字がならんでいたの、そのひとつひとつのちがいがわかれば、すばらしさがいつかわかるであろうとおもった」

毛「じゃあ何度も繰り返し読んだんですね？」

ト「みじかいから、日本にきてからだけでも、もう一〇回は読んだ」

毛「日本語の特性に慣れてくれば、やはり『おくのほそ道』という作品にたいしての評価はずいぶん変わってきたでしょうね」

ト「やっぱり旅行ガイドブックであった」

毛「ま、それはともかくとして、そもそもほとんどのひとは、『おくのほそ道』、読んでないんじゃないでしょうか」

師「だろいな」

毛「有名な句がいくつか入っているし、冒頭の『月日は百代の過客にして』なんて序文、高校の授業やテストで何度も読まされてきましたから、わたくしもなんとなくぜんぶ知っているつもりになっていましたけど、完読したことはなかった。このあいだ、この司会を頼まれましたので、さすがにじっくりと腰据えて読み始めたところですけどね」

師「読むとすぐねむくなるからな、ねむれねえ夜なんざ、もってこいだわ」

毛「こんなん、この座談会、これからやっていけるのかしら？」

師「酒ただで飲ましてくれてくれるってえからここにきてるだけでな、あとどうなろうと知ったこっちゃねえ」

毛「この三人ですと、俳句論じあうつもりが、すぐ話が横に逸れて、わけわかんなくなりそうな気がしないでもないですね」

師「おくの寄り道」

毛「しかも、相手のいうことには耳を貸さずに、じぶんの意見だけ言いたい放題、会話は成り立たず、それぞれ完全に話は一方通行ってなことになるしそうな気がしないでもないです」

師「おくの片道」

毛「ま、でも、かんがえてみれば、芭蕉の『おくのほそ道』だって、ある意味『おくの寄り道』ですし、旅に死んでも悔いなしのところがまえで出かけたわけですからある意味『おくの片道』

師「なんとかなるんじゃないやあねえのか」

ト「とりあえず、このこと、ママには電話で知らせておいた」

毛「とりあえず、師匠、最終回までは生きていてくださいませね。たぶん、これが師匠最後の晴れ舞台となるでしょうから」

師「『おくの花道』ってか？」

2 ひやんんと壁をふまえて昼寝かな

毛「最初の作品。」

ヒヤんんと屋根をふまえて忍者(しのび)かな

前書には『芭蕉まぼろしの一句』とあります。芭蕉がじつは忍者だったという説があります。が、この前書、どこまで信用してよろしいんでしょうか？

師「どこまでも信用しなくていいんだよ。芭蕉がほんもんの忍者だったらこんなまぬけな俳句つくるわきゃねえ。こんなへっぴり腰じゃ、忍者どころかコソ泥にもなれねえ」

毛「でも、これがほんとうに芭蕉のまぼろしの一句だとしたら、この座談会シリーズ、かなり注目を浴びますけど」

師「浴びるのは罵声だけだわ。松尾罵声」

ト「ひらがなの『ひやん』とカタカナの『ヒヤん』このつかいわけがぼくにはわからない」

師「『ひやん』と屋根をふまえて忍者かな』だったら芭蕉の真作の可能性はあったな。それなら、月光に濡れた屋根をふんでゆく忍者のきーんとした緊張感がでてるからな」

毛「トムさん、あまりむずかしくかんがえなくてもいいとおもいますよ。すなおにそのまんま、おいしいものを食べるように味わえばいいんですよ。ずっと日本に住んでいればそのうち自然にわかってくるんじゃないでしょうか。でもこの句、やっぱり芭蕉の句かも」

師「つぎいけ」

毛「はい。」

ヒヤ〜と甕をふまえて値ぶみかな

これもカタカナのヒヤ〜です」

師「たしかに買い取る骨董屋としちゃあ、ヒビへえってたら売りもんになんねえからな」

ト「客のまえで、店の主人がおっかなびっくり甕をふんづけてる。とおりがかりのひとがみたらどうおもうのであるうか？」

毛「くだらない句です」

師「芭蕉まぼろしの一句』と大差ねえとおもうけどな」

毛「えーと、次は、

ひや〜と影をふまえて狐かな

実景なのか白昼夢なのか。いずれにしても昔の象徴主義派の連中が飛びつきそうな句ではありません。おのれの影を踏みながらやがてどこかへ消えてゆく一匹の狐。まぼろしの獣のようでありながら、地面には妙にくつきりと影を落としているんですね。そしてその影すらもまたまぼろしなのかもしれない。

無音の世界の一瞬をとらえた句だとおもいます」

師「たしかに音のねえ世界」

毛「あゆむ狐のイメージを借りて、むしろその無音を表現したかったのかもしれないね。次の句もおなじような傾向ですが、

ひや〜と花を浮かべて昼寝かな

わたくしはこれ、風通しのいい座敷の真中で浴衣の胸をちよいとはだけて寝ているご婦人をおもい浮かべました。彼女の夢の微熱に吸いよせられて舞い込んできたうすい花びらがふたひらみひら、蝶のように宙を漂っている。涼しげでありながらちよつと艶っぽい」

ト「どこのスイッチおせばそんなイメージがうかぶのか、しんじることができない。これはきよらかなおさなごの句である。いとしのわが子の寝顔を詠んだ句である。きよ句ただし句うつくし句」

師「いやにむきんなってるな」

ト「ママがよく話をしてくれた。『トムったらちいさい頃、眠りながらよく笑ってたのよ。夢をみてたのね。それがもう食べちゃいたいくらい可愛くってねえ。くちびるを微かにあけてニコッとするの。ほんとに花がひらいたようにね』

その話、ずっとぼくの宝物。なにが胸をちよいとはだけて寝ているご婦人、だ」

毛「申し訳ありません。なんで謝らなきゃなんないのかわかりませんが、とりあえず謝っておきます。そんなに怒るとはおもっておりませんでした」

師「マザコン」

ト「カカアコンにいわれたくない」

毛「最後の句です。」

ひやんと禿を抱えて昼寝かな

『悩める老僧の午後』という前書があります。わたくしの友人の父君が住職をされているんですが、一本すつと芯が通っていないながら、人あたりのそれはそれは柔らかなたでして、ほんとうに素晴らしい人格者なんです。酒たばこはもちろん、賭け事も女もまったく寄せつけず、とにかく読経三昧。

お寺に集まる檀家相手の講話なんかでも、むずかしい言葉は一切つかわずに誰にでもわかりやすい言葉で語りかけるためこどもからお年寄りにいたるまで誰もがその語りに引き込まれてしまい、しかもその内容たるやじつに深く澄みきった青空の如きなんです。わたくしたちの目の前を無言で通り過ぎてゆくだけで辺り一面に清潔な空間を残していつてくださるような、そんなかたなんです。

ただ、その友人の話によると、ご住職、お昼寝すると、決まって禿頭を抱え込んで身を振り始める。寝言癖もかなりひどく、それも性格上、誰にでもわかりやすい言葉、正確な発音で正確に表現しなくては気が済まないため、そばで聞いている友人には親父さんの本心が百パーセントわかっちゃうらしいんです。

で、わかりやすいのはいいんですけど、それが最初から最後まで放送禁止用語のオンパレードなんだそうです。淫らな酒池肉林から抜け出そうと悪戦苦闘しているのか、それとも淫らな酒池肉林ではしゃぎまくっているじぶんの声を外に漏らすまいと悪戦苦闘しているのか、毎日毎日、頭を抱え込んで身を振りながら寝ている姿は可哀そうでもあり滑稽でもありとてもみてられないんだよってこぼしておりました」

師「坊主も楽じゃねえな」

毛「わたくしは信じたくないんですけどね」

ト「この場合は、『ひやんと』なのか『ヒヤんと』なのか」

毛「ご住職、たまにはお酒でも飲まれたほうがいいのかもしれないね」

師「ひやんと盃をかさねて春の午後」

毛「あ、気がつきませんで。師匠、おつぎいたしましょう」

3 荒海や佐渡に横たふ天の河

毛「 荒海やとどに横たふ天の川

これ凄いですね。荒波が打ち寄せる岩場一面びっちり群らがったとどの背中に、天の川がざんつと降りている。濡れた皮膚からもうんと立ちあがる湯気。あたり一帯に蛋白質の粘りがたち込めていて、臭気まで感じますね」

師「とどの刺身、食いたくなるな。酒のさかなにやもってこいかも。この作者、たぶん酒飲みだわ」

毛「あ、その、『作者』のことなんですけど、これからたくさんさんのパロディ俳句採りあげていくわけですが、じつはどれもこれもその作者名がわからないんですよ。

このテキストの原本、表紙も背表紙も目次もあっちこっち破れていたり虫食っていたりで、書名ももちろんなんですけど、編者名もパロディ俳句の作者名も不明なんです。全句ひとりて書いているのか、それともいろいろなひとが書いているのか、それすらもわからないんです」

師「作者名なんかどうでもいい。作品がおもしろけりゃあそれでいんだーら」

毛「そうですね。それにいたしましても原句は日本画風、この句は油絵風。単語ひとつちがうだけでまるで別世界です」

師「太古の風景のようにもみえるが、未来の風景のようにもみえる。とどの鳴き声と波の音だけで、にんげんの姿どこにもみあたらねえ」

毛「ところで、原句が『天の河』なのに、これ、『天の川』になっていますね」

師「『河』だと淀んじゃうけど『川』だと流れる。だから原句だって、おれだったら『天の川』って書くだろうな」

毛「師匠、芭蕉の俳句、添削しちゃいましたね」

師「なめんじゃあねえーんよーん」

4 名月や池をめぐりて夜もすがら

毛「暑くなったり寒くなったりわけわからない日々がつづいておりましたが、ここにきてやっと秋が正座したって感じですね。お酒のおいしくなる季節です」

師「名月が盃をめぐりて夜もすがら」

毛「あらまあ、ちよつといいですね。盃のふちにとまっている月の光をお酒と一緒に飲みほしているお姿が眼に浮かびます。さを越されてしまいましたけど、そうです、きょうの原句は『名月や池をめぐりて夜もすがら』」

師「からだんなか月光だらけだったな、レントゲン飲んだみてえによ」

毛「最初の作品。」

臨月や光纏いて夜もすがら

眠る妻の臨月の腹部をふうわりと覆っている掛布の襞に、産室の常夜燈がゆるい光を落としている。それは、掛布自体が静かに光を放っているかのようにも視える。母体の奥底からゆっくりと浮上してくるエーテルのようなものが掛布のうえで光となってひろがっているように視えたんでしょね。薄暗い産室の真ん中で、そこだけが、一晩中、鮮やかな輪郭をたもちつづけている。

夫であるこの作者も一晩中そばにいたことになるわけですね。世の父親たちの多くが、こういう夜を経験しているんじゃないでしょうか？一枚の室内画をみるようで、この句、わたくし大好きです。

迷い猫声うろろうと夜もすがら

家の外の夜道をどこかの迷い猫が一匹、鳴きながら行ったたり来たりしている。

じつは、わたくしの家に先日の午後、迷子の子猫がやって来ましてね。淡い黒とまばゆいばかりの純白で、片手のてのひらに乗るくらいいやつが、リビングに面した庭でにやあにやあいつていたんで息子が硝子戸開けてやったら、あたりまえのようにちやつかり入って来たんです。そして、ソファに座っているわたくしの前に来て床にお尻をつけると、前足すつくと揃え、わたくしの顔じつとみあげ、あらためて『にゃあ』っていいました。華奢ですけど、けっしてやつれている感じではなく、おそらくあちこちで餌もらっていたんでしょうね。ほんとに少年のような猫なんですよ」

師「その歳なんて、猫かうようになっちゃ、あんたもおしめえだな」

毛「じつは、わたくしも、そのことがすぐ頭に浮かんだんですよ。よく、こどもがみんな片づいた老夫婦が『ミーコやミーコ』なんて猫で声だして傍目はばかりずべたべたになつている姿、ぞつとしましたものね。いずれはわたくしたちも夫婦ふたりきりになるかもしれないけど、でもね、猫飼うことで、こどもがいなくなった穴埋めするなんて、情けないもいとこ。というか、飼う理由はなんであれ、そもそもペット愛好家という人種には、心底嫌悪感もっておりますから」

師「それが、いまじゃあんたもその仲間入り」

毛「ちがいます。誤解しないでいただきたいんですが、いまでも、ペット愛好家というひとたちをみると『ふんッ』といった気分になります。わたくしはいまでもペット愛好家ではないんです」

師「だがよ、猫かわいがつてゐることはたしかなんだろう？」

毛「いえ、可愛がってはおりません。可愛いとおもっているだけなんです。

いいですかッ。可愛がるということと、可愛いとおもっていることとは、ぜんぜん別物なんです。可愛がるというのは、こちらから相手に愛情をもつて、いろいろな形で接触してゆくことなんです。それに反して、可愛いとおもっているというのは、けっしてこちらからは接触しない。相手がこちらに接触してくるのは拒みませんけど、けっしてこちらからは手をさしのべたりはしない。見守るだけ」

ト「なにいいたいのかよくわからないのであるが、どっちにしても、あんたが一匹の猫をかいはじめたことは、事実なんだろう？」

毛「たしかに事実です。でも、わたくし、わざわざペットショップに行つてお金出して買つてきたわけでもないし、どなたからかいただいたわけでもない。猫が勝手に我が家に入り込んで来たんです。わたくしが猫に接触しにいったわけではなく、猫のほうからわたくしに接触してきたんです。この一点を見落とさないでいただきたい」

師「じゃあ、猫なでこえだして、頭なでてやるなんてこたあ、ぜったいしないわけだ」

毛「たまには、いたします」

師「たまにはいたしますって、どのくれえ、たまにはなんだ？」

毛「妻がいうには、朝から晩までだそうです。

それはそれといたしまして、その妻が、この猫のことを、一句詠んでいるんです。

『子猫来たる息さわやかにやあと鳴き』

ちよっといいでしょ？『息さわやかに』がいいんですよ。

妻の作品を褒めるの、ちよっと照れ臭いんですけど、やって来たときの最初の印象は、まさにこれでした。じつに清潔感溢れるやつでした。そこいらへんにうろろしている薄汚い野良猫とはわけがちがいましたね」

ト「名前は、なんてつけたのか？」

毛「つけておりません。名前なんぞつけたら、それこそ可愛がってしまうかもしれませんからね」

師「毛利ちゃん、あんたやっぱり、もうおしめえだな」

毛「月こよひ部屋をさぐりて夜もすがら

じつに静かな作品です。窓から射し込む月の光が、部屋の片隅からもう一方の片隅まで長い時間かけてゆっくりと移動してゆく。『もうだいじようぶ、もうだいじようぶ』とでもいうかのように部屋の奥深くにまで探りを入れながら移動してゆく。光をあてられた壁も、床も、ひとも、清潔な麻酔をかけられたようにじっとしている。何度読んでもここに沁みわたる句です。」

ト「こどものころ、おなかいたくてベッドにはいついていたとき、窓のそとのお月さまみていたらいつのまにか治ってしまったことがある」

毛「たしかに月光には麻酔成分が含まれているような気がいたしますね。月光を超低温で液化させるるとまっ青な麻酔薬ができるかもしれません」

師『部屋をさぐりて』がいいな

毛「さりげない表現ですけどね」

ト『なぐりて』と『さりげない』のふたつのことば、ちよっと似てるとおもわないか？」

毛「あ、ほんとですね。いわれてみるとたしかに似ています。トムさん、日本語ずいぶんわかっ てきたみたいですね」

ト「最近、ぼく日本語で寝言いうらしい」

5 蚤虱馬の尿する枕もと

毛「ところで師匠、お寒くなりましたけど、お風邪引いたりされませんか？」

師「たまにちよこつとひくと、あ、おれ生きてたんだとおもうんだわ」

毛「なるほどね。トムさんはいかがですか？」

ト「ぼく、風邪にかかったことはあるが、風邪を引いたことないしもちろん足したこともない」

毛「まじめにおっしゃっているのか、おちよくっているのか。つぎの原句は『蚤虱馬の尿する枕

もと』。尿を『はり』と読むか、『し』と読むか」

ト「はりばかりか、しとしとか」

毛「実際の音とその漢字の読みとは深い繋がりがありませんから、この句の場合はどちらがいいんでしょうね？」

師『ちよる』じゃいけねえのか？」

毛「いけません。」

軒白み夢魔の去りゆく枕もと

むりやりなパロディ句ですね。まあ、ふつうの創作句として読めば気になりません。わたくし、こどもの頃、よく体験しました。夢の中で『こんな怖いことはきつと夢にちがいない』という醒めた意識みたいなものがどこからやってきて、とにかくにもここから脱出しなければと、熱病のようなゼラチン質の夢の粘膜をむりやりにズルリツとくぐり抜けて眼をあけると、もう汗びっしり胸どきどきになっておりましてね、で、軒先をみるとあたりがかすかに白み始めているんです。枕もとには、しんとした畳の匂い」

ト「夢魔という字、怖い」

師「夢ぜんぜんみねえ」

毛「悪夢って、疲れてささくれだった神経が体内で溶けだすときに出すエキスのようなものですよ。から、師匠のように、みてくれは干乾びてささくれだつていらっしやっても、神経の太いあるいはもともと無いかたは悪夢みないんでしょね。」

蚤虱妻の尿する枕もと

『隅田川の岸边にて』と前書にあります。苦味のあるおかしさですね。ただ、こんな不安定な時代、明日は我が身ですから絵空事ではありません」

師「かかあいねえから関係ねえ」

毛「これ、読みようによつては、究極の夫婦愛ともいえますよ。大都会の真ん中を流れる川の岸边でひっそりと身を寄せあつて生きている夫婦の姿。おたがい、なにも隠しあうことなく、こころの赴くまま、自然体で生きているんですからね」

ト「夫は妻を、妻は夫を、信じきつて、ゆるしきつて。爺さんとはぜんぜんちがう」

毛「青いテントを見上げれば、その破れ目からたくさん星がふたりをじつと見下ろしている。

聴こえるのは妻の尿の音だけ。不思議な深みのある句ですね」

師「かかあ、いまごろ、どこで、なにしてんかなあ」

6 道のべの木樞は馬にくはれけり

毛「最初の作品。」

釜の辺へのおこげは馬にくはれけり

熱かったでしょうね、馬」

師「くちびるおもいつきりめくれあがつたな、馬」

毛「農家の庭先で近所のひとたちが集まつておそらく田舎風バーベキューでもしていたんですよ。あんまりいい匂いがしているんで、馬が厩舎から首のばして釜の辺にこびりついているおこげを食べちゃった。」

それにいたしましたも、おこげというのは、ある意味失敗の産物なのに、いまじゃあなぜか重宝されていますよ。焼きおにぎりなんてものは、もしかしたら、捨てるに忍びない残ったおこげをしかたなく食べていた女房たちが、ある日とつぜん編みだしたアイデアなのかも

しれません。納豆とか、ある種の干物だとか、そもそもミスが原因で産まれたもの、けっこう多いらしいですからね。

寄せ鍋や生煮え肉も喰われけり

鍋物囲みながらのお酒って、絵的にはこんな面白い取り合わせはほかにないようにおもえるんですが、やってみるとちらゝゝわらゝゝ忙しくて落ち着かないんですよ。

たくさんの視線がそがれている鍋の中でいろんな具材がぶくゝ揺れうごいたり刻々と変化したりする鍋物というのは、煮えどき食べどきを見計らいながらやりますから、どうしても、われさきに的なる雰囲気になるでしょ、あれが、落ち着かない。とはいえ誰だって一番おいしいタイミングで食べたいですしね」

ト「スキヤキなんかともだちとやると、みんな、眼がツリあがる」

毛「わかります、じつにわかります。すき焼きのようなお肉がらみの鍋物はとくに陰悪度が上がります。ただお肉がらみときは、煮えどき食べどき争いもさることながら、やはり金銭勘定も絡んでくるんじゃないでしょうか」

ト「それ、ぜったいある」

毛「わたくしなんかも、よくよくかんがえてみればそれほどお肉好きじゃあないのに、スキヤキのときは、やっぱり最優先的にお肉確保しますからね。なんてたってその中で一番高いのはお肉ですから。野菜なんか見向きもしません。豆腐、しらすなんざ相手のほうに押しやって、とにかく、まずはお肉。元を取らねばッ！ただそれだけです。

だからまわりの友人たちが全員ずるい奴におもえてくる。とはいえ、紳士として通っているわたくしといたしましては、そんなじぶんの心理状態をぜったいにひとにみせてはならないわけでありますから、表情や動作は完璧におだやかさを保ちつづけてはならない。じつにほんとに鍋物というのは疲れます。お酒どころではなくります。

だから、さざえの壺焼きとか茶碗蒸しみたいな一品料理がじぶんの前にはつきり静かに置かれてっていると落ち着きますね。『これはわたくしの分ですからね』と、まわりのひとたちにはつきりと無言で主張できるわけですから」

師「きょうのこれ、鍋もんじゃなくてよかったな」

毛「一品料理ばかりですから、とても平和です。でもね、お刺身なんかは、ひと切れふた切れ師匠に取られても気がつかないかもしれませんので、やっぱりちよっと手前に引き寄せたくなの」

師「毛利ちゃん、ちよっとどころか、だいぶひきよせてあるな」

毛「つぎの句です。」

道のべのお告げは犬も食わぬなり

『神様信じますか？』わたくし、いままで何十回追いかけられたことか」

師「おれあこないだ、かかあの姿みかけたって近所のやつが知らせてくれたんで駅前さがしにいったとき、おいかけられた。汗びっしょりになってさがしまわってるとき、音もななくうしろからやってきて『神様信じますか？』ときた。はりたおそうかとおもっておもいつきりふ

りむいたら、あいては毛むくじらのでっけ外人だったからやめたがな。汗びっしりになってあたりきよるきよるみまわしながらよろける足とかくまえへまえへとつきだしてあるいてるよれよれの爺いを、うしろからおいにかけてきて、そんなこと聞かか？ふつう」

毛「家が全焼して命からがら脱出してきた被害者にマイク突きつけて『いつ新築しますか？』って聞いている馬鹿とおんなじですね。

しかも、『お告げ』やっている連中のほとんどは『いま何時ですか？』っていうノリですかね。あれ、いつそのこと、こつちもそのノリで『ハイいまから信じます』って応えたらどんな顔するでしょうね。こんどひまなとき、やってみようかな。

とはいえ、『お告げ』やっているひとたちにしろ、どんな宗教団体に入っているひとたちにしろ、ああいう風にあるひとつの教えに熱心な信者をみていると、ある種うらやましさみたいなものは、たしかに感じます」

師「たしかにうらやましいわな。神様しんじてぜんぶあずけつちまえば、なにおころうとこわいもんなし、だかな」

毛「あいだみつをの『にんげんだもの』とおんなじ。』にくたらしいやつをみているとゆっくりころしたくなる にんげんだもの』」

ト「あいだみつをに、そんなことばがあるのか？」

毛「たぶんないとおもいますがそれとして、終わりに『にんげんだもの』という言葉さえつければ、そのまえにどんな言葉をもつてきてもいい。なんでもあり。

そしてそれ以上深くかんがえたり悩んだり、しなくなっちゃうんですね。』にんげんだもの』この七文字に全責任を負わせればいいんです」

師「それにしてもよ、とおりすがりの爺いおっかけて『神様信じますか？』ってやるやつは神経わかんねえな」

毛「ところで師匠、その逃げた元奥様の話ですけど、けつきよくどうなったんです？みつかったんですか？」

師「うんにや、みつかなかった。あのお告げやろうのおかげでケチついちゃったのかも」

ト「もしみつかったら、またいつしよにくらすのか？」

師「わかんねえ。いまかかあがどうおもってんのかもわかんねえし、なによりおれじしん、いまおれがどういうきもちでいるのか、それもよくわかんねえ」

毛「たしかに、おふたりともおたがい、そのときになってみなければわからないでしょうね。

こういうことは理屈どおりにいくもんじゃあないでしょうから」

師「にんげんだもの」

7 五月雨をあつめて早し最上川】

毛「 万感を浮かべて黒き最上川

『灯籠流し』という前書があります。灯籠を持ち寄ったひとりひとりそれぞれ火を点けるんじゃないなくて、それを河原の水辺に集めてお坊さんやら世話人やらが代表で火を点けるんだそ

うです。土手の上に立ち並ぶひとびとの視線が祈るようにそそがれて、ついに灯籠に灯が点る。そのおびただしい数の灯籠を一斉に流すわけですから、最上川は一瞬にして、悲しみと慈しみに満ちあふれた巨大な銀河となるわけですね。ふだんは荒々しい最上川も、この、死者と生者とがくりひろげる無言の交信に圧倒されて、さすがにぶあつくひそまり返っている原句が『あつめて早し』と動的であるのにたいして、これは『浮かべて黒き』と静的に詠んでおりますね。」

8 夏草やつはものどもが夢の跡

ト『五月雨をマツモトキヨシ最上川』

毛「それ、終わってます。つぎの作品は連作です。」

前書に『寝タバコで家焼けて 二句』とあり、まずはそのひとつめ。

夏草や上物(うわもの)どもが夢の跡

トムさん、上物というのは、日本の俗な言い回しのひとつで、土地の上に立っている家建物のことです」

ト「ものすごく知ってる」

毛「あ、そうか、そうでしたね。水に浸かったり、土砂崩れで地下室に生き埋めになったりで、

上物ではだいぶ苦い体験されたんですもんね。もう立ち直りましたか？」

ト「まだ建ち直ってない」

毛「いや、家のことではなく、気持ちのことですけど」

ト「そういう句読むとちよつと立ち直る。ひどい目に遭ったにんげん、ぼくひとりではなかった」

毛「おたがい頑張りうという気持ちになりますよね」

ト「ぜんぜんならない。じぶんの不始末で焼けてしまったんだから、ざまみるこの野郎だ」

毛「あまり自棄にならないように。まあ、二度の大きな災難に遭われてからまだ日もあまり経っていないわけですから、無理もないのかもしれない。ふたつめ。

夏草や糞餓鬼どもは嫁のあと

家が焼けたうえ、お嫁さんにも子供たちにも逃げられたら、たまりませんね」

ト「ぼく、この連作読んで、うれしくてたまらない。この作者、女房子供にまでにげられた。

ぼく独身、女房子供いない。そのぶんだけ、ぼくしあわせ。そのぶんだけ、この作者ふしあわせ」

毛「あまり自棄にならないように」

師「ちいせえ野郎だ」

ト「かかあににげられた爺いにいわれたくない」

毛「 浅草や花魁(おいらん)どもが夢の跡

巨きな髷に太くて長い髪飾り何本も突き刺して、顔中お化粧塗りたいくって、重たそうな着物何枚も重ね着して、外歩くときは木箱みたいなでっかい草履履いてるような女性、わたくしだったらちよつと遠慮させていただきたいですね。」

そんな不自然の塊りが眼の前にデンツと座っているお座敷で、お酒やお料理いただくなんて、かんがえただけでも落ち着かないし鬱陶しい」

ト「不自然といえは、あのスモウの行司、あんな不自然なものもない。とくにえらい行司になると、ぴしっとした衣粧に小刀差して足袋草履姿。すっぱだか同然で殺気だつてる野獣のような力士ふたりのまえて、じぶんだけその恰好はないでしょう、といたいいのである。うごきづらいだろうし、あぶないだろうし、なによりもめざわりだし、なんの意味もない」

毛「行司さんって、自宅にいらっしやるとき、どんな格好しているんでしょうかね」

師「あつい日なんか、あんがいパンツ一丁、缶ビール片手にくわえ煙草で競馬新聞めくつてたりしてな」

9 行く春や鳥啼き魚の目は涙

毛「もうすぐお正月ですね」

師『行く年や餅なき者の目は涙』

毛「そうです、きょうの原句は『行く春や鳥啼き魚の目は涙』です」

師『行く年や土地なき者の目は涙』

毛「どうされたんですか？きょうはずいぶん弱気ですが」

師『行く年や年寄りうわのそら涙』

毛「トムさん、師匠どうしちゃったんでしょう？」

ト「きのうの忘年会で飲みすぎたのかも」

師『隣の春婆さんに捧ぐ』

逝く春や鳥啼き魚の目は涙

「

毛「ああ、そうだったんですか。それはそれは。暮とかお正月ってあんがいそうなんですよね。

寒さがいけないんでしょうか。お悔み申し上げます。さ、一杯どうぞ。きゅつとやって新年の来るのを待ちましょう。

つゆ晴れや鳥啼き魚の目は涙

つゆの晴れ間のおもいがけない青空に鳥や魚たちが歓喜する圧倒的な興奮状態を、わずかな言葉の置き換えで表現しております。原句のしよぼくれた感興をひっくり返しておもしろいですね。光と風に乾いて軽くなった羽根をおもうぞんぶんにひろげて飛び回る鳥の姿や、溪流の底で、射し込む陽光に感涙をあふれさせている魚の姿が鮮やかです。

鳥や魚たちの花のようにひらいてゆくところが、この句を読むにんげんのころにも乗りうつってきてこちらも幸福になれる」

師「ちつとばかり気持ち晴れたな」

毛「それは良うございました」

10 石山の石より白し秋の風

毛「石橋の石より強し妻の杖

足は多少弱くなつてきてはいるものの腕っぷしはあいかわらず強い奥さんが、ぷりぷりしな

がら杖で石橋を叩いて渡っているんですけど、いつ石橋が砕け落ちるかわからないとおもうと、うしろからついてゆくこの作者、気がでないんですね」

ト「この奥さん、なにをそんなにおこってるのか？」

毛「わかりませんが、そうとうに怒っていることだけはたしかですね。この調子だと真ん中へんまで行ったところで石橋が真つぷたつに割れちゃったりして」

師「この句でおもいだしたんだが、ガキんとき、氷にのつかったまんま漂流したことあったっけ」

ト「えっ？」

毛「えっ？」

師「五歳くれえだったかな。

たぶん伯父といっしょにどっかの田舎にあそびにいってたときだったとおもうんだが、ちかくのでつけえ川が凍っちまったって話きいてよ、ひとりでちよいといつてみた。

土手からみおろすと、はるか川上からはるか川下までみわたすかぎり晴れわたった両岸に沿って、ずらーっと氷が張っててな。そのはてしなく長い氷の廊下にはさまれて、真つ黒い川の水が流木やら何やら浮かべてずっしりおもたそうに流れてんだよ。なぜか、おもわず深呼吸したな。雲ひとつねえ空のしたで、巨きくうねりながらすげえはやさで流れてる。

土手からおりてってそこらへんにおちてた太い棒つきれ一本を杖がわりにしておそろる岸辺に張ってる氷にのつてみたんだが、それがそもそもまぢがいのものと。どのくれえあつく張ってんだらうって、その棒つきれであつちこつちつについてたら、もともと深く裂け目がついてたところをついちまったらしく、パカツとわれちまつてよ、おれをのつけた畳六畳くれえのぶあつい氷の板、筏みてえに流れんなかにひきずりこまれてあつというまに岸辺からひきはなされちまつた。ほんと、あつというま。

いったん流れにのつちまうとな、ま、あたりめえつちやあたりめえだけど、おれののつた氷とそのしたの水はおんなじ速度で川下むかつて移動してくわけだからよ、おれのまわりの世界はじつにおだやかに静止した平和な空間なんだな。すぐわきののつぱりした泥まじりの水に浮いてる木の枝や葉っぱなんか、きもちよさそうにのんびりゆるゆる回ってる。ただ、うしろへとおざかつてく両側の土手みてるよ、いまじぶんがとつもねえ速さで川下に流されてんのだけはわかる。

体が空にずーんともちあげられたかとおもうよ、つぎにやずーんと川底に引きずり込まれてな、そんなことくりかえしながら一〇分くれえきよるきよるしながら流されてたんだが、ふと前方みると、遠くにしろつぽい靄みてえのが立ってる。ありやなんだ？つてえおもってるうちに、その靄のしたから、一筋、なんか水平線みてえのがみえてきた。同時に、こんどあそのあたりからくぐもつた音がきこえてきてな、それがだんだんちかずいてくる。

いつのまにか両岸におおぜいのにんげんがわらわらあらわれてきていて、みんなおれのほうをむいてるし、口に両手をあててなんかかさけんてるやつもいるんだがよ、近づいてくる音にかきけされてなについてんのかぜんぜんきこえねえ。ただ、とんでもねえ事態になつてるにちげえねえことだけは、ガキのおれにもわかった。で、なんだなんだつて泣きそうになった

ときだったな、突然、のつた氷の板が、川の真ん中あたりにつきでてた岩にぶちあたってよ、こっばみじん」

ト「大ケガしたか？」

師「氷が放射状に砕け散ったときに、衝撃力が分散されたんだろうな、おれはまったく痛みもなく怪我ひとつしねえで岩の表面に蛙みてえにへばりつけたんだな」

毛「あの、それでどうなったんですか？」

師「ヘリコプターがきて、たすけてくれたっけ。あとで知ったんだがよ、その岩からほんのすぐさがが、高さ三〇メートルくれえのでつけえ滝んなつてたんだな。あのまんま流されてたら、おれは氷にのつたまんま滝底へ真っさかさまだつたつてえわけだ」

毛「聞いてて、なんかも凄く疲れました。氷を木の棒で叩いたおかげで、えらい災難に遭ったんですね。貴重な体験ありがとうございます。

茅葺きの茅よりさびし秋の風

あらまあ、ちよつとした名句ですね」

ト「この句、とても好きである」

毛「あまりにも決まり過ぎているところが、ちよつと恥ずかしい気もするんですが」

ト「ぼく、ぜんぜん恥ずかしくない。日本の田舎の空気を肌で実感できる」

毛「まあ、師匠の怖ろしい体験談のあとでこういう句を読みますと、たしかにすこしこころが静まりますけどね」

二 お花見

毛「きょうはパロディ俳句鑑賞会はちよつとお休みです。

今回われら三人、吟行をしてみましようということで、こころ、お天気にも恵まれました東京郊外の有名な桜並木通りにやってきました。

道を挟んで両側ずらり満開ですね。この道をこうして歩いておりますと、青空がほとんどみえなくて、幾重にも被さってくる花びらの透き間からときどきその青い破片がみえるだけです。ほんとにびっちらと花だらけ」

ト「恐ろしや桜だらけで恐ろしや」

毛「トムさん、さっそく一句出来ましたね」

ト「日本人、なんでこんなに恐ろしいところにわざわざとおくからやってきて、みんなでぞろぞろあるいてるのか？」

師「どこが恐ろしいんだよ。おれあきようはもうたのしくって。お花るんるんお酒るんるん」

毛「トムさん、日本のお花見は初めてなんですか？」

ト「あつちに一本こつちに一本つて咲いてるのはなんどもみたけど、こんなめちゃくちや咲いてるとこきたのははじめて。巨大な生き物にとりかこまれてるみたいで、きもちわるくなってきた」

毛「トムさんの故郷にはこのようなどころはないんですか？」

ト「ぼくが知るかぎりでは、ない。それともうひとつわからないのは、なぜ桜だけがこういうお
おさわぎになるのか？ほかの花ではこういうことにはならない」

毛「まあ、梅の花なんかも多少こういうことにはなりますが、桜の比ではありませんものね。
たしかに桜だけは特別扱いされている気がいたします。天気予報なんかでも桜前線がどこま
で来ているかやっていますしね。桜の花が咲くと、日本人全体に暗黙の連帯感みたいなもの
が行き渡る。老若男女問わず、日本人全員があたりまえのように微笑みに近い目配せを交わ
しあう。ただトムさんがおっしゃるように、なぜ桜だけがそうなんでしょうね？」

師「ぱっと咲いてぱっと散るから、それが日本人にやあうけるんだって、よくきくけどな」
毛「でも、はかない一瞬の美しさを愛でる、それは日本人だけのものではないとおもいます。

それに、散っちゃっても来年の春にはまた咲くわけですから、はかない一生というイメージ
にも、よくかんがえればほど遠い。

それにいたしましても、さっきのマイクさんの『恐ろしい』というご意見、はじめて耳にい
たしました。青空のもとで栄養たっぷりの滴のような花びらをびっちり吹き出している光景
は、たしかに恐ろしいといえ恐ろしい、不気味といえ不気味。

深い山の林のなかで誰にみられるわけでもないのにひっそりと一本咲いている桜だとか、一
戸建ての庭先で小ぶりながらも世の中ぜんたいの桜にけなげに歩調をあわせてきちんと咲
いている桜なんかとはぜんぜんちがいますね。

あツいっけない。浮かれておしゃべりばかりで、俳句のこと忘れていました。さきほど、
はからずもトムさんが一句つくられたわけですが、つぎはわたくしの句です。

雨戸引けば水吸いあげし桜かな

はじめに申しあげました『半年前につくった一句』というのがこれです。家の裏庭に桜の樹
が一本あるんですが、ある朝、ひさしぶりにその所の雨戸をあげたとたん、びっくりする
くらいの満開になっておりましてね。

処女作発表ついでに、きょうここで前もって申しあげておきたいのは『季語』のことなんで
す。この句にはたまたま季語が入っておりますけど、わたくし個人といたしましては、季語
のあるなしは気にしておりません。季語を肯定するとか否定するとかではなく、気にしてい
ないということです」

師「おれなんか気にするもしねえも、ぜんぜん知らねえ」

ト「俳句に季語というものがあること自体、ついこのあいだまで知らなかった」

毛「まあ、三人似たり寄ったりといったところですね。ちよつと気が楽になりました。それに
たしましても、あらためておもうんですが、こんな三人を集めて『おくのうそ道』企画さ
れた編集長、じつにおおらかというか、おおざっぱというか」

師「なにかんがえてんだろな」
毛「おそらくなんにもかんがえてないんじゃないでしょうか。」

ま、われわれもなんにもかんがえずに引き受けたわけですから、おたがい様といえはおたが
い様ですけどね。つぎの句は、ついさつきつくったわたくしの第二弾。

散る桜ちりぬるさくら薄荷糖

師「ただの洒落じゃねえか」

毛「たしかに洒落です。語呂合わせ。でも頭韻や脚韻を踏む外国詩なんか読むと、ほとんどが洒落の連続といえませんがね。日本の現代詩にもたまにあります。二十一歳で行方不明になった東京の詩人の『ひぐらし』という詩があります。

しのびよる蒼ざめたさざめきにめざめ

しのしのとふりはじめるひぐらしのこえ

はるか原始よりうけつがれてきたさみしいさだめのしぐれ

このだれもない一画のすみずみにしみいろうとするつめたい虫の業で

ある

秋のはじめのゆうぐれのひかりのなか

このうつろいやすいやさしい蒼白のなかで

しのしのと

しのしのしのとしめやかに焦心する木のうえの蟬ひぐらし

賛否両論あるとおもいますが、まさに言葉の音楽。わたくしは大好きです。

まあそれにいたしましたし、こうして歩いておりますと、色々ないい匂いがしてきますね。

屋台もほんとに色々あって」

師「いま、あそこの蕎麦の屋台できれいな娘っこが蕎麦食ってっけど、即興で一句できたぞ」

毛「ではどうぞ」

師『花見にて』

蕎麦を呑むをとめの喉のくびれかな」

毛「いいですねえ。」

師匠、きょうはなんかいつもとちがって生きいきしていますねえ」

師「じつあな、こないだの腸の内視鏡検査でなんともなかったんだよ」

毛「そうだったんですか。そりゃあよかったですね。再検だとお聞きしていたんで心配していたんですよ。わたくしも、それ一度やりました。検査そのものもいやですけど、前処置が大変なんですよね。前日の朝から流動食がちょっとだけで、あとはやたら水飲まされて、何度も下剤かけられて、すっからかんにされちゃう」

師「腸検査うすばかげろうとなりにけり」

毛「同感です。」

トムさん、負けていられないですよ。さきほどから師匠とおんなじくらい飲んでるんですから、酔った勢いで、景気づけにもう一句いかがですか？」

ト「恐ろしや桜だらけで恐ろしや」

師「よっぽどこええんだな。眼が寄っちゃってる」

毛「じゃあ師匠、もう一句いかがですか？」

師「これは即興じゃなくてよ、きのう、やっぱここへ夜桜みにきたんだけどな、そんなときのやつ。

腸壁をくぐるがとき宵壁

両側にずらりと雪洞ともっててな、そのあかりうけた花びらが、こう、うねうね朱色にかさなりあってどこまでも。ほんと腸ん中にもぐり込んだみてえだったな」

毛「腸検査のときにみせられた内視鏡モニターテレビの映像がころのどこかに残っていたのかもしれないね。蕎麦の句とおなじく肉感的です。わたくしもやはり、きのうの夜、近所の林で一句つくりました。その林の中に一本、桜の木があるんです。

この闇に咲いているのか桜よさくら

ここみたいに雪洞なんかないし、月もたまたま雲に隠れてしまっていてほとんどなんにもみえなかったんですが、そのとき、ふとおもったんです。

『そうか、桜の花って、こんな真つ暗闇の中でも昼とおなじように花をひらいているんだなあ』って。ただそれだけのことなんですけど、なにもみえない闇の中でも、そしてわたくしたちがぐつすり眠っているときでも、ちゃんとけなげに花をひらいているってのが、ちょっと感動的でした。いままで気がつかなかったことです」

師「臭ッせえとおもったら、こんなところにこんなでっけえ糞が」

毛「なッなんなんですか、せつかく感動的な話しているのに」

師「犬の糞だよ。あつたまくるぜ、まったく、酔いがさめちまう」

毛「そんなもの珍しくもないじゃありませんか。どこにでも転がっております。もう

っ、きのうの感動が台無し」

師「でもよ。この糞で一句できたぞ。

花びらを頭にのせて犬の糞(くそ)

毛「あれま、いいじゃないですか。花びらを頭にのせた犬の糞が一体なにをかんがえているんで

しょうかね。ちょっとした禅の世界です」

師「便の世界」

毛「おっと、また地震《3・11の余震く注》ですな。これ、かなり大きい。

師匠にならって即興の一句、

乳母ぐるま地震(ない)に踊れる春の午後

ふーっ、詠んだとたん、地震おさまりましたね。ほんとに何度もしつこい地震です。

それにいたしましたしよ、これ潮時にもうやめようや。まだまだ桜並木つづいていますね」

師「地震もおさまったしよ、これを潮時にもうやめようや。あとはひたすら花見酒」

毛「そうですね。トムさんも、かなりお疲れのようですよ」

ト「恐ろしやもうやだこんなの恐ろしや」

毛「桜まみれのあと地震ですからね、無理もありません」

師「なにしにきたんだ、こいつあ」

毛「では師匠、最後に一句、それで締めてください」

師「道端にへたばりつきし落花かな」

毛「ありがとうございました。きょうは、晴れて風もなく、桜も満開。絶好のお花見でしたね」

師「おまけに一句。」

みあげれば良性ポリープばかりなり」

12 秋深き隣は何をする人ぞ

毛「先日のお花見、お疲れさまでした」

ト「二度とごめんである」

毛「きょうは、いつものパロディ句鑑賞会です。最初の作品です。」

開けやすき隣は何をする人ぞ

不用心な隣家を詠んだ句ですが、わたくしの友人のお隣さんがまさにこんな家だったそうなんです。ひとり住まいのお爺さんで、つい最近老衰で亡くなったそうなんです。生前不思議だったのは、その家、朝から晩まで、お爺さんがいるときもいないときも、とにかくいつも鍵を掛けず半開き状態だったこと。玄関も裏の扉も窓も、すべて半開きのまんまだったらしい。お通夜るとき、そのお爺さんが昔牧師をしていたことがわかったんですが、そのときはじめてみんな、異口同音に『ああそうだったのか』と納得したんですって。

家中鍵を掛けず半開きだったのは、つまり、来るひと拒まず、神への門はいつでも開けてありますよってことだったんだなって。

それでみんなして家の中の後片づけを始めたんですが、壁に掛けてあるかなり高価そうな額縁入りの絵が、どうしても壁からはずれない。絵だけじゃなくて、造りつけの棚に置かれたやはり高価そうな壺や花瓶なんかも、動かすことも持ちあげることできない。変だなんてよく調べてみたら、どれもこれも盗まれないように、強力な接着剤でがっちり貼り付けてあったんだそうです」

師「そんなてまひまかけるんなら鍵かけたほうがよっぽどはやかっただんじゃねえのか？」

毛「嘘のような本当のお話。崇高なおかたのかんがえることってよくわかりませんね。」

つぎの句です。『夜の定食屋にて』という前書があります。

秋深き隣は箸を擦る人ぞ

割り箸を割ったあと、それ、擦りあわせるひとすくなくなりましたね。あれって、いったいお行儀がいいことなのか悪いことなのか？どちらにいたしましたしても、この句をじっくり読むと、深まった秋の夜ふけのあまり客のいない定食屋の店内に、箸を擦る音だけが響き渡っている侘びしさが伝わってきます。わたくし、ひとがひとりで黙々ものを食べているうしろ姿をみると、なぜかうるうるしてくるんです。

腋臭き隣は何をする人ぞ

以前、電車のなかで、隣に座った上品そうな背広姿の紳士が凄く臭かったんですが、あれはほんとに厭だった。心底不潔な感じがいたしました」

ト「それが、草野球帰りのおじさんだったり、工事現場帰りのおじさんだったりすると、ああい

いなあとおもう」

毛「そうなんですよね。むしろお疲れ様って感じになって嬉しくなります。腋の匂いで嬉しくなるのも変ですけどね。ただ、盆踊りに一緒に行く道すがら、浴衣姿の彼女がちょっと汗臭かったりすると、それもまたいいかなとおもいますけど」

師「いいなおもうか、やだなとおもうかで、こちらがわのにんげん性もためされるわけだ」

毛「たしかにそうですね。芳香と感じるか臭気と感じるか。鼻腔に入ってくるものはおなじでも、それを区分けするのはこころの作業なんですよね。最後の句。

欲深きモナリザ何をする人ぞ

この句、よくぞ言ってくれましたって気がいたします。『モナリザ』って大ツきらい。

評論家はじめていたいのひとが口を揃えて、画面全体に漂っている神々しい空気感、微笑みが発する深く気高い精神性の仄かな微光が素晴らしいっていうわけです。

冗談じゃあない。わたくしなんか、あの表情からは、欲深くてずる賢い抜け目のない悪意に満ちた厭らしさしか感じ取れません。

モデルになった実在の女性が何していたひとは知りませんが、すくなくともあの絵の中のモナリザは、ひとのいい金貸し亭主を背後からたくみに操る強欲な女房か、安宿でけなげに働いている親思いの薄幸の少女をねちねちといびりまくる底意地の悪い女主人か、さもなくて、近所のこどもを叱りつけるとき平手で打つと音がしてまわりに気づかれてしまうのでそつと路地裏に連れ込んでからその幼いふつくらとした頬つへたをゆつくりゆつくりつねりあげる八百屋の後家女にちがいないんです、ぜったいに」

師「おもうぞんぶん決めつけたな」

毛「わたくし、幼稚園の頃、家の二階でおおきな分厚い本めくっていたら、モナリザの写真のページ開いちやったんです。暗い風景背中にしよって物凄い悪意を送ってくる感じでこつちを凝視めているんですよ。釣り込まれてこちらもついじつと凝視めかえしているとモナリザのまぶたがすつと窄まったんです。えっ？とおもったと同時に、喉の奥から『ひえー』っていう

じぶんの声があがってきて、全身に鳥肌がひるがりましてね。

もう慌てて本ほっぽり投げて、階段かけ下りようとしたんですが、腰が抜けていたのか膝にぜんぜん力が入らなくて、けつきよく途中から一階まで転げ落ちちゃったんです。右足の小指折りました。怖いから『ひえー』という声が出たのか、『ひえー』というじぶんの声に怖くなったのか、たぶん両方だったんでしょうけど、ひらがなではっきりと発音したことをいまでも憶えております。わたくし、大事な一生の始まりかけに、あの女に傷ものにされたんです。悪魔です」

師「いまのあなたの顔も悪魔みてえだぞ」

ト「だが、そういわれればモナリザ、腋のした臭そうではある」

毛「ねっそうでしょ。むんむん匂ってきますよね。あの太り具合からするとかなりきつい体臭発しているはずですよ。神々しい空気感や仄かな微光をめっちゃめっちゃにぶち壊してね。あー

臭い。なにが謎の微笑、なにが永遠の微笑ですか。こっちら微笑どころか爆笑です。

あの薄ら笑いに、わたくしはどうしても高い精神性なんか見い出せないんです。ってことは、描いたダビンチ自身にもそんな高い精神性があつたわけがないんです。それだけはたしかなんです。もし、そんな精神性があつたら、もうちよつとちがう表情になっていたはずだからです。まちがいない」

師「えれえ頑固だな」

毛「もうどうでもいいんです。欲深女、いんちき女。とにかくモナリザ大ッ嫌い。おしまいッ」

13 古池や蛙飛び込む水の音

毛「閑かさや蛙飛び込む水の音」

ト「これは『閑かさや岩にしみ入る蝉の声』の『閑かさや』をわざとそのまもつてきたということなのか？」

毛「それはまちがいないでしょう。おなじ作者の作品の上五を取り換えただけ。『こういうパロディの方法もありますよ』ということを示したかったんでしようね」

師「これはこれでけつこういい句だわな」

毛「おもしろそうですね、きょうは、ちよつとこのテキスト無視して、わたくしたちで芭蕉、どんだん混ぜあわしましようか。このパロディ句みたいに『蛙飛び込む水の音』をそのまま使つて、師匠、なんでもいいですから、つくってくださいませんか？」

師「夏草や蛙飛び込む水の音」

毛「いいですね。真っ青な空のもとで身じろぎひとつしない夏草の静と、一匹の蛙のひらりと光る動、そして気だるくも鮮やかな水の音」

師「これに生ビールと枝豆つけばいいことなしだ」

毛「こんな蛙をみていますと、こどもの頃のプール遊びを思い出しますね。」

頭から飛び込んだとたん、あたりの喧騒が一気に遠のいてっちゃって、聴こえるのはじぶんの鼻と口から吐き出される泡の音だけ。その泡が、頬や耳や首や胸やお腹を這ってゆくのがくすぐったくて、すごく気持ちよかったですね。あの、一瞬のシンとした孤独感」

師「それでよ、そのまんま水中でクルンッてあおむけんなんと、水面でお陽さまが巨大な海月みてえにゆらゆらゆれてんだよな。うひゃーってついさけんたら鼻に水がはいっちゃまって痛えの痛くないの、おおあわてで水面めがけてあがってったっけな」

ト「日本でも外国でもこどものころはみんなおんなじような体験してるようだ」

師「旅に病んで蛙飛び込む水の音」

毛「深夜、熱に浮かされて宿のせんべ蒲団であおむけに寝ていると、水の音が聴こえる。耳を澄ますと、それはじぶんの胸の水面に飛び込んでいる蛙の立てる水音なんです。波紋のひろがる水面に青い月の光が降りている。それは、よくなってゆく兆候なのか、悪くなってゆく兆候なのか」

師「なんばでもできる。」

蚤虱蛙飛び込む水の音

毛「旅の晴れた朝、蚤虱だらけの馬小屋で目覚めると、板戸のすきまから光とともに、池に飛び込む蛙の水の音が聴こえてくる。ぼんやりとした頭でその情景を眼に浮かべていると、旅の汚濁にまみれたおのれのこころと体がひんやりと洗われるような気がしてくるんでしょね」

師「どんだんその気になって、」

物いへば蛙飛び込む水の音

ト「とつぜんおおきなひとりとこといったら、蛙、たしかにびつくりして水にとびこむであろう」
毛「あ、こんなのはどうですか？最初の句とは逆に入れ替えて、」

古池や岩にしみ入る蟬の声

ト「これもこれでけっこういい句だわな。なんかわけがわからなくなってきた」
毛「そうですね。『閑かさや蛙飛び込む水の音』にしても、この句にしても、どこが悪いか指摘してみよ、といわれてもなんと答えていいかわからないですね。芭蕉の代表句をひとつあげてみよ、って試験に出されたら、うっかりこのどっちか書いてしまいそうです」
師「採点するほうも、うっかり丸つけちまつたりしてな」

14 くあらためまして〜

毛「前回は寄り道しすぎてしまいました。きょうはいつもどおりにパロディ句を味わっていきたいとおもいます。前回脱線してしまったので、原句は前回とおなじく『古池や蛙飛び込む水の音』です。最初の一句。

古池や蛙呑み込む水の音

古池が蛙を呑み込んでいるわけですかあ、なるほどね。

そんな古池のほとりで野宿せざるをえなくなった日にはほんとうに怖いでしょうね。うとうとしたかとおもうと、闇の奥で古池がぴちやりと生きものを呑み込む。うとうと、ぴちやり、うとうと、ぴちやり。そのうちに池のへりが月あかりの中、音もなくこちらにのびてやがてじぶんを呑み込みにくるのではないかとおもうと、おそろく一睡もできないでしょう」

ト「きょうこれから、寝袋かついで山歩きにいくつもりなのであるから、そういうはなしはしないでほしい」

師「あつというまに池の底まで呑み込まれ、首や足首になが髪のような水草が絡みついてきたかとおもうと、池ちゅうの蛭があちこちから群らがりよってきてトムを腹一杯吸いまくるんだな。トムの血でばんばんに膨れあがったおびたしいかずの蛭がまんぞくげに泳ぎまわる青い水の底で、トムはあつというまに生きながらにして骨と皮だけになってゆく。太りすぎのおめえには、あんがい、いいダイエット法かもな」

ト「このじじいをなぐってもいいか？」

毛「殴ってはいけません。ありうる話なのでから」

ト「そういうこというあんたをなぐってもいいか？」

毛「殴ってはいけません。ありえない話ではないのですから」

ト「山歩き、とつぜん、やめることにした」

毛「それは残念です。じゃあ、きょうはどっか腰を落ち着けてお酒にいたしましょう。

えーっと、つぎの句ですが、『八〇年ぶりの幼稚園の同窓会』という前書がついておりまして、

カラオケや飲まず歌わず見ず知らず

これは無視します。つぎ、『夕暮れの江戸川にて』という前書がついておりまして、

古糸やおかず飛び込む水の音

これも無視しちゃいましょうか？なんなんですかこれ。夕食のおかずにと、やっとなんとか一匹釣りあげたのに釣り糸が古かったために切れて逃がしてしまったという、よくもまあこんなくだらない句をつくったもんです」

師「そうかなあ。これいい句だなあ。このきもちおれあわかるなあ。おれもときどき江戸川に鯉釣りにいくけどよ、たしかにうまそうに太ったやつがいるんだわ。甘からく煮つけておきやあ、一週間ぐれえまいんち食べるからな。趣味で釣りしてんじやあねえんだな。夕飯がかかってんだよ、生活がかかっている。バツシャーンってひろがるでつけえ波紋みつけて呆然とつたつてるこの作者の姿、眼にうかぶなあ」

毛「だったらあたらしい丈夫な糸買ってきて釣ればよかったんですよ」

師「だから毛利ちゃん、あんたは『作家先生』なんだよな。あたらしい釣り糸買う金がねえんだよ。古糸つかわざるをえねえんだよ」

ト「鯉って不気味。あの、鱗やお腹の色やかたちが中国の古い怪談みたいで気味悪い」

師「なにわけわかんねえこといってんだ、こいつあ」

毛「いえ、なんとなくわかるような気がします。たしかに鯉の体って、物語めいた山村の黄昏を孕んでいるような気配がありますものね。なんていうか、泳いでいる魚体まわりだけが大昔にタイムスリップしているともいうか」

ト「ほかの魚の鱗やお腹みてもぜんぜん気味悪くないのだけど、鯉だけはやだ」

師「だから煮つけちまえばいいんだよ」

毛「最後の句です。」

古池や蛙飛び込む水ノート

水彩画のような、明るくて素敵な句ですね」

師「わけのわからねえ句だな」

毛「古池の水面を、水のノートと表現しているんですね。鏡のように静まりかえった池がこちらこちらに大きさまざまな丸い波紋を浮かべている。よくみると、池のほとりの岩の上から、あるいは池にむかって伸びている樹々の枝先から、蛙が飛び込んでいますね。巨きな水のノートの上に、蛙たちが、それぞれのやりかたで嬉しそうに丸い波紋を描いているんです。波紋はおだやかな春の陽射しを浴びてゆっくりとひろがり、やがて消えてゆくんですが、どこかでまた、あらたな波紋が立つ。おだやかに晴れた一日、たくさんの蛙たちが、古池にあ

たらしい生命をそそぎ込んでいる。いい句だとも思います。それではトムさん、今回は師匠
おひとり詠んでいただいたので、きょうは最後に一句お願いします」

ト「古家や買わずに住み込み雨の音

屋根が傷んでるから、雨の日は部屋中びちよびちよ」

師「だまってひとんちはいりこんでくらししてんのか？不法侵入でつかまっちゃまうぞ」

ト「あたらしい家たてるお金がない。信州の山歩きのとちゅうでみつけた廃屋であるが、いまの
ところだれも文句いってこない。ただ、いつ『この家のあるじはおれだ。でてゆけ』ってい
うやつがやってくるかわからないので、雨もりのする屋根、直してない。修理代たぶんかえ
してくれないだろうから」

毛「どうか無事にこのままやり過ごせればいいですね。

おかすが足りなくて夕暮れの江戸川でじっと釣り糸を垂れている師匠。

家を買うお金がなくて山奥の廃屋で雨に打たれながらじっと息を秘そめているトムさん。
そういうおふたりとお遭いできましたのも、俳句のおかげかもしれませぬ」

15 枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

毛「最初の作品。

カレンダーに黒丸つけたるや秋の暮

『友の葬儀の報せを聞いて』という前書があります。

秋の夕暮れの書齋で、受話器を片手に、壁にかかったカレンダーの日付のところを黒いマジ
ックペンで囲む。静かな作品です」

師「おれもしよっちゅうそういう報せもらうんだがな、お通夜のつぎの日に朝はやくつかから用事
あるときなんかこまるんだわ。死んじまった本人にはもうつぎの日なんてねえんだからそ
れでいいだろうが、生きてるにんげんにいわせりゃあ、もうちよつとずらして死んでくれた
らなとおもうわけだわ」

毛「でもこればかりは本人にはどうしようもないことですからね」

師「それにしてもよお、お通夜つてえのは故人を偲ぶつどいなんだろうが、おれの知ってるかぎ
り、故人を偲んでるやろうなんかいままでみたことねえな。もちろんおれもそうだけど。

こないだだつてそうよ。盆栽すぎだった故人の話題なんかがちらりとでてくることもあるん
だけだよ、そのはなしがきつかけんなって故人のおもいでばなしになってゆくんかなあとお
もいきや、これが盆栽づくりがいかにたいへんかなんて話のほうにとつとながれていっちま
うんだな。

話題からはずされた当の故人とはいえ、酒とたばこのにおいたちこめるわいわいぎやあぎ
やあのかたすみの棺桶んなかで、ぼつんとあおむけにねかさされて眼えとじてる。身内にとつ
ちやあ一大事かもしれないねえが、よばれていく他人にとつちやお通夜なんてもなあ大なり小な
りそんなもんよ」

毛「故人の死から眼をそむけたい、あるいは死そのものから眼をそむけたい、そういう心情もす

くなくからずあるのではないでしょうか」

師「たしかにそれはあるかもしれないねえな。だから。パークとやる。それでよ、ひと月くれえたつたころんなくて、ふっと、ああそうか、やつはもうこの世のどこにもいねえんだなっておもうことがよくある」

毛「そうですね。死ぬって、いなくなるってなんですかね」

ト「あたりまえのことではないか」

毛「あたりまえのことなんですけど、わたくし、そのあたりまえのことに、親が亡くなるまでは一度も気がつかなかった。なんか妙な話になりましたが、つぎの句にまいりましょうか。

枯枝に鴉のとまりたるや足に釘

動物愛護団体から抗議文が無い込んでくるかも」

ト「アメリカならテレビ局が殺到するかも」

師「読んでるだけでこっちの足の甲が痛くなってくるな」

毛「夕陽を背にして、枯枝の上で大きな翼を必死でバツサバツサさせている鴉の姿が眼に浮かびますが、誰がどうやってその足に釘を打ちつけたんでしょうね」

師「かなりの大仕事ではあるな」

毛「**俎板に鴉のとまりたるや秋の暮**

凄まじい作品ですね。おそらく、台所で料理しているとき、近所の奥さんか誰かに玄関先に呼び出されてつい長話になっちゃったんでしょう、で」

師「台所にもどってみると、床ちゅうに魚の臓物やら血のついた包丁やらが散らばってよ、窓しめわすれて風びゅんびゅんの調理台の俎板のうえにでっけえ鴉のつかってたらそりゃびつくりするわなあ。そいつがからだをゆっさゆっさ上下させながらこっちを睨みつけてる」

毛「しかも、背後にザンツと津波のような夕焼けを従がえている」

ト「犯罪現場」

毛「鴉って、どうしても悪いイメージが優先するんですが、なぜなんでしょう。全身まっ黒ってことが理由なんでしょうか？でも全身まっ黒っていうのは、よくよくかんがえてみれば、かなり格好いいんですよ。ダンディ。

それでおもうんですけど、鴉ってもの凄く悪食雑食でしょ？たいがいのひとが鴉に悪い不吉な感情を抱くのは、おそらくその悪食雑食という習性にたいしての無意識的な反応なのではないでしょうか？もしも鴉が草食だったら、誰でもがにこにこしながら腕をさしだして止まらせるとおもいます。肉食だとしても、鷲や隼のように一〇〇パーセント純粹に自然界の小動物などを狩りして食べているのであれば、むしろその精悍な姿に憧れの念、畏敬の念すら抱いてしまうんじゃないかとおもうんです。ただただ悪食雑食ゆえに嫌われている。

鴉にはなんの罪もないんです。よけいな先入観を極力捨てて、鴉の姿だけをみると、ほんとに美しいダンディな鳥ですよ。

それにいたしましても『枯枝』を『俎板』に変えるだけで、まったくちがう世界があらわれてくるわけですから、言葉っておもしろいですね」

16 塚も動けわが泣く声は秋の風

毛「肌寒くなってまいりましたね。きょうの原句は、ちょうど今時分の風景なんでしょう。では最初の作品。」

ツラよ動くなわが泣く額に秋の風

わたくしも師匠も、とりあえずいまのところは使用しておりませんが、かつらというものに並々ならぬ興味をもっていることは事実ですよね」

師「いちど、もらいもんつけたことあるけどよ、サイズあわねえから、裸電球にぞうきんかぶせたみてえになっちまってよ、すぐやめた」

毛「かつらという単語をツラと言い換えたのは誰だったんでしよう？たしかに、暑い日、汗だくの禿頭からかつらをひつべがすときなんかツラッて感じでしょうし、なにかの拍子にツルッてツレルこともあるでしょうしね。でもわたくし、このツラという言い方にはなんとなくおもしろい感じがするんです。」

どこにかつらのひとがいらっしやるかわかりませんから、この種の単語は、本来なるべく一瞬のうちにしかもぼかしをかけて言いたいのに、『かつら』と言ってしまうと、三つ別々の子音から始まるためか、発音するのになんと時間と時間を要するし、響きもメリハリがありません。ていつに聴き取られやすい。それにくらべると『ツラ』なら、瞬時に発音できますし、なんとなく濁点で濁らせることによって言葉の輪郭をぼやかすことができるような気がするんですよ」

師「おれにはかえってトゲがあるいいかたのようにおもえるがな」

毛「でも、すくなくとも『かつら』というするどい単語のカドを丸くしようとするところ遣いみたいなものが感じられるんですよ」

ト「ぼくのともだちで、まだわかいのにつけてるやつがいるのだが、ぼくだけに告白したそいつのはなしだと、つけてすこしかっこよくなったうれしさよりも、いつバレるかもしれない恐怖のほうがはるかにおおきいそうである。たかい金はらって恐怖の日々をおくってる」

師「とつくにバレてんじやあねえのか？」

毛「たぶんバレてるでしょうね。たいていの場合、ご本人だけがバレてないとおもっている。」

だから恐怖心が募るんでしょうけど、酷な言い方かもしれないませんが、それ、こころの無駄遣いなんですよ。しかも、まわりが知って知らんぷりしていることに気づいていない。ご当人の気苦労もわかりますが、まわりのにんげんもそれなりかなりの気苦労を強いられていることに、ご当人は気づくべきですよ」

師「かつらってやつはかなり罪つくりなやつなんだな」

ト「そのともだちも、まわりのともだちも、もちろんぼくも、みんなくたくたになる」

毛「いっそのこと、バツハやヘンデルみたいなかつら被って『どうだッ！立派なかつらだろ』ってやったほうが全員平和になるんじゃないでしょうか。」

垢(あか)も積もれわが棲む部屋は徹だらけ

相当汚いですね。わたくしも学生の頃、一度経験あります。

風邪をこじらせてひと月ほど下宿で寝込んだんですが、その間、朝の歯磨き、洗顔はおろか、風呂にも入らず、下着も替えず、もちろん掃除もせずだったんです。口の中は、もう黄色い鍾乳洞になっていましたし、腰までとどくねっとり光る長髪束ねて雑巾みたいに絞るとその絞り目にとりと脂が浮き出てきましたしね。下着の話は省略いたしますが、歩くと、掻き毟った肩や腕からちいさな薄いオブラートみたいな垢が花びらのように落ちるんです。黴で苔庭みたいになっている床のうえに、西陽を浴びた垢がひらゝゝと落ちてゆく光景はそれなりに美しかったですけどね」

師「おれの部屋のほうがまだましだな」

毛「では最後の句。」

つまみ寄せと我泣く前へ柿の種

『給料日前 小料理屋のカウンターにて』という前書があります。でも、たとえ柿の種だけではあっても、給料日前で空酒飲んでお腹すかして泣きだしそうになっている作者におそらくただで出してくれたわけですから、この作者とこの小料理屋、けっこういい関係なんですよ。ここまでするにはかなり長い月日を要したんじゃないでしょうか。

わたくし、ついこのあいだ、初めての小料理屋に行っただんです。ちよつと高級そうなお店だったんで、そのお店の前、何度か往復してからやつと入って行っただ。さあ、入ったはいいけど、運がいいのか悪いのか、眼の前のカウンターの向こうに、予期していなかった飛び切り美人の女将がいるんです。客はわたくしひとりだけ。緊張感が一気に走りましてね。

わたくし、『この店は初めてだけど、この程度の小料理屋は慣れてるんですよ』という身のこなしで、まずはとりあえずさりげなく隅っここの席に座りました。

『値段なんぞ、だからもちろんぜんぜん気にしておりません』という感じも出しつづけながら、壁にかかっているお品書きと値段にゆっくりとおだやかに視線を這わせ、安いものはないべく避け、高いものはもちろん避け、ちよつと高めかな？ ってくらいの、つまり女将がすこし『おっ』ておもうくらい値段のものをみつけたもんですから、そこで初めてさりげなく女将と眼を合わせました。

あらためて女将を正面からみなおすと、最初ちらりとみたときの印象通り、じつに静かにして、佇まいのいい女性だったんですが、もちろんそのときも、『美人には慣れてるんですよ』という感じを出したつもりです。そしてやや笑みを湛えながら、そのちよつと高めの料理とビールを注文したんですが、店に入ってからその注文をするまでのくらいの時間かかったのか、まったく憶えていないんです。かなり長時間だったようにもおもえるんですが、実際は、一分も経ってなかったんじゃないでしょうか。大仕事でした」

師「ごころうさん」

毛「なに注文したのか、それをどうやって食べたのかもまったく憶えていない。ひたすらビールを飲みつづけたことだけは憶えているんですけど」

師「なにしにいったんだ」

毛「ビール飲みに行ったことだけはたしかです」

ト「たかい金はらって恐怖の日々をおくってるかつらのともだちとおなじだな」

師「たかい金はらってころのむだづかいしてるわけだ」

毛「とはいってもかなり飲みましたもんで、だんだん身もころもゆるんできちゃいましてね。ほかに客がいなかったこともあって、女将からはちよつとした身の上話まで語られちゃったりしているうちに、もうしまいには、すっかりリラックス。すっかり粋な御上客様になっておりましたね。ところが、どのくらい飲んだ頃でしたかねえ、さあそろそろ帰ろうかという段になりました『お愛想してください』というつもりがね、ついうっかり『アガリにしてください』って言っちゃったんです。リラックスしていたつもりでしたが、やはりどこかが緊張して肩に力が入っていたんでしようね」

師「じゃあ、おかんじょうしてもらうつもりだったのに、お茶がでてきちまったわけだ」

毛「そうおもうでしょ？ところがどっこい。お茶、出てこなかった。ちゃんと勘定書が出てきたんです」

ト「なぜお茶がでてこないで、ちゃんと勘定書ができたのか？」

毛「そこなんですッそこなんです。内ポケットに手を入れながらいったわたくしのセリフ聞いて、するどくわたくしの本意を汲み取ったところが優しい女将は、わたくしに恥をかかせまいと、さりげなく勘定書を差し出してくれたんです。その優しいところが遣いが心底身に沁みると同時にもうもう心底恥かしくなりましたね。店にはいったときからとにかく恥をかきたくないという一心で来たのに、最後の最後で大恥かっちゃいまして、もう逃げるようにして店を出たのであります」

ト「日本語はほんとうにむずかしい」

師「こんどその店いったときにや気をつけるこつたな」

毛「二度と行きません」

17 蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

毛「最初の作品。」

いが栗のふたみに分かれ行く秋ぞ

なるほどねえ。これでもいいわけですね。ぱっくり割りたいがの中から実がはみだしちゃっている。蛤か、いが栗か。

花売りのかたみの轍(わだち)秋の暮

秋の夕暮れの道に、たったいま走り去った花売りの車のタイヤの跡が静かに残っている。すなおな作品です。それにいたしましてもわたくし、花の名前、まったくといっていいほど知りません。花の名前にすごく詳しいひとがいらっしいます。そういうひとの眼に映る花の姿と、わたくしの眼に映るそれとはちがうんでしょうかね。先日、ずっと

雑草だとおもっていた花がマーガレットという名前だということを知って、急に高貴な花におもえてきたんです。師匠のお名前が、一平ではなくてとん平だったとしてもそれほど変わりはないとおもいますが、純一郎とか英樹だったら、やはり師匠にたいするころの構えか

たがちよつとちがつてくるとおもうんです。こころの構えかたがちがつてくれば、当然、わたくしには師匠の姿、人柄がちがう風にみえてくるはずだとおもうんです」

師「芭蕉も、ちいせえころは金作ってなめえだったらしいな。」

松尾金作。さむい庭さきで鼻水たらしながら落葉はいてるガキだな」

毛「家の中から『金作ーっ、ごはんだよー』って声が聞こえてきそう。おおきくなってから芭蕉という名を名乗らなかつたらどうなつたでしょうね」

師『松尾金作のおくのほそ道』。ちいせえタウン誌のコラムみてえだな」

毛「名前いかんでそのひとの姿、人柄がちがう風にみえてくるとするなら、みられているほうもいつのまにかそれに応じようとして、意識的にしろ無意識的にしろ、相手にたいしてそれなりの態度なり受けこたえをするようになる」

師「純一郎師匠、なんてよばれて、あこがれの眼ではなしかけられりや、おれ、酒たばこやめるかもしんねえ。着物も帯ももちつと上等なやつにしてな」

毛「松尾金作のまんまだつたら、まわりのひとたちの評価は変わっていたかもしんないですね、どう変わったかは別として。芭蕉自身も、芭蕉と名乗るようになって、芭蕉風の生き方、芭蕉風の作品、そういったものをこころがけるようになったとしても不思議ではありません」

師「松尾馬生だつたらどうなつたかな？」

毛「師匠の良いお友達になつてくれたかもしんないよ。それではつぎの句にいきましょう。『娘とふたりで』という前書があります。」

あやとりの瞳に映れ窓の秋

ひとりあやとりもありますが、これはふたりあやとり。一本のあやとりの輪をたがいに両手の指でひろいあう遊び。作者が両の手の指に掛けたあやとりをさしだし、いままさにそれをひろいあげようと娘が両の手をさしだしてきている瞬間を詠んだ句ですね。

そのとき、娘のおおきくみひらいた瞳に、作者の背後の明かるい窓がくつきりと映つたんでしょう。風が吹きすぎてゆくようなすてきな作品です。原句とずいぶんかけはなれてしまっていますが、響きの似た言葉を探しているうちに、こんなところに来ちゃったんですね。

蛤をつまみに酔えば行く秋ぞ

蛤つてとても栄養バランスのいい食べ物だそうで、酒のつまみにはかなりいいそうです。酒飲みつて、あんがい体のことかんがえているひと多いんです」

師「おれあちつともかんがえてねえがな」

毛「そういうひとたまにはいらつしやいますが、でも、ほんとうに多いんですよ。かくいうわたくしも、そのひとりであります。」

夜、お酒を飲むと肝臓に負担がかかります。その肝臓を守るあるいは造る最重要最優先的な栄養素はたんぱく質ですから、一日中食事はつねにたんぱく質を念頭において選びますね。晩酌へむけて盤石の肝臓造りをしておくわけです」

ト「たんぱく質ばかり気にしてたら、栄養かたよるのではないか？それに肝臓のほかにもだいじな内臓たくさんある」

毛「いえ、肝臓さえ良ければいいんです。肝臓さえ良ければ死んでもいい、とさえおもっておられます。お酒飲みのほとんどはそうおもっているはずです」

師「おれあそうおもっちゃあいねえがな」

毛「とにかく一番大事なのは肝臓であり、たんぱく質なんです。

た・ん・ぱ・く・し・つ、このT音とP音とが絶妙にからみあう響き。英語でも、P・ロ・テ・イ・ン、やはりT音とP音とがからみあっております。これらの言葉の響きには、手の甲についたカタツムリのねばゝゝの粘液が乾いてゆくときのあのつっぱり感があるんです。肝臓のまわりについたたんぱく質の粘りが、やがてあたりの肝組織をひっぱるようになって皮膜化してゆき、最終的には肝臓そのものにゆっくり吸収され同化してゆく。肝臓をより丈夫な臓器に育ててゆくわけなんです。お酒で弱った肝臓をいきいきと再生させるのは、なんてったってたんぱく質の艶やかな粘りなんです。

さて、そのたんぱく質を含んでいる食べ物的高峰といえ、それは卵なんです。

これに異議を唱えるひとはいはないはず。ここ四〇年間毎朝、温泉卵二個、呑んでいます。朝食はそれだけ。息止めて呑み込んで、すぐに濃いアイスコーヒーを流し込む。そうすれば、卵の生臭みが胃に閉じ込められて、あとは呼吸しても臭いが鼻にあがってこない」

師「卵、すきなのかきらいなのか？」

毛「大嫌いです。卵かけ御飯だけは例外的に好きですが」

師「よくもまあ四〇年間ものあいだ、だいきらいなもの毎朝呑みつけてこられたもんだな」

毛「それは、とにかく卵はたんぱく質の王様だからなんです。肝臓の素だからなんです。朝の空きっ腹に半生状態消化抜群の温泉卵。完璧です」

師「で、かんじんの晩酌るときはなにつまんてるんだ？」

毛「居酒屋なんかでも、ほんとはすきっ腹で最初っからこんにやくなんかでやりたいんですよ。

そのほうがお酒おいしいし、なんてったって格好いいですからね。でもそれじゃなんとなく怖いんで、飲む前にしかたなく唐揚げなんかを二つ三つとりあえずもくもく食べる」

師「おれあ部屋で飲むときやたい塩だけだな」

毛「最高に格好いい」

師「こんなごちそうつまみながら酒飲むなんてえのはこの座談会するときだけ。そういや、この蛤の吸いもん、うまかったな」

毛「歯がほとんどないのによく食べられましたねえ」

師「歯茎でぶちきりぶちきり食ったからな、おわんの中、ぐっちゃぐちゃ」

ト『蛤のふためとみられぬ姿かな』

18 むざんやな甲の下のきりぎリス

毛「スザンナや臉の上のきりぎリス

『絵本』という前書があります。草原で昼寝している少女の臉のうえに一匹のきりぎリスが止まっている絵。スザンナちゃん、どんな夢みているんでしょう。臉にあたるきりぎリスの足

のトゲトゲ感は、きつとなんらかの形で夢に影響あたえているんでしようね。

夢の中で、誰かに追いかけて逃げてようとしても足がまったく動かない。しかたないから両手を蛙みたいに地面につけて体を前進させようともがいているうちに眼が覚めること、よくありますよね。そんなときは、たいていうつ伏せに寝ている。夢の中で足が前に出ないのはそのためなんじゃないでしょうか？」

ト「こどものころ、おねしよした夢みて、あざ眼がさめたらほんとにおねしよしてた」

毛「生身のじぶんの状態が、そのまま夢に反映されちゃうんですね。

ところが、どうかんがえても説明つかない夢つてのもあるんですよ。たとえばわたくし、津波に乗っている夢、よくみるんです。もちろん本物の津波をみたことは一度もない。

巨大な津波ののっぺりとした頂上で、わたくしは猛烈な向かい風に吹かれながら素足で立っている。群青の大気に全身を曝して、たったひとり、波乗りするように両足で立っているんです。やがて、のっぺりとはしているものの、もう大崩壊がはじまりかけているのか、そのまるやかな頂上付近にはちいさな泡が立ち始め、その泡が、海水に洗われてすっかり白くなつた両足のうらをくすぐり始めている。眼下はるか前方に大きな街がじつとうずくまっています、通りには人っこひとりいない。で、夢はいつもそこまでなんです。それだけの夢なんですけど、なぜそんな夢をわたくしがみるのか？ いまもってわからないんですよ。つぎの句です。

むざんやな座布団下のキリギリス

キリギリス、中身全部はみでちゃってますね」

19 旅に病で夢は枯野をかけ廻る

毛「芭蕉篇はきょうでおしまになります」

師「おれあ、がらにもなく古典に興味でてきてな。いま、けっこういろんなもん読んでるな」

ト「ぼくも、この座談会のおかげでいろいろな日本の古典読むようになった。日本のひとたち、日本の古典むずかしいというけど、ぼくにとっては、むずかしいという意味では古典の日本語も現代の日本語もどっちもおなじくらいむずかしいので、現代語よりも古典語のほうがむずかしいということはない。だから日本のひとたちよりもあんがい古典にたいして抵抗感はない」

毛「あッそーか、なるほどね。それ、気がつきませんでした。日本人は、古典を読むとき、ついいま使っている日本語と照らし合わせて読んでいくからかえってごちゃごちゃになるのかもかもしれませんね」

師「それによ、昔のむずかしいことばだとおもわねえで、どっか片田舎の方言だくれえにかんがえてお気楽に読んでればなんとなくなっていくてんだかわかってくる。それほどむずかしいもんじゃあねえ」

毛「さて、いまも申しあげたとおり芭蕉はきょうで最後になりますので、その意味もかねてきょうの原句は芭蕉の最後の句、かんがえようによっては辞世句ともいうべき『旅に病で夢は枯

野をかけ廻る』です。最初の作品。

たまに飲んでトメは枯野をかけ廻る

前書に『トメは今宵ひとり酒』とあります。察するにひとり住まいのお婆ちゃんだともうんですが、それにしてもなんで枯野をかけ廻っているんですかね

師「よっぱらった婆あが夜の枯野かけめぐったらちよつとこええな」

ト「あんたのかかあじゃあないのか？」

師「かかあの名前はトメじゃあねえ」

毛「パロディですから、名前くらい自由に変えられますよ。ただこの句、暗い感じはなくて、むしろ明かるく可愛らしい雰囲気があるんですよね。たぶんあたらしく好きなひとでもできたんですね。それでときどきそのひとのことをおもいだすと嬉しくて嬉しくてついひとり酒やって枯野に飛び出しちゃう」

師「だったらやつぱりこれ、おれのかかあじゃあねえな。かかあはいまもつておれにほれてるはず。ときどきおれの町にあらわれるのも、おれに未練がある証拠」

ト「だったらなぜ家にかえつてこないのか？」

師「そこがやつのかわいいところ。はじらいというものをまだもつてる証拠だあな」

毛「師匠の元奥さまは置いといて、このトメさん、やつぱり可愛い。老いても色気が枯れていない。そういえば『おくのほそ道』を読むかぎりでは、芭蕉の書くものには、色気がぜんぜんありませんね。『二家に遊女もねたり萩と月』にちろと女がでてきたりしますけど、そういうことではなく、つまり言葉自体に肉感的な艶というか体温がまったくない。だからこそ芭蕉なんじゃないか、と言われればそれまでなんですけど、やつぱり芭蕉を好きになるかならないかのひとつの分岐点ではありますね。言葉が二次元的で立体感がない。奥行きがなくべたーつとしていて。言葉それ自体の生命感がない。どうもわたくしの血肉の中にじかに沁み込んでこないんです」

ト「だからやつぱり旅行ガイドブック」

毛「たとえば、おなじ古典でも芭蕉よりはるか昔の清少納言の『枕草子』なんか、いま読んでもまばゆいくらいですよ。言葉のひとつひとつが感覚的だから、じつに立体感がある。艶も香りもぶんぶんしている。なにを書いているのかは二の次のことで、言葉それ自体が空間芸術になっている。

その点、芭蕉の文章は伝統工芸品的でじつと鎮座ましましていらっしやる。それがいいとか悪いとか、いつているんじゃないんです。そういう文学もあっていっこうにかまわない。ようするに読み手の好みの問題になるわけですからね。ただわたくし個人としては、芭蕉の文章、生理的にどうしてもびんとこないんです」

師「芭蕉、たしかにちよつとかまえすぎてんな」

毛「あとになって『軽み』なんてこと言いだしましたけど、『軽み』は唱えるものではなくて、実践するものだとおもいます、師匠みたいにね。つぎの句。『結婚式』という前書があります。

帯を解いて嫁は我もと食べまくる

たまにはこういう花嫁さんもあるんでしょうね」

師「なにかんがえてんだか。むかしやこんなのいなかったけどな」

毛「なにかんがえてんだかっていえば、結婚式って『なにかんがえてんだか』のオンパレードですよね。大事な進行役任されているのに、とにかく受け狙いのおしゃべりばかり並べている司会者。ほんとに腹立ちます」

ト「座談会の進行役まかされてるのに、だれよりもながながとじぶんのことしゃべりつづけるやつとおんなじ」

毛「座談会なら許されるんです。

それからあの、主賓スピーチというやつ。新郎にも新婦にもそれまで一度も会ったことのないらしいどっかの会社のお偉方がじつに親しげな様子で長々としゃべりつづけたあげく、じぶんの会社がいかにすごい会社であるかを得々とまくし立てたり。

それからあの、詩吟というやつ。きつゝでボタンの閉められなくなったスーツ姿のどっかのおやじがマイク片手に、新郎にも新婦にもなんの関係もない詩吟を、日頃のお稽古の成果を問う絶好のチャンスとばかり、終始一貫その場の空気を無視してうなりつづけたら、

それからあの、花嫁のお友達なんかが『おめでと、まりっぺ』なんて、甘ったるい愛称で呼びかけながら、じぶんたちだけにしかわからないような学生時代のエピソードを並べているだけのスピーチ。あんなもん、結婚式のあとの友人同志の二次会でやれといたい。

それからあの、生まれたときからいままでの写真なんかを延々とナレーション入りで映しつけているのなんか、馬鹿丸出し。あんなもん、他人様にみせるもんじゃあない。

それからあの、親への花束贈呈。じぶんたちの結婚式で、なんで親に花束贈呈するのか？

それからあの、花嫁による、いまままでお世話になった親への涙浮かべてのときれとぎれの切々たる手紙の朗読。

あーやだやだ。全身に鳥肌立ちますね」

師「あなたのむすめが嫁にいくときや、じゃあそういうのぜんぶやめちゃうのか？」

毛「ぜんぶ、すっかりやっていたきます。最後の句です。

雨も止んで夢は緑野をかけ廻る

前書に『ターシャ・テューダーの辞世の句』とありますね」

師「ターシャ・テューダーってな、だれだ？」

毛「世界的な絵本作家であり、また自宅の手造りのおおきなガーデンでも世界的に有名なアメリカの女性です。九十三歳で亡くなられたそうですが、彼女の辞世の句のようです。あのかた、日本語できたんですね。とにかく花や樹や動物が大好きなただったそうで、そういう光と空気に包まれて天寿を全うされたようです。この句、『旅に病で』とはおおちがいでですね。どち

からも生へのつよいおもいを表現していることでは共通していますが、ターシャさんの辞世句には笑顔がみえる。

きょうは芭蕉最終回にあたって、おふたりにも『辞世の句』をつくってきていただきました。
では若いトムさんからどうぞ」

ト「ママに抱かれふたりであの世をかけ廻る」

師「生涯マザコン」

毛「いえ、こうおもっている男のひと、けっこう多いかもしれませんよ。それでは師匠、最後に
しっかりと締めてください」

師「サバを読んで歳をこまかし生きのびる」

20 春の海終日のたりのたりかな

毛「きょうからは、テキストにあるとおり、原句は与謝蕪村となります。きょうの原句は『春の
海終日のたりのたりかな』

芭蕉のあとに蕪村を読みますと、長い冬のあとにやつとやって来た春の匂いが立ち込めて嬉
しくなります。蕪村の句にはこの世に生まれてきたことの喜びと悲しみが満ち溢れています。
隣の伯父さんって感じもありますね。毎日顔をあわせているわけではないけど、隣の家に棲
んでいるんだなっておもうだけで、こちらの気分が豊かになって浮きうきしてくる。そして
ときどき、庭に面した障子の奥からくしゃみが聞こえてきたりしてね。最初の作品です。

春の海終日どたりどたりかな

春の海関、なんだか弱そうなお相撲さんですね。稽古場で一日中投げられっぱなし。

朝の海秋桜コスモスゆらりしなりけり

秋の朝の浜辺、どこからか風がやってきてコスモスをそっとしならせている。ちょっと前ま
での真夏の浜辺の喧騒が、いまは嘘のよう。

たんに『コスモス』と書けばいいところを『秋桜』と書いてルビを振る、あんまりいい趣味
じゃないですけど、この場合、しかたなかったんだとおもいます。『ゆらりしなりけり』と
いう、ほそながい、たよらない、茎のようなひらがなのうえに、ルビ付きの『秋桜』という
漢字をのせることで、花の姿態を出したかったんじゃないか、とおもうんです」

春の海丸干しきらりきらりかな

原句とおなじく春のおだやかな空気感をだしていますね。すなおないい句だとおもいます。
春の海風を全身に吸った丸干し、おいしいでしょうねえ」

科(とが)のごと綾なす蛸ほたるかな

病み疲れたところの吐き出したため息がそのまま蛸となつて飛び交いはじめている。

冬の家終日ピシリピシリかな

冬晴れの乾燥しきつた日なんか、たしかに一日中、家の柱や床がピシリピシリ鳴っています
ね。いまの家建てた当初は、そのたんびに全身の神経がピシリピシリ切れそうでした。家が
いまに裂け目だらけになつちゃうんじゃないかってね。ハウスメーカーに問い合せたら、
木が生きている証拠ですからぜんぜん心配いりませんって笑われましたけど、ほんとうにも

う、家を建ててからの二年間くらいは、ほかにもどんなことが起きるかわからなくて、春夏秋冬、薄氷を踏むおもしろい日々でしたね。

わたくしの家は、玄関ホールから始まって、リビングルーム、ダイニングルーム、ピアノ室、二階の中央ホール、アトリエ、家族ひとりひとりの部屋、そしてトイレまで、ただひたすら全面ボーダーレスのフローリングなんです。それも黒にちかい深い茶色でかなり光沢もあるため、しーんとひそまり返ってもの凄い緊張感が漂っているんです。

ほんのちよつと埃が落ちてても、ほんのちよつと疵がついても、ほんのちよつと水滴がついてもいやんなるほどくつきり教えてくれる。じつに異常なくらいに感受性の鋭い床なんです。ですから、テーブルからグラスの水なんか零れ落ちようものなら、わたくしの脳裡にはすぐ『腐食』という言葉が浮かび、それにつづいて『崩壊』という言葉が浮かぶ。つねに最悪のシナリオが瞬時に浮かぶんです。

家が壊れるのが先か、じぶんが壊れるのが先か、そんな毎日を送っていたある日。

リビングルームに入って来た妻の抱えているお盆から、一家六人分のナイフとフォークが滑り落ちたんです。二年目の冬の夜の事でありました。

一瞬の出来事だったんですが、六本のナイフと六本のフォークが、それもこともあるうに尖ったほうを下にして、つぎつぎとスローモーション映像のように落ちてゆくのを、わたくし、妙にしっかりと凝視していましたっけ。それにつづいて、こっこっこっこっこっこっという床に当たる音が派手に聴こえたときは、なぜか拍手したいような気分になりました。そして意識がふつとうしろへ倒れたところまでは覚えてはいるんですけど、そのあとのことはまったく記憶にない。

気がついたときには、床も、わたくしのこころも、ひたすら守り通してきた純潔を踏みにじられて、無惨な疵ものになっていたのでありました。いまでも、きのうの出来事のように憶えております」

ト「ぼくなんか、壁や床にむかってダーツやってる」

毛「じぶんの家じゃないですからね」

師「万年床のしたの床板なんぞ、おれの長年の水分でちよつと抜けかかっている。朝めがさめたら床下で寝耳にミミズ、なんてことなるかもしれないねえな」

毛「大家さんの家ですからね」

師「てめえの家なんぞ建てるから、びくびく暮らさなきゃなんねえんだよ」

毛「でも、もう大丈夫なんですよ。その日を境に、わたくし生まれ変わったんです。憑物が落ちたっていうんでしょうか、いろんなことがあんまり気にならなくなりました。いまじゃ、リビングの壁紙で爪とぎしてる猫見ながら、コーヒー床にこぼしたり、換気扇も回さずにもくもく煙草吸ったりしてますから、しよつちゆう妻に叱られております。

それではここで蕪村さん歓迎会の意味も込めまして、一平師匠、一句お願いいたします。

師「江戸川の土手にねころんで蕪村読んでたらそのままうっかりねちまったもんで風邪ひいちゃまってな、昔の蓄膿がぶりかえしやがった。

鼻の膿(うみ)終日ぼたりぼたりかな」

毛「蕪村さんの初舞台、おもいっきり台無しにしていただきましてありがとうございます」

21 葱買うて枯木の中を帰りけり

毛「原句は『葱買うて枯木の中を帰りけり』どこかほのぼのとどぼけた味わいのある一シーンですね。大好きな作品です。では最初の作品、『終電車』という前書があります。

乗り越して枯木の中を帰りけり

お馬鹿さんですね。お馬鹿さんではありませんが真面目なひとであることもたしかなようです」
師「酔ってのりこしたつえば、おれも、中央線の終点高尾よくいったっけなあ。あと、いつだったか、夜、上野駅前の飲み屋のカウンターで飲んでたはずなのに、気がついたら、列車の窓のそとに朝の雪景色がキラキラ流れてたこともあった」

毛「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。飲み屋を出たことも改札通って列車に乗り込んだことも覚えていなかったんですね」

師「のりこしだけじゃなくて、酒じゃいろいろしくじった。

夜中眼えさめてしょんべんにいこうとしたら、よこ知らねえおんながでつけえ口あけてねていやがるんで、頭きてたたきおこしてきてみたら、そこ、おれんちから十軒くれえはなれた家だった。朝飯ごちそうんなってけえってきたけどなあ」

毛「わたくしも前歯、一昨年忘年会の帰りに電柱にぶつかって三本いっぺんに折っちゃった。

住宅街の夜道、ひとり歩いて帰ったんですが、とにかく、意識ははっきりと冴え返っているのに、どういうわけかふつうに歩けない。意志に反して上半身がひたすら右前方へ左前方へと大きくのめって倒れそうになるんです。そういうときは上半身が倒れてゆこうとする方向へかなりすばやく足を移動させなくてはいけないので、どうしても小走りになる。十二月の住宅街の夜道で、オーバーのポケットに両手つつこみ、鶏みたいに顔を前に突き出してあっちへトントントこちへトントントひとり運動会やっていたんですが、そのコースの途中にたまたま電柱が立っていたわけです。

口中血だらけになりながらおもわず辺りを見回したんですけど、とりあえず人影はない。どういう意味で言ったのかいまもってわからないんですが、なぜか『なめんなよ』ってつぶやいたのをおぼえております」

師「酔ってるときってよ、どういうわけか『なめんなよ』状態になるわなあ」

毛「とにかくお酒は控え目にいたしましょう。つぎの句にいけます。

是非問うて枯木の中を帰りけり

誰でも若い頃は一度や二度、こういう経験しているんじゃないでしょうか。友人たち同志で議論白熱したあと、ひとり帰り道、是非を問うたじぶんの行動に酔っている。ま、若いうちなら微笑ましくもあるんですが、いい大人になってもそのまんまというひとがいる。マスコミにかつぎあげられたテレビのコメンテーターなんか多いです、正義の味方。建て前だらけ」

師「コメントーターが本音ばかりいったらどうなるんだろうな」

毛「老人登山グループ冬山遭難救出現場からの報告聴きながら『えッ平均年齢75歳？いい歳こいて何かんがえてるわけ？ま、何もかんがえてないからそんな軽装備で冬山登っちゃうんだろうけど。とはいえ、こうゆうお馬鹿ジジイお馬鹿ババアたちがいるおかげで、ちよつと登山醫っただけのおれなんかにもお座敷かかるわけだから、あんまり文句はいえないんだよね』とかなんとか。おつぎは『還暦クラス会』という前書があります。

ねぎろうて枯木仲間と帰りけり」

師「これ、ほんとわかるな」

毛「口惜しいけど、わたくしも。ついこないだも料理屋でクラス会あったんですが、終わって外に出たとたん、仲間のみんながたしかに枯木にみえました。

クラス会の宴がはじまったところは、ひさしぶりの再会でおたがかなり老けたことにびっくりしながらも、だんだんお酒が廻って、何々君、何々ちゃんなんて呼びあうようになってくると、すっかり昔に戻っちゃう。相手の顔の奥にある昔の顔に向かって話しかけている。当然、じぶん自身も昔の顔に戻ってその顔でしゃべっている。宴全体が大きく昔にずれ込んじやっているんですね」

師「そいでよ、そのまんまえへらえへらいいこんころもちで鼻歌まじりに表でてくとよ、そこをやほんもんのわけえ連中がわんさかあるいてんだな」

毛「そこで、えッ？て現実に戻る。戻った眼で仲間をみれば真正銘の枯木ばかり」

師「とくに毛利ちゃんくれえの年よりにはじめのころってえのは、そのさかい目がわかんねえんだな。気がついたらいつのまにか年よりんなってる。それもじぶんできめるわけじやなくてよ、ひとさまがきめてくるんだな。さからいようがねえ」

毛「で、なんか、さみしくなって、ねぎらいあいたくなくなって、このまま帰りたくなくなって、二次会やりたくなるんですね。誘うとみんな異議なし。よし行こうってことになる。みんな、おんなじ気分なんですな」

師「で、たいていカラオケ」

毛「『最近の歌は横文字だらけで歌いづらいなあ』なんて言い訳しながら、たぶんその日までかなりひとりカラオケなんかで練習してきたらしい歌、じつに得意気に歌いだすんですけど、その歌がもうすでに二十年くらい前に流行った歌なんですよね」

師「泣けてくるな」

毛「ほんとにね。アップテンポで賑やかな歌を、リズム感悪く、必死に汗だくで歌っている姿をみておりますと人生の哀感がひしひしと身に沁みてきましたね。みんないろいろなことがあったんだろうなあってしみじみとおもう一夜でありました」

22 寂として客の絶間のぼたん哉

毛「この原句、客足の絶えた牡丹苑の情景を詠った句である、という解釈もあるようですが、わたくしは室内の情景を詠ったものと解釈しております。ですから、きょうはそのわたくしの

解釈を前提として話をすすめちやいます。最初の一句。

寂として客の絶間の釦(ボタン)かな

来客同志の派手な喧嘩があったようですね。誰もいないしんとした畳のうえに釦がいくつか転がっている。積りにつもった確執のぶつかりあいの果てに、残ったのは数個のちいさな釦だけ。そんな釦たちの可愛らしい表情が一種のユーモアを醸しだしていますね。

寂として大統領(ボス)の居ぬ間のボタンかな

これはもつとも醜い争い。全面核戦争。

席混みて連なる客の手酌かな

全面核戦争から一気にズームインして、居酒屋のカウンターですね。

わたくしが昔よく行っていた駅前商店街の居酒屋。そこ、せいぜい十人くらいしか座れないカウンターの店なんですけど、満員のときでも客が入ってくる女将さんが裏口から椅子ひっぱり出してきてむりやり座らせちゃうから、もうぎつちぎち。肩をすぼめて全員両手をそろりと前に伸ばし、右手にお銚子、左手にお猪口、それを手首だけ動かして手酌することになるわけです。なんでここまでして飲むかなあ？と、ちよつと阿呆らしくなってくるんですけど、まわりをみると、みんなおんなじ風にやっている」

師「みんな、みえねえ手錠かけられたみえになるんだわな」

毛「やつとお酒をついででも、さあそのあとがまた大変。お猪口持った左手首をそつと内側に捻じ曲げるまではなんとかできるんですが、その格好のまま、なみなみとついでお酒を零さずに口まで運ぶのはかなりむずかしいですから、どうしても口のほうから出かけていかなきゃならない。首をぐつと前にもついでって、唇突き出してやつとお猪口のへりにたどり着く。たどり着くにはたどり着くんですけど、首を伸ばしたまんまですから、ぐびりつて飲むわけにはいかない。とうぜん啜り込むということになる。

首伸ばした状態でお爛したお酒を啜り込むとどうなるか？ほとんどのひと、噎せます。両手に手錠かけられた格好で、みなさん、あつちでこほこほ、こつちでこほこほ。

日本酒ですらそれなんですから、ビール手酌しているひとなんか、もつと大変。飲んで空になったコップをすーつと前方に押し出しては、ビール瓶の一番下のほうを両手で挟むように捧げ持ちあげてチョコボチョコボとそそいでいる」

師「なんとなくなつちしよんべんしてるみてえな気になる」

毛「その店、特別お酒や料理おいしいわけでもないし、その女将や女の子たちだって特別美人でも愛想いいわけでもない。ところがいつ行っても満員状態」

師「たしかにどの町いっても、そういう店、かならず一軒はあるんだな」

毛「けつきよく、あの狭さなんでしょうね。むんむんとした煮たような狭さ」

師「せまくてみうごきできねえとわかれば、『じゃあじつとしてればいいんだな』って、みようにあんしんできるんだわ。で、そうやって手酌でやっていると、いいところもちでひとりつきりになれる。カウンターにや、ひとりつきりがずらーツとならんでる」

毛「みんなひとりつきりなんですけど、ひとりぼっちではない。妙な連帯感みたいなものが、店

中に充滿しているんですよね」

師「長屋ぐらしとおんなじ」

毛「夜の舗道にその狭いこった煮の店から赤い光が洩れてくると、いつのまにやらみんな、誘蛾灯に吸い寄せられる虫のようにその店に集まってくる。」

咳払いして客の絶間の鰻かな

出前の鰻丼が届いたとき、運悪く不意の客が来たんでしようね。で、大あわてでどこかに隠して、客が帰ったあとひとりだけでゆっくり食べたんでしようけど、なぜか食べる前にコホンと咳払いせずにはいられなかった。この作者、可愛い」

師「おれなら、客のめのまえで食っちゃまうな」

毛「昼飯時になんの前ぶれもなく不意にひとさまの家訪問するこの客が無神経なんですからね。そんな客に遠慮することないんですよ。それとは逆に、ひとさまの家に不意に誘われてどう処したらいいのか、わからなくなるときがあります。」

連日猛暑がつづいていた夕方だったんですけど、ときどき居酒屋で顔をあわせるひとと道でばったり会いましてね。是非、と誘われるまま彼の家でアイスコーヒーを出されたんです。暑くて喉がからからのときに、美しい奥方から静々と眼の前に差し出されたうつつら水滴まどったグラスのアイスコーヒー、先方の心遣いに深く感謝いたしました。

でも、それでその夜のビールの最初の一口が台無しになるかもしれないですよ。迷いました。悩みました。そんなものを出してきた先方にちょっと腹も立ってきました。ところが腹立ちながらも、ちよいと一口飲んだらこれがキンキンに冷えてておいしいのなんの。けっきよく全部飲み干してしまっただんですが、もうなんだか口惜しくってくやしうって」

ト「だったら飲まなきゃいい」

毛「だって喉、からからだったんですから、しょうがないじゃありませんか」

ト「のどがからからのにんげんにキンキンにひえたアイスコーヒーだすのはわるいことなのか」

毛「その場のおもいつきで、安易にアイスコーヒーを出す神経はやはりおかしい。」

だってその友だち、わたくしの飲み友だちなんですから、わたくしが夜のビールの最初の一口をいかに楽しみにしているか知っているはずなんです。わたくしが勝手に訪問したんならこちらにも非があるかもしれないませんが、先方から強く誘ってきたんですよ。おなじ酒飲みであればすくなくとも、暑い日、晩酌が間近に迫った頃にキンキンに冷えた飛びつきりおいしいアイスコーヒーをわたくしに出すことがいかに非常識であるか、わかってたはずなんです」と「わかるようなわからないような」

師「さそれたにしろなんにしろのこゝろ友だちん家にあがってったあんたがわるい。てめえの流儀を崩されなくなかったら、てめえん家でじっとしてるんだな」

23 月天心貧しき町を通りけり

毛「きょうの原句、一見どうってことのない句なんですけど、一度読んだらなぜか忘れられない大好きな句です。一行絵本。」

寿司天井貧しき町を通り過ぎ

『出前』という前書があります。たしかに、お寿司屋さんとか天麩羅屋さんとかの出前は、貧しい町なんか無視して通り過ぎちゃうでしょうね」

師「となりのお屋敷町にいつちまう。おれんちのほうじゃ、出前っちゃ蕎麦屋だけ。それもせいぜいが、たぬき蕎麦」

毛「そういえば、こどもの頃我が家で取るお蕎麦屋さんからの出前、たいいたぬき蕎麦でしたね。父も母も姉もわたくしも、みんなカレー鯉鮓が大の好物だったんですけど、カレー鯉鮓、高いんですよ。で、たぬき蕎麦。

嫌いじゃあなかったけど、それほど好きでもなかったですね。ただ、『きようは久しぶりに出前でも取るか。なんでもいいよ。なんにする？』っていわれると、かけ蕎麦っていうのも親のプライド傷つけそうな気がするから、ちよつと高いたぬきを頼むんです。すると父も母もほつとしたような、ちよつと照れ臭いような感じでにっこりして『じゃあ、みんなたぬき蕎麦でいいんだね』なんて、電話するんですね」

師「ほんとはみんな、カレー鯉鮓食べてえのにな」

毛「ほんとはみんなカレー鯉鮓食べたい。でも、みんな、たぬき蕎麦大好きみたいな顔して全員一致でたぬき蕎麦を頼む」

師「むかしの下町のガキって、近所の爺いや婆あたちにけっこうもまれてそだったからよ、がさつなようできて、あんがいおとなのきもち知ってやがったな」

毛「ある意味、やなことだったかもしれないね」

師「カレー鯉鮓でもなく、かけ蕎麦でもなく、たぬき蕎麦」

毛「届けられた井の中の汁を吸った天かすが、親子四人の微妙なこころもちを無言で語ってしまいましたね。ただ、月に一度、姉とふたりだけで銭湯に行く日があつて帰りにそのお蕎麦屋さんに入るんですが、そのときだけはカレー鯉鮓でした。父と母が外出してしまつて姉とふたりだけになる日が月に一度あつたんです。

でも、なぜ月に一度そういう日が来るのか、わかりませんでした。

その後おおきな家に引越してから銭湯に行くこともなくなり、いつのまにか父と母の外出もなくなり、ずーつとそのこと忘れていたんですけど、結婚して父親になり、こどもたちもあの頃のわたくしとおなじ年頃になっていたある日、ふと、なにげなくそのことをおもう出したんです。で、そのとき、突然気がついたので。父と母は、月に一度、幼い姉とわたくしふたりを留守番させて、一体どこに行っていたのか？

かんがえてみれば、あの昔の家、襖で仕切られた六畳二間だけでしたからねえ」

師「きづくのおせえよな、毛利ちゃん」

毛「ほんとにね。かなり遅まきながらですけど、そのことに、はたとおもいあつたんです。

おもいあつたとき、体が花びらみたいにふわあーつとひらきましてね。その花びらの一枚一枚にさあーつと光があつてきて、もうほんと、幸せ一杯になっちゃいましたね。ああ、そうだったんだあつて。嬉しかったなあ。父も母も、若き男であり若き女だったんですね。

父と母をそういう角度からみたこと、それまで一度もなかったもんですから、もうほんと、嬉しくてうれしくて」

師「たぬき蕎麦たのむくれえのころづかいできてたくせによ、そんなわかりきったこと、そんないい年んなるまで気がつかなかったわけだ」

毛「間抜けでした。いまは、その父も母も上野の不忍池の畔で静かに眠っております。」

雪しんしん貧しき町に灯を点し

原句とはまたちよつとちがう味わいのある童画ですね。この句は夜の風景ですけど、何年前の冬の朝、眼がさめて外に出たらたつた一晚のうちに風景が一変しております、まっ青に晴れ渡った空の下、街がすっぽり雪に覆われていたんです。街全体が発泡スチロール吹き付けた映画のセットみたいですね。作り物みたいで、人間臭がしないとか、清潔な虚空間とか、不思議な感覚でした。覆いつくした雪が、空中の物音を吸い取っちゃっている。玄関先に積もった雪が凍ってドアが開かない家もあれば、タイヤが空回りして身動きできなくなっている自動車もある。わたくしの家も風に吹きつけられた雪で窓が開かない。そんな風景みていたら、なんとなく、ざまあみろって気になりましたね。街もにんげんも、たつた一晚の雪で、たどころに身動きできなくなりましたわけですから、ざまあみろとでもいうしかない。じつにすがすがしい朝でありました。

春爛漫お花がただで咲いており

ト「春、山歩きしていると、ほんとにあつちにもこつちにも、いろんな花がただで咲いてる。あんなきれいな色つけて咲いてる花、ほんとにただでみていいのかなとおもうくらいにびっしり咲いてる」

毛「自然って、どれもこれもただなんですよね。野の花もただで咲いているし、鳥もみんなただで飛んでいる。生き物だけじゃない。海も山も湖もみんなただ。あのオーロラだってただなんです。オーロラがただだなんて信じられますか？ただで、あんな夢のように光って夢のように揺らいでいるんですよ。自然界に存在するすべてのものたちは、われわれが眼をひらきさえすれば、いつでもどんなときでもただでじぶんの姿をみせてくれるんです。

これ、凄いことです」

24 ゆく春やおもたき琵琶の抱きごころ

毛「与謝蕪村は、きょうが最後になります。『ゆく春やおもたき琵琶の抱きごころ』。読んでいるこちらのてのひらも仄かに汗ばんでくるような作品ですね。最初の作品。

ゆく春や冷めたき岩の夕ごころ

ト『夕ごころ』ってなに？」

毛『夕ごころ』は『夕ごころ』なんです。説明のしようがないんです。その言葉を味わうしかない。もちろん、英語に翻訳することなどまず不可能でしょうね」

ト「ゆづごころ。たつたの五文字なのにぜんぜんわからなく」

毛「平成の塵なき庭の静ごころ」

『古社にて』という前書があります。散策の道すがら、歩みを停めてふとみると、古い神社の庭が塵ひとつなく掃き清められている。昔も、おそらく朝夕、神官たちが丹念に掃き清めていたであろう庭を、平成となったいまも、おそらく朝夕、神官たちが丹念に掃き清めているんですね。代々のひとびとのさりげなくくり返してきた習慣が、現代もじつにさりげなくくり返されている。昔のひとびとの眼にしたであろう庭が、いまもそのままの姿で、静かにそこにある」

ト「神社って、とても清潔な感じがする。かわいていてさらさらしている」

毛「ま、神社にもよりますけど、たしかに境内に入ったとたん木と石の世界で、さあーっと体がきれいになる。で、背筋がきゅつとなる。神社ってそういうところなんですかねえ」

ト「シンプル」

毛「そうですね。夾雑物というものが無い。印象としてはすべてがまっすぐで、素朴。古代の風が吹いている」

ト「それにくらべて、お寺は、こてこてしてるし、なんとなくしめってるし、からだもきれいにならないような気がする」

毛「ま、お寺にもよりますけどね。でも、いわんとするところはなんとなくわかります」

師「線香のにおいのせいかな？」

毛「どうなんでしょうねえ。線香の匂いがあるとたしかになんとなく鬱陶しくなりますからね。

すくなくとも、体がきれいになるって感じにはなりませんね。あるいは、神道と仏教のちがいが、その底にはあるのかもしれないですね。そのかわり、お寺のほうが入りやすいって気がしませんか？」

ト「するする。というか、神社って、清潔でシンプルなのはいいんだけど、しずかにじっとしているだけで、むこうからすりよってきてくれない」

毛「色白の凛々しい美男子っていう感じだね。けっして冷めたくはないんですけど、声かけてもいいのかな？って、ついおもってしまう。しかも、その土地にずんツと根を張っているから、こちらは他国者みたいなちよつといじけた気分になっちゃうんですね。その点、お寺って、ふんわり愛嬌あります。

ゆく春やおもたき腹の抱きどころ

『身籠りて』という前書があります。この句読んで、妻が初めての子を身籠ったときのこと、おもいだしました。かなりお腹が目立ってきた頃、どちらからいいたかは忘れましたが、わたくしと妻ふたりだけの最後の旅行をしようということになって、横浜のホテルに一泊したんです。あまり遠出は無理なので横浜あたりがちょうどいい、ということですね。

翌朝の晴れわたった山下公園の、海に面したベンチ。

隣で両のてのひらをお腹にのせて眩しそうに眼を細めながらじつと海をみている妻の顔をみていたら、おたがいまったくの他人として別々の土地で生まれ育ってきたにんげんなのに、そんなふたりがいまここにこうしておなじベンチに座っているのが、じつに不思議におもえてきましたね。しかも、その妻のお腹にはふたりのしめしあわせの賜物であるひとりのこと

もがずっしりと実在しているんですから、不思議以外の何物でもなかったですね」

師「かかあ、いまだどこにいるんだろうなあ」

毛「最後の句にいきたいとおもいます。」

夕月や路傍の石も眼をとじて」

ト「『路傍の石』』といういいかたがおかしい。石というのはもともとみんな路傍の石だ。わかりきってることを、なぜわざわざいうのか？」

毛「理屈的にはマイクさんのいうとおりですけど、言葉の調べにすなおに乗ってしまえば気になりません。夕月のもとで眠りにつこうとしている路傍の石をじつにおだやかな視線で詠んでおります」

ト「石に眼なんかあるわけないし、石がねむるわけもない」

師「やけにつつかかるな。なにかあったのか？」

ト「きのう、ママと電話していてけんかになってしまったのである」

師「どんなはなしをしたんだ？」

ト「日本では、蛙が池に飛び込むと水の音がするんだよって」

毛「そしたら、ママはなんと？」

ト「あたりまえではないかって。」

なんでそんなあたりまえのことにおまえはおどろいているのか。まえからおもったことだけど日本にいつておまえのあたますこし変になったみたいだって」

師「ま、いುದらうな」

毛「ほかにはどんなお話、したんですか？」

ト「日本では、柿を食べるとお寺の鐘が鳴るんだよって」

毛「そしたら？」

ト「これもまえからおもったことだけどおまえのあたまが変になったのもたしかだがそもそも日本という国が変なのではないかって」

師「ま、いುದらうな」

ト「それから、日本では、蝉が鳴くと閑かになるんだよっていったら、とにかくはやく帰ってこいって」

毛「よく説明してさしあげたんですか？」

ト「くわしく説明したつもりなのだが、あまりよくつたわっていないようなのである。英語で、よりただしく日本の文化とか生活とかを説明するにはどういいういかたをすればいいのか、ほんとにむずかしい」

毛「電話の場合、顔の表情とか身振り手振りがみえませんがね。ママにはとりあえず言葉で、つまり英語で、つまり理屈で、説明するしかない」

ト「まえにも、日本では、蠅がなにかをまきちらすように手足をこしこすりあわせているときはぜったいにころしてはいけない、じつとやさしくみまもってあげなければいけないんだよっていったら、先進国だとおもってたけど、日本はいつたいなにかがえてるんだっ

ておこってたし、日本では、秋になると隣の人が何をするかわからないから気をつけたほうがいいらしいっていったら、ガチャンツで電話きって二週間後におもたい錠前セット五ツもおくってきた」

師「トムとしては、まちがったことはひとこともいってねえわけだ」

毛「トムさんなりには、ある意味、じつに正確に日本を伝えている」

ト「それなのに、ママは、いつもいつもぼくをおこるし、しんばいするし、はやくそんな日本すててかえってこいっていう。きのうもきんさんあーだらこーだらおこったあと、いまだんな家でくらししてるのかときくので正直にこたえた」

毛「なんていったんですか？」

ト「咳をしてもひとり、なんだよって」

毛「そしたら？」

ト「なんにもいわなかった。ただ・・・」

毛「ただ？」

ト「泣いてるみたいだった」

毛「蕪村、終わります」

25 我と来て遊べや親のない雀

毛「きょうからは小林一茶です。芭蕉、蕪村、一茶と来たわけですが、三人とも俳号が植物なんです。つい先日気がつきました。三人のこころの奥底には、やはり日本の草木が揺れていてたんですね。もちろん、タイプはそれぞれ。芭蕉が、名前は知っているけれどまだ一度も顔をあわせたことのない学者肌のおじさんだとすれば、蕪村は、外ではたまにしか顔をあわせたことのない隣のおじさんであり、一茶は、道でしょっちゅう顔をあわせるけれど一体どこの誰なのかまったくわからないおじさんって感じですね。

一茶の句は、あかるいといえばあかるいんですけど、どこかスコーンと底が抜けたような虚無的なあかるさですね。きょうの原句は『我と来て遊べや親のない雀』では、最初の作品。

影踏みて遊べや親のない雀

『蕪村作』という前書があります」

師「うそにきまつてる」

毛「でも、たしかに蕪村ならこう詠みそうな気がいたします。雀が、地面に映るじぶんの影を踏みながらひとりで遊んでいる。その雀、親がない。原句は原句ですばらしい句だとおもいますが、これもいい。

腹抱え笑えや骨のないスルメ

金網のうえで炙られてめくれ返っているスルメ」

ト「日本にきて、はじめてみたときびっくりした。ひらべったいおおきなスルメが、あつというまにちぢんで葉巻みたいになるまった。居酒屋のカウンターの値段表には三百円とかいてあったのだが、あつというまに百円くらいになってしまった。すごくソクした気がしたのであつた」

師「腹いれちまえば、ふやけてふくらんでまた三百円になるから、しんばいねえんだよ」

毛「**彼と来て並べや親の眼の前に**

『我が娘よ』という前書があります。わたくしにも嫁入り前の娘がひとりおりますから、ちょっと身につまされます」

ト「ジェフというすぐくまじめで正直で物静かなともだちがいるのであるがかれが、やはりぼくのともだちのさちこにつれられて、まだ一度も会ったことのないさちこのおとうさんに結婚のお願いにいった。ジェフ、おとうさんの待つ部屋に入るなりあぐらをかいて、たどたどしい日本語で『さちこをくれ』といったらしい」

師「たしかにガイジンに正座はむりかもな」

ト「そしたら、しばらく腕くんで眼つぶってたおとうさん、しずかに眼をあけると表情かえずに『いくらで?』といったらしい」

毛「そういたい気持ち、じつによくわかります。わたくしだって、そういうでしょうね。相手が外国人であろうが日本人であろうが、ふざけんじゃあねえーんだよってね。どんな気持ちでここまで育ててきたか、すこしでもかんがえたことあんのかよってね。そしたら、ジェフさん、なんと?」

ト『ただで』といったらしい」

毛「そしたら、お父さん、なんと?」

ト『じゃあ、あげない』って」

師「で、ふたりはどうなった?」

ト「わかれた」

毛「最後の句です。」

ホラ吹きて腕組む舌のないグルメ

テレビでも、こういう自称グルメが大きな顔して偉そうなことのたまわっていますね」

ト「このあいだ、グルメ番組によくでてる大学教授の家で『トム君、これ最高級のお茶だよ。これぞ日本茶』といって、じしんまんまんの顔でごちそうしてくれた」

毛「いかがでしたか?」

ト『せんせい、これ、ふつうのお茶に味の素いれただけではないのか?』といったら、せんせい、庭みつめてだまってしまった」

毛「マイクさんの舌、正直だとおもいますよ。たしかに高級煎茶って味の素の味がするんですよ。」

お茶っていえば、よく、熱湯でいれてはいけない、いったんすこし冷ましたお湯でいれるほうが味も香りもより良くなるっていいですよ。でもね、わたくしにいわせれば、冗談じゃあない。お茶というものは、ぐらんぐらん煮え立ったお湯で淹れた渋いやつを、ふうふういいながら飲むのが一番なんです。いくら味が良くて、いくら香りが良くて、ぬるくなってしまうたら、それはお茶ではないんです。ぬるい、というその一点で、お茶失格。

それです。お茶の楽しみは飲むことだけにだけあるのではないのです。急須の中のお茶の葉にお湯をそそぐこと、その行為自体もお茶の楽しみの中の重要なポイントなのです。

そのときにねッ、ぬるいお湯そいでどうすんです？おかしいじゃありませんか。ぬるいお湯そいで、お茶のエキス、出し切れますか？出し切れません。熱いお湯をそそぐことで、はじめて出し切れるんです。その『出し切ったな』っていう満足感も、お茶をするときの醜味のひとつなんです。緑の茶葉が熱湯にほじめて、たつぷりと溜め込んできた茶畑の陽光を残さず出し切ってくれたときの、あの嬉しき。

だから、ぬるいお茶などというものは、それはお茶とはいわないんです」

ト「でも、テレビみると、ほとんどのお茶グルメが、熱湯はだめといっている」

毛「だから、テレビに出てくる連中のほとんどは偽グルメなんです。この句の如き、舌のないグルメ。インチキ野郎なんです。騙されてはいけません」

師「酒なくなっちゃったな」

毛「あ、すみません、気がつきませんで。トムさん、ちょっと仲居さん呼んで、お酒追加注文していただけますか？」

ト「アツアツの熱燗がいいのか？」

毛「ぬるめの人肌をお願いします」

26 雪とけて村一ぱいの子どもかな

毛「きょうの原句は『雪とけて村一ぱいの子どもかな』この直截的で無色透明なところが、まさに一茶節。最初の作品です。

雪とけて腹一杯の小川かな

雪どけ水で膨らんだ小川がゆったりと流れている。妻の実家の近くにもこんな小川があるんですよ。

どこかの森から流れてきたたくさんさんの朽木が岸边のあっちこちにひっかかってゆらゆらしている。水に洗われた朽木は、生木よりもはるかに清潔な感じがするんですね。無機的状态になっちゃっている。形のよいものを拾って帰って乾燥したやつ、いま、わたくしの書斎のニツチに飾ってあります。すてきですよ、森の贈り物」

ト「あのつめたい水は最高。朝、岸边にいて、獣みたいに首のぼしてじかにごくごく飲むと、からだちゆうにしみわたって、なにもかまがすきとおってゆくのであった」

師「二日酔いなんぞいっしゅんにしてふきとんじまいそうだな」

毛「みあげれば、群青の空に一羽の鳥が飛んでいる。鳥には二日酔いなんてないんだろうなあとつくづくおもう。

首もげて花一輪の徳利かな

『料亭にて』という前書があります。作者のほかにはまだ誰も来ていない座敷の床の間にシンと置かれていたんでしょうね。首が欠けてしまった徳利に一輪の花を活けた料亭の主人のセンス。高い商売道具をわざと割るはずはないでしょうから、うっかり倒すか、どこかにぶつけたかしたんでしょう。そのうっかりミスを逆手にとって、花一輪挿すことで徳利にあらたな命を吹き込んだセンス、すてきですね。床の間に置かれた花と徳利は、それ自体がひと

筆描きの俳句のようです。わたくしの書斎の朽木のオブジェとおんなじくらいすばらしい」
師「それがいいなかった」

毛「それにくらべてあきれてしまうのが、あっちこちでやっている前衛芸術と称する一連のオブジェ展。このあいだちよつと立ち寄った画廊でみたんですけど、床にのべた大きな丸いガラス板のまん中へんに一冊の本の形をした鋳物のオブジェが置いてあって、その表紙の上に呪文めいた象形文字が彫り込んであるだけの作品なんです、背後の壁にかかった作品タイトルが『蘇える負性』」

ト「どういう意味？」

毛「かんがえるだけ無駄なんです。で、作品タイトルもおもわせぶりなら、入口でもらった作者自身の解説文もじつにおもわせぶりです、読みほどこいてみればどうってことのない内容をおもいきりむずかしい言葉とおもいきりわかりにくい言い回しで表現している。そうすることで高級になるともおもっているんですかね」

師「わかりやすい表現だと、なかみのくだらなさがまるみえになっちゃうからじゃあねえのか」

毛「正体バレないようにするには、とりあえずむずかしい言葉つかってわかりにくい言い回しとけばいい。小林秀雄みたいだね」

ト「かんじんのオブジェはどうだったのか？」

毛「お粗末。作家本人は、しきりに難解なポーズとりながら前衛前衛と書いていましたけど、実物みると、びっくりするくらい幼稚に説明的に造形してくれているから、制作意図だけはじつにわかりすぎるくらいわかるんですけどね。」

ま、入場無料でしたから、腹も立ちませんでしたけど。それにひきかえ、この句に登場した花一輪挿した首欠け徳利の景色のすばらしいこと。実物をみていないからわかりませんが、この句のすばらしさをおもえば、想像を裏切らない代物にちがいありません」

師「あんがい、おそまつなしろもんだったりして」

毛「牛鳴いて村いっばいの陽射しかな」

ト「家のちかくに、こんな村がある」

毛「いいなあ。こんな村にひと月くらい暮らしてみたいもんです」

ト「いついってもかならず野原は晴れわたってる。そして、この句とおんなじで、ときどき牛の鳴き声だけがきこえる」

毛「いいなあ」

ト「その村びとのひとりともだちになって、いまでは、そのひとのいないときでも、かってに家にあがってお茶飲んだりしてる」

毛「いいなあ」

ト「このあいだもおひるすぎ、茶の間のちゃぶだいで、いつものようにひとりかっってお茶ごちそうになっていたら、そこからめずらしくひとのはなし声がきこえてきた。ともだちがかえってきたのかなとおもってそとみたけど、だれもない。晴れわたった村がみえるだけ。」

声ははつきりきこえているのにへんだなあとおもって、もう一度よくみたら、かなり遠くの

となりの家のえんがわで、お爺さんらしきひととお婆さんらしきひとがお茶らしきものを飲みながらおしゃべりしているのであった」

師「そんな遠くの声聞きこえるんか？」

ト「聞きこえるのであった。おしゃべりの内容のひとつひとつもはっきり聞きこえてくるのであった」

師「うっかりうわさばなしもできねえな」

ト「東京へ行ってしまった孫のはなしをずーっとえんえんしゃべっているのであった」

師「遠くのえんがわで爺さん婆さんがずーっとえんえんしゃべってるのを、おめえは、ずーっとえんえんきいてたってわけだ」

ト「ききながらいつのまにかねむってしまったらしくて、かえってきたともだちがおこしてくれただ。すっかりゆうがたになっていた」

毛「いいなあ」

師「それにしてもよ、かつてにひとさまの家はいるの、トムおめえ、ほんとにとくいだな」

ト「ぼくだけではない。その村のひとたちみんな、ひとの家にかつてにあがってかつてにすきなもの飲んで食べてる。どこの家もカギかかつてない。それなのに、どろぼうにはいられた家、一軒もない」

師「ひとの家かつてにあがってかつてにすきなもんで飲んで食べてるんだーら、それもりっぱなどろぼうじゃあねえのか？」

ト「ちがう。ひとの家かつてにあがってかつてにすきなもんで飲んで食べてるけど、じぶんの家にひとがかつてにあがってかつてにすきなもんで食べても文句いわないのであるから、プラス・マイナス・ゼロ」

師「おまわりにみつかつたらどうすんだ？」

ト「その村、おまわりさんいない」

毛「いいなあ。」

土砂降りに軒一列のおしめかな

今は紙おむつ全盛ですけど、たまにこういう光景眼にしますね。突然の夕立ちで、あわてて軒下に取り込まれた一列のおしめ。かんがえてみれば、にんげん、生まれたときも、終わりに近くなったときもおしめのお世話になる」

師「この世にうまれて、食って眠って出して、時期がきたら死んでいく。にんげん、単純なもんだよ」

毛「最後の句です。」

満月に幹いっぱいの痘痕(あばた)かな

雲間から皓々たる満月があらわれて太い樹々のでこぼこの樹皮に翳ができる、それが痘痕のようにみえるんですね。光を詠まずに翳を詠んだ」

ト「いままで、月がでていてもあまりみあげたことはなかった。日本にきてから、なぜか月みあげることがおおくなった。気がついたら、よく月みてる」

毛「無理ありませんよね。遠い外国からたったひとり日本で来てらっしゃるんですから。ころがうつむいた夜は、なぜか、眼は上をみあげるんですね。するとそこに月がある。ひとや、獣や、鳥や、虫や、魚たちの無数の瞳の奥から一直線に飛んでいったものが月に集中している。地上に辛いこと悲しいことがふえればふえるほど、だから、月はどんどん光をましてゆくんでしょね」

27 瘦蛙まけるな一茶是に有り

毛「その蛙跳ねるな一句出来るまで」

この作者、写生派の俳人なんです。写生派ですから、対象物である蛙が跳ねてどっか行っちゃったら、なにも詠めなくなっちゃう。だから、その蛙、どうかじつとしていてほしい。つまらない句です」

ト「写真とるとき、ふだんはこの句のようにほくのほうから風景にせまっていくのであるが、たまに風景のほうからぼくにせまってくることもある。そういう写真のほうがたいがいい」毛「いい俳句というのも、そうなのかもしれないですね。ものを詠むのではなく、ものに詠まされる。そして、詠まされているのにもかかわらず、かえってそこに、はからずも作者の個性が滲み出ている。つくった句ではなくて、つくらされた句、つまり、生まれた句。」

やせ我慢やけど覚悟のお湯加減

『昔の銭湯風景』という前書があります。昔の銭湯、わたくしまだこどもでしたから男湯女湯どちらかまわらず入っておりました。どちらにも、こどもが主に入るちいさな湯船と、おとな用の深い大きな湯船が並んでいたんですが、その大きなほうのお湯がやたら熱いんですよ。その湯船の片隅に蛇口がひとつだけあって、ひねって水を出すとその辺りだけがかるうじてぬるくなるから、熱いのが苦手なひとはそのそばに身体を沈めているんですけど、たいていは、まわりのお爺さんたちから怖い眼で睨みつけられるんです」

師「あつたりめえなんだよ。みんなきもちよくあつい湯へえってるのに、それわざわざぬるくるこたあねえんだから」

毛「でも、あの熱さは尋常じゃなかったですよ」

師「それをがまんしてはいるのが江戸っ子」

毛「そのお爺さんたちも、みんなそういって、熟れたほおずきみたいな禿げ頭に太い血管浮かばせながら、ただもうジーツと眼を閉じて入っていましたけど」

師「からだうごかすと、この句じゃねえけど、やけどしちまうからな。それにしても、ちかごろめつきり銭湯すくなくなったなあ」

毛「まだやっているところもありますけど、お客さん、あんまり来ないみたいです。昔は、いつ行っても、洗い場ぎつちりひとで埋まっていて、肩ふれあうような感じで体洗っていたもんですけど。洗い場から板敷きの脱衣場にあがっても、やっぱりそこもひとでいっぱい。で、みあげると、壁一面に極彩色の映画のポスターがずらりと並んでいる」

師「それながめながら、湯あがりのつめてえコーヒー牛乳をグーツと飲む」

毛「ポスターといえば、あるとき、乳房丸出しの若い女のひとのポスターが貼ってあったこと
がありましてね。あの頃はそんなポスターまだあまり許されてなかったから、わたくし女の
ひとのはだかの写真、そのとき生まれて初めてみたんです。小学三年生のときでした。もう
心底びっくりしちゃってしばらくは眼が釘付けになりましたね」

師「みてはならないものが眼のまえにある」

毛「そうなんです。禁断の秘密の淫ら図。そこ、女湯で、まわりには素っ裸の女のひとりよゝゝ
歩いているのに、そんなのぜんぜん興味なかった。懐かしい思い出です。

乗り換える駅まちがえてここに居る」

師「しょっちゅう」

ト「しょっちゅう」

毛「乗り換える駅まちがえてるのに気がつかず、そこからまちがった電車乗ってることにも気が
つかず、まではいいとして、最後に降りる駅もまちがえているのに、しばらくのあいだそれ
に気がつかないこともあります」

師「地下鉄の駅なんざあ外の景色みえねえからなおさらだわな」

ト「地下鉄の駅ってだいきらい。地下牢にとじこめられてるみたいでこわい」

毛「ある日とつぜん停電になったらとおもうと本当に怖いですね。じぶんの手の先すらみえない
漆黒の闇の中で、そのとき初めて地下鉄構内が、怖ろしく広大な関東ローム層に取り囲まれ
ていることに気がつく。いまでも、地下道歩いていると、四方八方から何層ものぶあつい地
層が押し寄せてくるような気がして、ついつい小走りになっちゃうんです。

「ごめんなさい、話が脇道にそれちゃいましたが、この『駅まちがえてここに居る』って、笑
えるような笑えないような。ひとつの人生論として読むとそれはそれで妙にリアリティあり
ますよね」

師「まちがえておりました駅前で、いいおんなめつたりしてな」

毛「そのいい女と、その街で暮らすことになるかもしれない。まちがえて降りた街がしあわせ
な終の棲み家となるかもしれない」

師「たまにやあぶらつと電車まちがえてみるのもいいかしんねえな」

毛「そういうときにかぎって、正しい行き先に、ぴったり定期に着いたりして」

28 目出度さもちう位なりおらが春

毛「きょうも一茶です。最初の作品。」

見る度にチューしたくなりおらが孫」

師「孫、ほしいな」

毛「無理です」

師「こどもいねえが、孫だきやほしい」

毛「わたくしも、とつくに孫のひとりやふたりいてもおかしくないんですけど、まだひとりもい
ない。やはり欲しいですね、孫。ただね、この句みたいに『うちの孫、可愛いでしょ』って

な感じで、自慢げに抱っこしたり、乳母車乗せたりして歩いている爺さん婆さんよくいるでしよ。あれ、馬ッ鹿じゃないのっておもいます」

ト「シットしてるんだ」

毛「そうではありません。じぶんたちがこんなにも可愛いとおもうんだから、ぜったい他人様も可愛いとおもうにちがいないとおもい込んでいるその馬鹿さ加減に腹が立つんです。こちらにしてみれば、通りすがりのよその家の孫、可愛いわけがないのね。なかには、電車なんかで隣あわせになったりすると、なにを勘違いしているのか、抱っこしている赤ん坊の顔をしきりとわたくしのほうに向かせている馬鹿もいる。そういう赤ん坊にかぎって、たいていが蒸しパンに眼鼻なんです」

ト「やっぱりシットしてるんだ」

毛「そんなことはないといってるでしょうが。かりにほんのちよつと嫉妬しているとでもですよ、それとこれとは別問題なんです。てめえんちの幸せはてめえんちだけでやってろつてほしいだけ。公けの道で、公けの電車中で、てめえんちだけの幸せおっぴろげてんじやあねえんだよつていいたいだけ」

師「ずいぶんむきになってんな。だいじょうぶか？」

毛「だいじょうぶです。ただ、ああいう恥知らずな爺いや婆あみていますと、ほんとうに腹が立って腹が立って。孫ができれば、そりやあ可愛いでしょう。どんなにあやしてもにこりともせずだれ垂れ流していようと、じぶんの顔のなかで一番嫌いな団子ツ鼻だけがもの見事に隔世遺伝されていようと、眼に入れても痛くないほど可愛いでしょう。無理からぬことです。でもね、それ、他人にとってはどうでもいいこと。そんな簡単なことに、いい歳こいてぜんぜん気がついていない。最低。下の下」

ト「じぶんに孫ができたとき、そういう爺いにはならないという自信、あるのか？」

毛「あ、それは、ぜんぜんありません。つぎの句です。」

ひさびさに旬食らうなり里の春

『帰省』という前書があります。わたくし自身は田舎がないのでこういう経験ないんですが、でも妻の実家が山あり川あり湖ありの田舎なので、擬似体験だけはできるんです。

ただ初めて行ったとき、なによりもびつくりしたのは水でした。アルプスの山々にたっぷりと貯め込まれていた水が、地下に潜り込んで、岩をくぐり、石をくぐり、砂をくぐり、樹々の根をくぐり、草々の根をくぐるうちにどんどん浄められ、それが、家々の蛇口までやって来ているんです。

妻の田舎のひとたちは、そのアルプスの水で、目覚めの水を飲み、顔を洗い、お茶を入れ、ご飯を炊き、お風呂を沸かして毎日暮らしているんですから、頭のとっぺんから足の爪先までアルプスの水でできているんです。それを不思議ともなんともおもっていない」

ト「旬のものといえば、信州にいくと、かならず新蕎麦食べる」

毛「信州行けば、ふつう食べますよね。ところが義父も義母もぜんぜん蕎麦食べない。みんなドライブに行っても、ぜんぜん蕎麦屋には入らない。がっかりしましたね。ま、かんがえて

みれば、信州人なのに蕎麦食べないのは変、って決めつけているほうがおかしいんですけど」
ト「ハンバーガーくらいなアメリカ人、スパゲティくらいなイタリア人、なんにんも知ってる」
師「さかな食べねえ漁師もいれば、やさいぎらいの農家の爺いもいる」

毛「
会いたさも中くらいなり君江ちゃん

『六〇年ぶりの同窓会』という前書があります。君江ちゃん、この作者の初恋のひとなんです
ね」

師『会いたくもどこに居るなりおよねちゃん』

ト『この世のどこかあの世のどこか』

毛「初恋、わたくしは八歳でした。いまのわたくしくらいの歳になりますと、この句、じつに身に沁みます。会いたい気持ちはもちろんあるんですけど、年取った初恋のひとに会うのは怖い。年取ったじぶんを初恋のひとに晒すのは、もつと怖い。

幸か不幸かそのひとは同窓会にはいままで一度も来たことがないんですが、もし来たら、はたしてそのときは、再会の歓び、思い出の壊しあい、どちらになるのか？」

ト「ぼくの初恋、あんたとおなじ八歳だったけど、ずっとあわなくて、十八歳のときひさしぶりにあつたらびつくりした」

毛「愛くるしかった少女が、それ以上に美しく成長している場合もあれば、がっかりするような姿に変身している場合もありますからね」

ト「彼女のばあい、もともとそれほど愛くるしくなかったのがさらに愛くるしくなくなっていくたのであった」

毛「ま、なんにしても、同窓会っていつもなにがあるかわからないから、ちよつと恐いですね」

師「二〇年くれえ前、かなりひさしぶりの同窓会やって、でっけえ丸テーブルかこんでわいわい飲んでたときだったんだがな。

おれが、『玄太っていう、ずうたいでけえだけで、いつもあおっぱなたらした頭からっぽのやつ、おぼえてつか？ なきさけぶかかあとガキほっぽらかして、どつかいっちまったってまでのはなしは、かなりめえにきいてたがよ、こないだきいたはなしじゃ、そのあともてんとんとあつちこつちほつつきまわってるうちに、わるいおんなにひっかかって、おまけにわるい病気までもらつちまって、さいごにやすってんてん。もー、ばかまるだし人生。いま、どこでなにしてんだか、だれも知らねえらしいがよ、たぶん死んでる』って話したらよ、おれの横にすわってた爺いが、その玄太だった。

眼も鼻も、たるんだシワのおくにうまっちまってるし、からだ、ほしたエビさらに火であぶったみてえにちぢんじまってたから、ぜんぜん気がつかなかった」

ト「なぐられたか？」

師「みんなといっしょよなあってけらけらわらってやがったんで、よくみたら、補聴器のスイッチはいつてなかった」

毛「師匠たちの同窓会ともなれば、もうなんでもありなんでしょうね」

師「スイッチはいつてたとしてもよ、たぶんけらけらわらったんじゃあねえかな。もうどーでも

いいんだよ。あんたのいうとおり、もうなんでもあり」

ト「およねちゃんに、もしあったら、どうするの？」

師「どうするもこうするも。おたがい『あらまあ』でおわりだろうな」

毛「あんがい火がついたりして」

師「火ついても、油つけぬけてっから、すぐきえちまうな」

毛「でも、こればかりはわかりませんよ。油っ気抜けてるってことは、パサパサに乾燥してるってことですから、これはこれでよく燃える。最後の句です。

出目金魚ひらきっぱなしで昼寝かな

出目金さん、ひんやりとした水の中で大きな眼をおもいつきり開いてお昼寝している」

師「あの出目金の眼ん球だけは、たしかにうらやましい。おれの眼なんぞ、近眼と老眼と白内障と黄斑変性と眼ヤニで、もうぐつつちやぐちやだからよ、ときどき、眼ん球ひきずりだして、キンキンに冷めてえ川の水中で、ぬめり、きれいさっぱり取りまくりたくなる」

毛「ぬめりが取れて、指でこするとキュッキュッ音するくらいになった眼球をもとの眼窩に収めるとき、どんな風景がみえるんでしょうねえ」

師「それはそれとしてよ、この句みてえに、出目金魚、ほんとに眼えあけて眠るのか？」

毛「そうらしいですね。というか、そもそも魚にはまぶたないそうです。だから、どんなときでもつねに開きっ放し」

師「金魚鉢の出目金、ちかごろあんましみかけなくなっただが、路地裏にやってくる金魚売りもむかしばなしになっちまったわなあ」

毛「でっかいリヤカーをさらにでっかく改造したみたいなやつに、金魚鉢をいっぱい載せてよくやって来ましたね。金魚鉢の水がどんなにたつぷんたつぷん揺れても、中の金魚たちはどれも平気な顔してのんびりひれ動かしているのが、なんともいい感じでした。炎天下の下町の路地裏に突然、金、銀、赤、白、黄、黒さまざまな色彩が花のようにゆらゆらやって来てあたりには水の匂いを撒き散らす光景は、まさに夏到来って感じでしたねえ」

師「そのむこうから、これまたリヤカーの氷屋がやってきて、でっけえノコギリでしゃっかしゃっか氷きりはじめるんだよな」

毛「おおきなぶあつい氷の板を、売るとき家庭用に小分けするんですよ。ギザギザの刃のほうでとちゆうまでしゃっかしゃっかやっていって、こんどはその刃を裏返して、つまり刃の背のほうでコーンとやると、あら不思議、パカッときれいに割れる。切り口は、だから上半分が曇りガラス状で下半分が透明ガラス状になっているんですけど、でもよくみると上から下まで真っ平なんですよな」

師「そんなとき、氷のきりくずがけっこうでるんだが、それ、ただでくれるんだな」

毛「すんごい得した気分になりましたね」

29 やれ打つな蠅が手を擦り足をする

毛「小林一茶、きょうで最後です。では、最初の作品。」

それ喰うな蠅が手を摺り足をする」

ト「この句、ママがつくったのかもしれない」

毛「そういえば、トムさんのママ、この一茶の原句に腹立てていましたっけね」

師「食いもんにハエたかかってるくれえ、どうってことねえ。むかしの駄菓子屋なんぞ、ひでえもんだったな。はいってたらだれもいねえから『おばちゃん、くずもちおくれ』ってでつけえ声でよんだらよ、おばちゃん便所からあわててでてきたかとおもうとそのまんま手もあらわねえで、しめったわりばしにくずもちべろんとはさんで皿にのつけてだしてきて、それにきなごぶっかけて黒蜜たらして、そのあと指についた黒蜜べろべろなめていやがった。もちろんあたりにや、ハエなんぞ、あたりめえにとんでたもんだ」

毛「蠅取りリボンってありましたね。ベトベトのべっこう色した粘着液がたっぷり塗ってある細長い短冊状のやつ。どこの店行っても、天井から何本もぶら下がってましたっけ」

師「かぞえきれねえくれえのハエの死骸がびっちりはりついてよ、もう、黒い棒みてえになっちゃまってるやつを、いつまでもぶらさげてる店もあったな」

毛「犬か猫に食い殺された鼠のその引き裂かれた内臓に蛆がびっちり湧いている光景、けっこう眼にしましたね。おびただしい蛆がわらわら身を振っているから、鼠の死体も微かに動いているんです」

ト「南米だったかアフリカだったか、蛆たべるひと、みたことある。やいて食べるひともいるのだが、なまのまま食べるひともいた」

師「たしかにあれ、きれいに水あらいして醤油ぶっかけてずるずるすりこんだら、あんがいうめえかもしんねえ」

毛「たんばく質の塊り。ほんとに蠅も蛆もあたりまえにいたあの頃のことおもえば、いまの世の中ちよつと神経質になりすぎていますね。誰もかれもが清潔志向、誰もかれもが健康志向」

ト「ママなんか、部屋に一匹でもハエがとんできたら、眼つりあげておごこえはりあげて、殺虫剤ふりまきまくる。そのあと、殺虫剤がしみこんでしまった部屋ちゆうを、すみからすみまでふきまくり、そのあとシャワーでからだちゆうあらいまくる。だから、部屋はいつもひっかひか。ママはいつもひっかひか」

師「あたまんなかもひっかひか。きれいさっぱりなんにもねえ。

ハエ一匹いねえ、ホコリひとつねえ部屋で、無農薬野菜ばかり食ってりやいい。きれいなからだでひっかひか。病気知らずで餓死すりやいい」

毛「それにいたしましても、あの頃、あんな大雑把な生活環境だったにもかかわらず、わたくし、お腹壊したこと一度もなかったですな」

師「バイキンも、こつちがびくびくしてつとつけあがってわるさするがよ、こつちがはなつから無視してたもんだーら、よりつきもしなかったんじやあねえのかな」

毛「そういうことだったんでしようねえ。科学的根拠ぜんぜんないですけど、結果をかんがえてみると、どうもそういうことになりそうですな」

鈴(りん)打てば赤子手をふり足をふる

鈴たたいて、亡くなったひとにご挨拶したら、仏壇のそばで寝ていた赤ちゃん、手をふり足をふりしてこたえてくれたんですね。鈴の音が、あの世とこの世に同時に響き渡っちゃった」

師「やっぱ孫ほしいな」

毛「

やれやれと窓が眼をとじ幕をとじ

長い一日が終わり、あちらでこちらで窓が閉じられ、部屋のカーテンが引かれる。

街の夜景みていて、いま、この地上の建物や家具がすべて透明になったらどうなるんだろうっておもうことがあるんです。空中にひとがいっぱい浮かんでいて、よくみると、誰もがみーんな体を水平にして寝ている。大人も子供も誰も彼も、みーんなそれぞれの高さで、水平に、プランクトンみたいに浮かんですやゝゝ寝息を立てている。月に照らされて、街全体がひとつの巨大な青い水族館になっちゃっている」

師「ひまじんの妄想」

毛「私の家の隣のちいさな可愛い兄妹も、わたくしとおんなじくらいの高さのところ、それもあんがすぐ近くのところ、ふたり仲良く浮かんで寝ている。建物や家具を取っ払ってしまえば、あんがいそんなところで寝ている。

冬 **海蛸が手を攣り足を攣る**

あまりの水の冷たさに、さすがの蛸も手足攣っちゃった」

ト「どれが手で、どれが足なのか？」

毛「それ、あまり気にしないでいいとおもいます。とにかくあの十本のぐにやぐにやがパイーンッて攣っちゃった。手足パイーンと突ッばらかしたまんま、深海めがけて人工衛星みたいに潜ってっちゃったんでしょう。

この句、文法的には『冬 **海蛸の手が攣り足を攣る**』が正しいのかもしれませんが。でもそれだと蛸ちゃんの『困った感』が出ない。『ある感じ』を出したいとき、ときによっては文法を無視したほうが、その『ある感じ』がうまく出る場合もある。

文法の無視とはちょっとちがうんですが、こちらのいうことを正反対の意味に捉えられちゃうことがあります。先日のレストランでのことなんですけど、ひと通り食べ終わった頃、若いウエートレスさんが水差し片手にそばへやってきて『お水のおかわりいかがですか？』と聞くもんですから、もういららないんで、『あ、結構です』と答えたなら、にっこり笑って、わたくしの眼の前の空になったコップにじよぼじよぼそそきはじめたんです。笑顔のまんま、黙ってそそいでいる。つまり若いウエートレスさん、わたくしの『結構です』という言葉をも『そそいでくださって結構です』という風に受け取ったらしいんですね」

師「あと一〇年もしたらどうなるのかな？」

毛「言葉のニュアンスがどんどん変わってゆけば、とうぜん言い回しとか文法もどんどん変わってゆかざるをえない。わたくし自身は、昔からの言い回し、文法のほうがこころにびったりおさまることが多いです。そういうものはいつまでも残っていつて欲しいなと、つねづねおもっております。すくなくとも、じぶんはそれを大切にゆきたいなとおもっております。でもね、時代が変われば、言い回しも文法も変わってゆくのは、これはとうぜんの成り

行きであり、自然なことだともおもいません。

ただ、どんなに言葉が変化しようと、たとえば文学作品なんかでもそれを発するひとのころと感性がぴつかぴかできえあれば、その作品はかならずひとのころを打つんじやあないでしょうか」

ト「一茶の句なんか、いまのぼくにも、それなりにわかるような気がする」

毛「それは、一茶の声、一茶の感性が新しくなったからそしても新しいからなのでしょうね。そういうものは残る。一茶の生の声は、いまでも言葉や文法のしがらみを破って、生きいきぴちぴちはみ出してくるような気がするんです。一茶の句を読むと、つくづくそうおもっちゃいますね。

あ、気がつきませんで。師匠、お酒おつぎいたしましょうね」

師「結構です」

30 朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

毛『朝顔に釣瓶とられて貰ひ水』加賀千代女。女流俳人の登場です。

千代女作とされている句の中には、じつは他のひとの作品だったというものもあるそうですが、きょうはそれ、無視してすすめていきたいとおもいます。では、最初の作品。

あさ顔に光つどひて夢溶けて

朝顔を、朝と顔、ふたつに分けた。朝、窓の外からちらちら零れてくる木洩れ陽が顔に纏わりつくもんだから眼が覚めちゃったんですね。いつもこんな風に朝の目覚めが訪れてくれたらすてきですけどねえ」

ト「ぼくもときどきこんな朝がある。まっ青なみずうみの底でおおぜいのともだちとゆらゆら遊んでるところを突然ぼくだけが何者かにぐーんとひきあげられて水面につれだされる。』なにするんだよッ』て眼をこするとそこは朝陽さしこむ二階の部屋のベットのの中」

毛「結構なお暮らしですこと。わたくし、朝陽が顔にあたって眼が覚めるなんて贅沢な経験ありませんでしたね。

小学生のとき、夏休みなんかは、すこしでも早く起きてすこしでもたくさん遊びたいのに、雨戸閉め切られているから朝になっていることに気がつかず、寝過ぎしちゃったことがある。あれ？っとおもって眼をこすってみると、部屋の中は薄暗いけど夏の熱気が立ち籠めているので、すでに朝が来ていることはっきりわかるんですよ。庭に漲っている朝の強い光が、閉め切った雨戸の縁からちりゅゅと漏れてきている。その向こうで、近所のおばさんたちの立ち話の音がしている。大事な夏休みの朝を寝坊しちゃったもんだからもう半べそかきながら腹立ちまぎれに雨戸をおもいっきり引き開けると、圧倒的な夏の光が雪崩れ込んできましたっけね」

師「夏休みにあさねぼうすると、たしかにものすごくソッソッソした気になったわな」

ト「とくに天気の良い日は、とてもソッソした気になる」

毛「朝顔をしんと映して盥水(たらいみず)」

ひとのいない路地裏の盥の水に朝顔が映っている光景、昔よくみましたね」

師「ちかごろは、盥、みかけなくなつたな」

ト「盥ってなに？」

師「せんたくもんあらつたりする、せんめんきのでつけえやつ」

毛「木の盥もありましたけど、わたくしがよくみたのはブリキのやつ。近所のおばちゃんたちが、べちゃくちやおしゃべりしながら地面にしゃがみ込んで、盥に突っ込んだ洗濯板のうえで、パンツやらシャツやらごしごしやってましたっけね。

盥って、洗濯だけじゃなくいろんなことに使いましたよね。井戸水張ってスイカ冷やしたり、縁日で掬ってきた金魚放したり、ろうそくと水で走るちいさなポンポン蒸気船浮かべたり」

師「いきたネズミのはいった網かごを盥の水にぶちこんで窒息死させたり」

毛「その盥で、つぎの日、赤ん坊に行水させたり、空の盥に厚い布かぶせてそのうえでベーゴマやったり、この句のようにいつのまにか水鏡になつていたり。

ああそうそう、水鏡といえは、先日、わたくし、とてもおもしろい体験したんです。住宅街を流れるちいさな川なんですけど、両側の土手に桜の樹がずらりと並んでいて、近隣のひとはもちろん、かなり遠くからわざわざみにくるくらいの桜の名所なんです。

晴れて、風ひとつないその日。架かっている小橋の真中で太い欄干にひじをつけてぼんやり川を見下ろしていたんです。びっちりとした花を着けた枝が左右の土手からしなだれかかっている下を、川は流れている。のっぺりとした川面にときおりひらりひらりと落ちる花びらがとても可愛らしくて、ずいぶんしばらくのあいだなんとはなしにひとつふたつと眼で追っていたんですけど、そのとき突然、それまでなんにもなかった川の底に、ずらーと満開の花の列があらわれたんです。『なんだ、こりや？』でしたね。身を乗りだして覗き込むと、ふさふさと花を着けた黒い幹や黒い枝々がはるか遠くまで二列に並んでいるんですよ。あまりの出来事に、しばらくその場にひじをついたまんま金縛り状態でした」

師「ま、川面に浮かぶ花びらに合わせた眼の焦点が、ちよつと奥にずれただけのことだわな」

31 蒲団着て寝たる姿や東山

毛「服部風雪の有名な句ですね。有名なわりには、どうでもいいような句です。前回の千代女の『朝顔』の句とおおちがいがいい。でもテキストに載っているんで、始めます。最初の作品。

蒲団着て起きたる姿や情けなや

『浮気の朝』という前書があります。夫の浮気を発見した奥さんが詠んだ句なんでしょうね。つまりこの夫、すっぽんぼん。奥さんの突然の来襲に、とりあえず女を逃がすのが精一杯で、じぶんは服もズボンも下着も着るひまがなかったんでしょう。ホテルの部屋の中でベッドから出るに出不れず、すっぽんぼんの体に掛け布団巻きつけてその場に体操座りするしかなかった。

風呂沸きてつめたき雫肩に背に

師「まだ陽がたけえうちに銭湯の一番風呂にいくとよ、わきたたで湯気むんむんの洗い場にへえ

ったとたん、天井から水のつぶがおちてきて、それがつめてえのなんの」

毛「あたりがお湯と湯気で熱いから、よけいに冷めたく感じるんですよね。こどもの頃は、じぶんの肩や背中に落ちてくると、なんか、宝くじに当たったような気がしたもんです。

沸き立ての新鮮なお湯からもうゝゝと立ち昇っていった湯気が広い天井にびっちり水滴を作って、その幾粒かがくつつきあい大きな玉になって落ちてくる。

わたくし、上野の自宅の二階で産まれ小学四年までその家で暮らしていたわけですから、その『松の湯』という銭湯には、産まれてまだ眼もあかないときから行っていたことになるんですね。ということは、皮膚が薄くてぶよぶよの幼虫みたいなわたくしのお腹にもその雨粒が落ちてきていたんですね」

ト「はじめて銭湯にいったとき、水泳パンツはいて洗い場にはいろうとしたら、番台のおばあさんに『だめだよつあんた、そんなもんはいて入っちゃ。脱ぎな脱ぎな。ほんとに近頃の若いもんは礼儀知らずなんだから。外人だろうがなんだろうが、そんなこたあ常識つちゅーもんだ』っておこられた」

師「ま、常識だわな」

ト「でも、ほかの国では温泉にはいるときはみんな水着きてる。ぼく、すっぽんぼんではいるほうが、よっぽど礼儀知らずだとおもったのであったが、そのおばあさんの『わい顔と』常識』という言葉におもわずひるんでしまって、あわてて水泳パンツぬいだのであった」

師「ま、常識だわな」

ト「ところがなのであった。なんとなく手もちぶさたなきもちのまま、ちよつと内股ぎみにあるいてあらためて洗い場にはいろうとしたら、こんどは、そばにいたおじいさんに『だめだよつあんた、この手拭い貸してやつから、ちゃんと前隠してけ。つたくもう、それが常識つちゅーもんだ』って手拭いなげられた」

師「ま、常識だわな」

ト「ところがなのであった。おじいさんにいわれたとおり、手拭いで前をかきながらそのまま湯船にはいろうとしたら、こんどは、ほかのおじいさんに『だめだよつあんた、手拭いで前隠したまんま入るんじゃあねえ。湯船に手拭いなんぞ浸すもんじゃあねえんだよ。常識だろうが』っておこられた」

師「ま、常識だわな」

ト「パンツはいてはいろうとしたら非常識といわれ、すっぽんぼんではいろうとしたら非常識といわれ、前かきしながらはいろうとしたら非常識といわれた。ママのいうとおり、日本はやっぱり変な国とおもった」

毛「風習というものはそういうものなのでしょうね」

師「こんどいったら、さっきの浮気亭主みてえにからだに蒲団まきつけて湯船にとびこんじませ」
毛『盆踊り』

苦勞して着たる浴衣もばらばらに」

きれいな娘さん、盆踊りしているうちに、胸元がゆるみ、帯もゆるんできてばらばら」

師「家で、会場つくめえにもうばらんツばらんツになってるやつもいる。まるで、火事になった病院からあわてて逃げだしてきた入院患者」

ト「このあいだ、たのしそうな屋台がいっぱいならんでたので、いろんなもの食べた」

毛「盆踊りの楽しみのひとつ、というかこどもの頃のわたくしの目的はそれだけ。盆踊り踊ったことなんか一度もない。盆踊りの夜だけは、何週間も前からわくわくと貯めておいたちよつと多めのお小遣い持ってたひたすらハシゴ食い。綿あめ、しんこ細工、焼きそば、焼きいか、ソース串かつ、カルメ焼き、あんず飴、お好み焼き、もう眼がくらくなりましたね」

師「ぜーんぶ、その場で、めのまえでつくってくれたからな。カルメ焼きなんか、つくってるのみてるだけでわくわくしたもんだ。

屋台のうえで、ちよつとおおきめの銅製の柄杓にスプーン一杯の茶色いザラメいれて火にかけると、そのザラメがだんだんどろろぶくぶくと透明に泡だってくる。それをいったん火からおろして濡れ雑巾にのせ、そこへ先つちよに重曹の粉つけたちいせえスリコギ棒をぶちこんでかきまわすと、その茶色い透明な液体がちよつと白っぽくにこつて膨らんでくる。で、ころあいを見て、そのままその棒をまっすぐおっ立てると、あーらふしぎ、その泡がとつぜんぶわあーつと海綿みてえにもりあがつて、しまいにや、びっくりするほどでつかくなるんだな。スプーン一杯のザラメがよ、あつというまにちよつとしたメロンパンくれえのおおきさになつちまう」

毛「で、そのスリコギ棒をすぼつと抜いて、二、三秒、抜いたあとの穴がふさがって表面全体が飴色に硬く乾燥するのを待ったら出来あがり。サクツとひと口頬張ると、シャリシャリの破片があつというまに溶けて、口中一杯に焦げたような香ばしい甘みがひろがるんですよ。それにいたしましても、屋台で買ったものって、その場でわくわくしながら食べるとすごくおいしいんですけど、家にいそいそ持ち帰って、『さあ食うか』って台所のテーブルの上に置いたとたん、急に色褪せちゃうものも多いですね。焼きそばなんかその最たるもので、母が作ってくれた素人焼きそばにくらべても不味そうにみえる。賑やかな盆踊り会場でみたあのごちそう感がすっかり消え失せちゃって、台所の電球の下で、萎びたキャベツの混じった冷たい麺がくつたりとのびきつっている。なんでこんなつままないものに、何週間もかけて貯めた大事な『盆踊り用お小遣い』を遣っちゃったんだろうって、もの凄い後悔の念に駆られたもんです」

ト「屋台でうってるものは、ふつうのお店でうってるものよりかなり高いし」

毛「焼きそば一皿だけでもお小遣い一週間分ですからね。泣きました。で、一年経つとまた懲りずに屋台のはしご」

師「そして、また泣いた」

毛「泣いた。涙、涙の盆踊り。最後の句です。

ゆらり来てふたたび寝たる大鯰(なます)

大鯰のぬらりとした重量感が出ている句ですね。じつはわたくし、かなり大人になるまで、鯨って架空の生き物だとおもっておりました。河童とかツチノコとかとおなじで、この世

に実在しない生き物。だから、テレビのニュースで鯨の映像が流れたときには、びっくりしましたね。エッ？実在の生き物だったんだ、ってね。鯨にかぎらず、『なんとなくそうおもい込んでいる』ことって、結構あるんじゃないでしょうか」

ト「自動販売機に小銭いれるときは、いつもやすいお金からいれていた。一五〇円いれる場合、一〇円玉を五ついれてから一〇〇円玉をいれる。そうしないとコーラでこないとおもっていた」

毛「一〇〇円玉一つ入れてから一〇円玉五つ入れるのは駄目なんですね」
ト「だめ」

毛「じゃあ一〇円玉二つ入れてから一〇〇円玉一つ入れそれから一〇円玉三つ入れるなんてことは？」

ト「ぜったいだめ。何時間まってもぜったいでこない、ずーっとそうおもってた。このあいだ、ぼくのとりの自動販売機でちいさな子どもがめちやくちやな順番で小銭いれるのに、コーラ、ちゃんとでてきたのでびっくりした」

師「おれあ、コンセントからひっこぬいたばかりのプラグ、さわねえ。だから、ぬいたらしばらくはそのまましておく」

毛「抜いたばかりのプラグには、まだ電気が残っているってなんとなくおもっているんですね」

師「こないだ、酔っぱらって扇風機のコード足にひっかけちまってよ、ぬけたプラグおもいっきしふんじまったときやあちぢみあがったな。『感電死』っていうみつつの漢字が一瞬頭よぎった」

毛「そりやよぎりますよね」

師「ところが、ぜんぜんビリッとこなかったもんで、おそるおそるプラグのさきっぽ手の指でさわってみたらよ、なんともなかった」

毛「足のうらでおもいきり踏んだときビリッとしなかったんだから、わざわざ手の指で確かめる必要なかったのに、どうしても一度確かめなくなったんですね。じつによくわかります」

師「いまでも理屈じゃわかってんだけど、やっぱ抜いてすぐにやさわれねえんだな」

毛「なんとなくそうおもい込んでいる」ことって、ある意味、かなり頑固に体内に居座っているわけですから、それを完璧に否定することがなかなかできないんでしょうね。『おもい込み』。捜せばまだ出てきそうですね」

32 夕立にひとり外みる女かな

師「こりやもつとびきりいい女にちげえねえな」

毛「榎本其角の句。それにいたしましても、駅の改札口の屋根の下なんかで見ず知らぬのひとたちとやむなく一緒に雨宿りすることありますけど、あれ、なんともいえない親近感がおたがい生まれますね。『こんなどしゃぶりの前では、にんげんなんて、なんともまあ無力なもんですね』っていう表情がみんなに共通に浮かんでいるんです。そしてみんなにこにこしている。夕立ちという突然の自然現象に降り籠められてしまったさわやかな敗北感が、じつにな

んとも気持ちいいんですね。

棒立ちになりて指呼するスカイツリー

『親子連れ』という前書があります。若い父親と母親と子どもたちが、全員スカイツリーのてっぺんを指さして叫んでいる。そのひとりひとりの姿がまるでスカイツリー。トムさん、もう行かれましたか？」

ト「開業初日にいった」

毛「師匠は？」

師「あんなもん、さそわれたっていかねえ」

毛「東京生まれの東京人は東京スカイツリーなんぞに行くのは粋じゃあない、そうおもってらっしゃるんでしょ？ましてや開業初日に並んで入場するなんてことは無粋の極み」

師「べつにそんなことおもっちゃあいねえ」

毛「いえッぜつたいにそうおもってる。内心では地元でスカイツリーが出来たってこともう嬉しくってうれしくってしかたない。なんだって世界一だもん。ここはもう小踊りしちやってるんるんなのに、それ知られちゃみつともないもんだから、とにかくひたすら苦虫噛み潰したような顔してる。誰があんなもん出来たくらいで喜ぶもんか。ましてや開業初日にずらずら並んでまでして誰が入るもんか。そんなことするのは外国人観光客かおのぼりさんだけ。おれあ江戸っ子でえ、っもおもってらっしゃるんでしょ？」

師「おれあただもうつかれるのがやなだけ」

毛「うそッ、痩せ我慢してるだけなんじゃあないんですか？ほんとうは開業初日の、それも第一入場者になりたかったとおもってる」

ト「なんでそんなにむきになってるのか？」

毛「むきになんぞなっちはおりませぬ。ただ真実を追求しているだけです。師匠、無関心を装っていらっしやるけど、じつはもうめっちゃくちや興味津々なんです」

師「そうかなあ？おれあほんとに興味ねえ」

毛「いえッ興味あるに決まっております。興味ないわけがない」

ト「あんたこそどうなんだ？」

毛「ま、ほんのちよつとくらいはありますよ」

ト「ほんのちよつとくらいはあるけど開業初日にずらずら並んでまでして入りたいとはおもわないわけだ」

毛「あたりまえです。誰がそんなことするもんですか」

ト「まだいっぺんもいってないのか？」

毛「開業二日目に行きました。つぎの句です。」

夕蟬に小鼻汗ばむ妊婦かな

この妊婦さんも、きつと美人ですね。蟬の声の降りしきる夕べ、ふと佇む妊婦のそのすいと高い鼻梁の両脇に微かに汗がふいている。じつに美しい一シーンですね。ただの美人でも美しいシーンですけど、妊婦であるという「とで、その美しさの奥行きがさらに深まります」

ト「ぼくの女ともだち、あかちゃんできたたん、なんだかすごくきれいになった」

師「はらむと顔かわるのか？」

毛「そういうひと、たまにいらっしやいますね。身籠って顔つき悪くなるひと多いですけど、じつにまろやかになるひとがいる。なんていうか体全体にゆたかな樹液のようなものが溢れているんです。それまでの彼女とは別物になっている。」

夕涼みふとすれちがいたる湯の香り」

きようは美人ばかり。あの湯あがりの匂いって、ほんとうにいいもんですね」

師「おれあ酒飲むめえは、かならずひとつ風呂あびるな」

毛「わたくしもそう。お酒とお風呂。これは、もう完全にセットですね。お風呂に入らずに飲みだすなんて、そんなことかんがえられない。」

だから、よく会社帰りに汗臭い背広着姿で飲んでいるひとみると、こっちの体がねっとりしてきちゃう。だらーっと仕事したあと、だらーっと居酒屋に入り、だらーっとお酒飲みはじめる。おいしいわけがない」

ト「学校のゼミおわってからみんなでジョギングしてうんと汗かいたあとぜんいんビアガーデンに直行。ノドからからで、お風呂なんかはいってるばあいではないのである」

毛「あーやだやだ、そんなの。汗だらけ、毛穴に垢がびっちり詰まっている体で、よくビール飲めませえ。信じられない。」

湯船に深く浸って全身の毛穴をじゅうぶんにひらかせたあと、シャボンをつけた目の荒い硬い手拭でごっしごっし、毛穴の奥に溜まっている汚れをくまなく掻き出す。そしてそのあとふたたび湯船に深く浸って、そのさらにぽっかりとひらいた毛穴から、血中にまだ微かに残っている悪いものを汗と一緒に完全に体外へ送り出して初めて準備完了。ビールやお酒を受け入れる器となるのであります。そして浄まりかえった体内にビールがそそがれ、ワインがそそがれ、ありとあらゆるお酒がそそがれる。誰がなんといおうとそれが正統なのであります。トムさんのように、その大事な下準備もせずにビールを飲み始めるなんて邪道も邪道。おいしいわけがない」

ト「おいしいわけがないといわれても、ぼくはおいしいのであるから、それでいいのではないのか？」

毛「よくありません。ものには順序というものがあるんです。お酒の前にはお風呂、これはもう神聖なる儀式なんです」

総立ちにひとり座したる女かな

『オリンピック応援席』という前書があります。金メダル取った選手に向かってまわりの応援席のひとたちが全員総立ちになって歓声あげているのに、ひとりだけじっとじぶんの席に座ったまんまの女が居る。こういう光景、テレビでたまに眼にしますね。選手とどういいう間柄なのかわかりませんが、じっと座ってる」

師「おれあ、どうも世間が金メダル金メダルってさわいであるのが気にいらねえ。貧乏くせえ」
ト「貧乏人のくせして、よくいう」

師「おれあ貧乏人だがよ、貧乏くせえのは、でつきれえなんだな」

毛「貧乏であるということと貧乏臭いということとは別物なんですよね」

師「おもいっきしがんばった結果、気がついたら金メダルっちゅうご褒美もらってたってんだっ
たらめでてえんだがよ、ご褒美ほしさにガツガツ歯あくいしばって髪ふりみだしてる姿みて
つとなんともなさげなくなる」

毛「ずっと前に、あれは冬季オリンピックのスキー競技だったんですが、どこかの国の若い男子
選手が、じつにゆっくりと滑っているんです。本人は一生懸命なんでしょうが、はた眼から
みると、じつにのんびり滑っている。アナウンサーも解説者も穏やかな微笑を含んだような
優しい口調で『なんだかこう、ちよっとスキーの上手な高校生が地元の大大会で一生懸命滑っ
ているって感じですねえ』とかなんとかいていましたっけ」

師「おれもそれみてたがよ、いまでもはつきり、あの姿おぼえてるな。金メダルうばいあつて眼
えつりあげてるやつらよりもよっぽど絵になってたな」

毛「ああいう選手を世界の大舞台に送り出した国、名前は忘れましたが、そういう国ってなんか
とてもすてきでしたね。かつこいいなあとおもいました。

遊星の縁青らみて夏木立

『夜明け』という前書があります。夜明けが近づいて、遊星、つまり地球の地平が青く潤みは
じめると、それまで気がつかなかった手前の夏木立が黒々とその姿を現わしてくる。静謐な
一瞬を、じつに見事に捉えていますね。

それにいたしましても、人類というものを『地球人』ではなく『遊星人』という風にいい換
えると、ちよっとイメージがちがってきますね」

師「はぐれもんの星に乗っかってるくにやくにやしたえたいの知れねえ生きもん」

毛「そうなんですよね。『地球』という星に『遊星』という名を付けた学者は、おそらく地球の姿
に、宇宙をさまよう孤独の翳りを嗅ぎとったからこそ、そう名付けたんだとおもうんです。

『迷い星』ともいうそうですしね。われわれは、つい、地球イコール人類の棲む星、だから
ほかの星とはちがうんだとおもいがちなんですけど、一步引いて眺めれば、ほかの星と五〇
歩一〇〇歩。迷えるさびしい孤独な遊星のひとつにすぎない」

師「でもよ、じぶんが遊星人だとおもうと、ちつとばかしくきうきしてくるわな」

毛「みんなでこの遊星を操縦して、どっか遠くの銀河に行ってみようかって気になりますね」

師「そうかあ、おれあ遊星人だったんかあ」

ト「ひからびた遊星人」

毛「干涸びたものもいれば、生まれたてのびちびちしたものもある。そういう生き物たちをびつ
しり乗せて、地球という遊星はこの大宇宙をきょうもさびしく飛んでいる。それにいたしま
しても、これほど原句から遠去かかってしまった作品も珍しい」

師「なんしる遊星だからな」

33 春雨や抜け出したままの夜着の穴

毛「内藤丈草の『春雨や抜け出したままの夜着の穴』とぼけた哀しみが漂っていて、大好きな句です。現代俳人の作であってもぜんぜん不思議ではありませんね。時代を越えてすんなり読めます。」

春雨や抜け出したままの蛇の殻

夜着の穴には、抜け出していった主人が戻ってきてまた潜り込むわけですが、蛇の殻には、蛇はもう戻ってこない。しんと脱ぎ棄てられたまんま」

ト「にんげんも脱皮できたらおもしろい」

師「誕生日のたんびに、丸ごとずりりとむけたりしてな」

毛「そのむけたやつに風船ふくらますみたいに空気吹き入れると等身大の人形になる。すてきな誕生記念品になりますね」

師「むけたあと、本体のほうはどうなるんだ？」

毛「毎年新たに剥けるんですから死ぬまで皺ひとつなし。ぷりっぷりの頬つぺたのまんま。それに、剥けていった皮が体内の毒素をかなり吸い取ってくれているとしたら、病気にもなりにくいということになって、もう元氣澁刺。るるん気分、ぷりっぷりの笑顔で天国に行けちゃう」

ト「む脱皮薬みたいなもの、だれか発明してくれるといい」

毛「ノーベル賞まちがいなしですね。」

はるさめの湯気も静かに春の雨

『小鍋立て』という前書があります」

ト「小鍋立ってってなに？」

毛「ふつうのお鍋よりちいさいひとり用のお鍋があるんです。春の夜、微かな雨の音を聞きながら、湯豆腐かなにかの小鍋立てでひとりお酒を飲んでるところなんです。しんとした部屋の中、煮えたはるさめを箸でたぐりあげると、そこからおだやかな湯気が立つ」

師「どうふのところが舌ざわりと、はるさめのつるんとした舌ざわり、そこへ人肌の酒をほ

おりこむ。もーたまんねえな」

毛「豆腐とかはるさめなんてものは、もう舌ざわりだけが命といってもいいくらいですからね」

ト「すきな舌ざわりのものもあるが、ぎやくにだいきらいな舌ざわりのものもある。あんかけ焼きそばなんかたべてあのおぷりツとしたちいさなエビにぶちあたると吐きだしたくなる」

毛「深い理由はないのに、どうしても受け入れがたい厭な食感であるんですね。わたくしは、味噌ラーメンのスイートコーン、あれがそうなんです。スイートコーン自体は大好きでして、ビールのおつまみなんか食べるとてもおいしい。それ自体の食感もぜんぜん厭じゃない。ところが、味噌ラーメン啜っているときにあれと一緒に口に入ってくると、どうにもがまんならない。だから、たっぷりのっているスイートコーンをあらかじめ蓮華で取り除けてさきに食べてしまってから麺を食べるんですが、どうしても五、六粒、麺に潜り込んでやっついているときがあるんですね。そんなときはもうほんとに鳥肌立つし腹も立つ」

師「そのてん、小鍋立ては、てめえのすきなものいれて、すきなように食うわけだから、なんの問題もねえ」

毛「帰宅が遅くなって家族がみんな夕食済ませたテーブルで、ひとり、残り物の浮いている大きな鍋でやっているとどうしてもしょぼく来てきちゃいますけど、小鍋立ては、心地よい孤独感はあるって、孤立感はないんですね。」

ハンサムに歩みはこへる鹿の秋

『奈良』という前書があります。たしかに奈良の、あの豊かな角を揺らせながらゆつくり歩いている鹿の姿は惚れ惚れいたします。由緒正しき端正な美男子といった風ですよね。やはり奈良の鹿だから、こういう句になるのかもかもしれません。わたくし古都コンプレックスみたいなものがあるもので、奈良には強い憧れがあるんです。その奈良の鹿ですから、これはもう、近寄りたき血統書つきの美男子。顔もハンサムなら、姿もハンサム。立ち居振る舞いすべてがハンサム。そんなよそこの鹿とはわけがちがう。それでいて、派手な自己主張をしないですから、なおさら凄い。

もちろん鹿だけじゃない。奈良という土地、そこに何代にもわたって棲みつづけているひとびと、みんな凄いなあとおもっちゃうんです。江戸っ子なんて、奈良がくしゃみしたら、みんなばらばらばらって吹き飛んじゃう。奈良、かつこいい」

ト「茶粥、かつこよくない」
毛「ああ、奈良の茶粥ね。二日酔いの朝に食べた奈良の茶粥には助けられましたけど。体がすぐにつきりした記憶があります」

ト「あんなもの、よく食べられるな。お茶づけの食べのこしかとおもった。まずはなかったけど、おいしくもなかった。あれは食べものではない」

毛「お米が主役なのか、お茶が主役なのか。食べものなのか、飲みものなのか」
師「すすりもの」

毛「あの朝はとても寒かったから、鼻水啜りながら茶粥啜りました。たしかにおいしくはなかったけど、まずくもなかった」

ト「ちがう。まずはなかったけど、おいしくもなかった」

毛「微妙に意見が分かりますよね」

ト「ただあの鹿せんべいはいしかった」

毛「みていると、ほとんどのひとが、鹿にやりながらじぶんもすこし食べますね。あれ、ぜったいひと口食べてみたくなる」

ト「ドッグフードににてた」

毛「ドッグフードもぜったいひと口食べてみたくなりますね」

師「近所の犬の皿にのこってるやつ失敬して食うことあるけどよ、たしかに酒のさかなにぴったしなのが、たまにあるな」

毛「たまにある、ということは、そうとう試しているわけですね」

ト「ただで釣ってきた鯉と、ただで失敬してきたドッグフードで晩酌やってる」

師「食つてるところをよこどりしてくるわけじゃねえ。食いのこしてるやつをもらってくるだけ」
毛「みなさん、やっぱり食べているんですね。せっかく、かつこいい奈良のお話していたのに、
かつこ悪い横道にそれてしまいました。

鐘の音に秋のまぶたの閉じてゆくかな

師「原句の跡がどこにもねえじゃあねえか」

毛「困ったもんです。作品としてはすばらしいんですけどね。鐘の音にうながされるかのよう
に半球状の天空が地平にむかって昏れてゆくさまが、あたかも巨大なまぶたが閉じてゆくよう
にみえたんでしょう。

それはそれといたしましてですね、この句のように、パロディ句にもなんにもなっていない
作品がときどき出てくるので、今回はわたくし、この作者になりかわって、その創作過程を
想像してみたいとおもいます。
えーと、まず。

原句『春雨や抜け出たままの夜着の穴』これを読んで、この作者はどんなパロディ句をおも
いついたか？たぶん『鳴る鐘に窄(すぼ)まりゆくか秋の眼(まな)』という句をおもいついたん
です」

師「なんでそんなことわかるんだ？」

毛「ですから『たぶん』と申しあげております。原句の韻を踏まえると、こういう句ができてし
まったんでしょうね、たぶん。

さあ、とりあえずこんな句ができたにはできたんですが、読み返してみると、まず上五の『鳴
る鐘に』が、なんとなくパツとしない。『春雨や』の音をなぞってなんとか語呂合わせして
はいるんですが、パツとしない。第一、鐘というものはそもそも鳴るものなんですから、『鳴
る鐘に』といういい方は、青い青空とおなじで、ダブツちゃってる。イメージも鈍い。

そこで、ごくふつうに、『鐘の音に』と言い換えてみると、あんがいすんなり、イメージも
すっきりしたんでしょうね。で、『鐘の音に窄まりゆくか秋の眼』

これなら全体的にみても、なんとかパロディ句らしい趣きもあるしな、とおもいはじめたは
いいけど、こんどは、下五の『秋の眼』が気になりました。この作者、最初は、原句の『穴』
の語呂合わせで『眼(まな)』としたんでしょう。『眼差し』などという言葉もあるわけだから、
『眼』は『まな』とも読むんじゃないか？でも、ほんとに『まな』と読むんだろうか？

そこで、この作者、いろんな辞書をめくって見たんでしょうが、どの辞書みても『まな』
とも読む』とは書いてない。となると、下五の『秋の眼』は不採用にするしかなくなっちゃ
ったんでしょう。

さあどうする？

『鐘の音に窄まりゆくか秋の瞳は』『鐘の音に秋の瞳は窄まりゆくか』『鐘の音に秋のまぶたの
窄まりぬ』などなど、いろいろやってみるもの、いまいちぴんとくるものがない。
だんだん疲れてくる。

そして気分転換に煙草を胸一杯に吸い込んだとき、ふとおもった。おれはさつきから、『窄まる』という言い方にこだわっているけど、かんがえてみたら、それほどこだわる必要ないんじゃないか？ってね。もっとふつうに自然な言い方でもいいんじゃないか？と。そうして、最終的に『鐘の音に秋のまぶたの閉じてゆくかな』という表現に辿り着いた。最初に閃いた『半球状の天空が地平にむかって昏れてゆく』という心象風景だけは崩さずに作品を仕上げたかったわけですから、まあ、なんとか辿り着いたこの最終形は、かなり成功しているみたいである。

読み返してみても、不自然さがなくて、すんなり読みくだすことができる。これでよし。原句を生かしたパロディ句にはぜんぜんなっていないけど、でもまあ初稿はパロディ句になっただけだから大目にみてもらおうじゃあないか。

と、まあ、以上すべて、わたくしの想像なんですけどね」

師「とにかくよ、こんなもんをパロディ句として採用してるこのテキスト、そうとういいかげんだわな」

毛「たしかにあんまり良いテキストではないのかもしれないかもしれませんが。最後の句にまいりましょう。

春雨やどこへ行ったのポチの馬鹿

こういう句も採用しているんですから、それほど悪いテキストでもないのかもしれないよ。飼犬の失踪。経験おありのひと、けっこういらつしやるのかもしれない」

ト「日本にきて、はじめてアルバイトした喫茶店に、花子というおおきな犬がいた。ママさんが裏庭でかっていたのだが、はじめてみるガイコク人であるぼくにもとてもよくなついてくれていて、まいにち夕方になると、ぼくが散歩につれていった。たまに街路樹につないで、本屋にしばらくはいつてでてゆくと、ぼくの顔みるなり、とびあがるようにおきあがって、しっぽ、ちぎれるほどぶんぶんふって、からだわっさわっさ上下させて、もう、からだでかいのにこどもみたいだったな。

その花子が、ある日とつぜん、死んだ」

毛「失踪じゃなくて、死んだんですね」

ト「ぼくがころしてしまったのかもしれない」

師「どいうこった？」

ト「死ぬまえの日、ゆうがた、いつものように散歩にでかけた。一日中裏庭につながれているから、いつもそとへでると、うれしくってうれしくってたまらない。いくらゆつくりいこうとしても、でかいからだをまえのめりにしながらぐいぐいぼくをひっぱっていく。

そのときもぼく、ふとくてもおきたい鎖のリードにひっぱりつづけられて、はあはあいいながらなんとかついていったのであったが、とちゅうで石につまづいてとうとうころんでしまい、おもしろい顔で地面にぶつけてしまった。

あまりにも痛かったし、とおくでみていたこどもたちがおおわらしたので腹がたつてしまい、リードのはしをにぎったままたちあがりながら、つい、御者が馬車馬を手綱でたたくみたいに、そのリードで花子のよこっぱらをおもいっきりたたいてしまったのである」

師「そりゃあ、こんどは花子が痛かったわな」

ト「ギャンというひと声だけだったけど、花子のあんなすごい声、はじめてきいた」

毛「それでどうなったんですか？」

ト「ひと声ないただけで、すぐあるきはじめてたので、そのままお店にかえった。そして、つぎの日の夕方、口から血をだして死んだ。ぼくが、あんなふとくもおもたい鎖でおもいきりたたいたから、内臓がどうにかなくなってしまったのにちがいないのである。ぼくがころしてしまつたのにちがいないのである」

毛「かりにそうだとしても、ちよつと腹立ちまぎれにやつた、とっさの行為だったんですから、あまりごじぶんを責めないほうがいいんじゃないですか？ わたくしだって、そんなときは、きつとトムさんとおんなじことしたとおもいますよ」

ト「たしかに、それはそうかもしれない。とっさにたいたことは、いつの日か、時間がたてばわすれられるのかもしれない。でも、どうしてもわすれられないことがひとつだけある」

毛「ひとつだけ？」

ト「その日の朝、ぼくは、前の日おもしろいことかうしろめたかったのかもしれない、いつもよりはちよつとちいさい声で『おはよう』と声をかけた」

毛「毎朝、裏庭に行つてそのひと声をかけるのが習慣だったんですね。そしたら花子は？」

ト「地面にあごをつけてじつと腹這いになったまんま、ぼくの顔をそつと上目づかいにみて、しつぽ、ふつた」

毛「しつぽ、ふつたんだ」

ト「しつぽ、ふつた。ゆっくりだったけど、ゆつさゆつさ、しつぽふつた。しつぽふつて、その数時間あとに、花子は死んだ」

毛「それは忘れられないかもしれませんね。でも、たしかに死んではしまいました。こうやつて、トムさんがわたくしたちに花子のお話をしているとき、どこかそのあたりで花子は生きているのかもしれませんが」

ト「しつぽ、ふつてるのかな？」

34 長々と川一筋や雪の原

毛「きょうは野沢凡兆の『長々と川一筋や雪の原』。雄大な景色を、単純な言葉と単純な構成で一氣に詠みおろしてとても気持ちのいい作品です。削りに削つて到達した表現なんですよ。うね。

ちひちひと傘をかするか春の雪

S音とK音を重ねることでもいい効果をあげていますね。春の雪がふりだすと、誰もがふともいだして口ずさみたくなるような、なにげないため息のような作品」

ト「雪はなんで六角形なのかな？」

毛「太古の昔から気の遠くなるほどの雪がふってきたわけですが、ひと粒の例外もなしにすべてが六角形である、というのはほんとうに驚きですよ。それにいたしましても、なぜ六角形

なんでしょね？」

ト「地球の磁力のせいなのかな？」

毛「台風の目なんかも、丸くみえますけど、正確に観察すると六角形らしいですね。磁力説、あながちまったくの見当はずれでもないんじゃないでしょうか」

ト「一分が六〇秒で一時間が六〇分。これも六という数字がからんぞ」

毛「これは磁力の問題ではなく時間の問題なんでしょうが、でもたしかに、六という数字が絡んでますね」

師「たんなるロクでもねえ偶然だったりしてな」

毛「**みあげれば青一色(あおひといろ)の雪の原**

きのうまでの雪がやんで、天は雲ひとつない青一色。『あおいっしょく』ではなくて『あおひといろ』と読ませていますね。『あおいっしょく』だと、眩しい感じが出てしまって、光の粒子がきらきらうるさい。おそらくこの作者、風ひとつない穏やかで円やかな天の青い柔らかさを表現したかったんだとおもうんです」

ト「雪の平原でじつと雲ひとつない天をみあげていたら、平衡感覚がなくなってあおむけにたおれてしまったことがある。そして、たおれたまんま、天の奥をみつめていると、からだぐるぐる吸いこまれてゆくのであった」

毛「わかります、わかります。怖くなっちゃうんですよ。背中にへばりついた地球ごと天に吸い込まれてゆくというか、吸い上げられてゆくというか、あるいは落下してゆくというか。

大雪原で大の字に仰向けになったら、誰しもがそんな感覚に襲われるんじゃないでしょうか」

ト「眼をつぶっても、その感覚がずつとつづくのである。地球に磔にされたまんま、ものすごい勢いで吸いこまれてゆく」

毛「吸い込まれながら、つぎの句です。」

鉄橋を真一文字や終電車

川に架かった鉄橋の上を終電車が走っている。川面にも、くつきりとその姿が映っている。『真一文字や』が、いいですね。深夜の家路を急ぐ終電車の姿がじつに鮮やかに眼に浮かびます。以前、川べりのマンションに住んでいたことがあるんですが、ベランダに出て煙草吸っているとき、遠くの鉄橋を渡る終電車の音が川面を渡ってきましてね。その音聴くと、なぜかいつもジーンとくるんです。ああ、みんな、こんな夜遅くなっても、やっぱりじぶんの家に帰りたいんだなあってね。家族のもとに帰るひともいれば、待つひとのいないちいさな部屋にひとり帰るひともいるだろうけど、どうであれ、ひたすら懸命にじぶんの巣に帰ろうとしている。けなげな虫のようにね」

師『「えんえんと円を描いて終日電車」』

毛「なんですか？それ」

師「ときどきやる。朝から晩まで、いちんちじゅう山手線に乗ってる。いちんちじゅう、あきるほど乗って、百三〇円」

毛「山手線は、ひたすら東京都内を円を描いてぐるぐる廻りつづけるわけですから、つまり、一

駅分百三〇円の切符買えば、ずっと乗りつづけることができる。降りるときには、切符買った駅の隣の駅で降りればその切符で堂々と改札口を出ていけるんですからね」

師「いまにおれみてえのがふえたらいちんちゆう爺さん婆さんできっしりつまっちゃうだろうから、ふつうの勤め人や学生が、乗れずに駅にとりのこされたりしてな。しかも乗客全員が百三〇円だから、JRは、勤め人や学生から抗議はまいこんでくるわ、赤字にはなるわで、ふんだりけつたりになることまちがいなし」

毛「何周も乗りつづけていることを車掌や駅員に知られて詰問されても、『うっかり寝過ごしたらしいねえ』ととぼければいい。それでも車掌や駅員がしつこく強く詰問してきたら、新聞に投書すればいい」

師『ただ寝過ごしただけの哀れな老人を、JRは冷酷にも犯罪人扱いしています。たしかに事実だけを掬いあげれば、うっかり寝過ごしただけとはいえ、こちらに非のあることは否定できません。しかし、それはあまりにも杓子定規的であり、理屈優先といえないでしょうか。人の世は、理屈よりも情を優先させるべきなのではないでしょうか。年金暮らしの、かよわき者に、もつと愛を』ってなぐあいよ」

毛『かよわき者に、もつと愛を』これ、まさに報道機関の基本方針と合致するわけですから、こういう投書、おそらく投書欄のトップに取りあげざるをえなくなる」

師「そんなことになりや、こんどは全国から抗議まいこんできてな、JR、ふんだりけつたりどころか、あとかたもなくなっちゃうかもな」

毛「そうならないようにするには、JRは、そういう老人たちを、みてみぬふりするしかなくなる。で、ますます山手線に老人たちが殺到する。恐ろしい近未来図ですね。」

蝋燭の火はひとすじに顔と顔

『はじめての誕生日ケーキ』という前書があります。誕生ケーキの上の一本の蝋燭に火が灯っている。その火を、一歳になったこどもと両親がじっと凝視しているんですね。この句を読んで、すぐにおもいだしたのは、わたくしのはじめてのこども、男の子なんです。そのはじめての誕生日ですね。

小児病棟の個室で、点滴のチューブ揺すりながらはしゃいでいるあやつり人形のような息子と、妻とわたくしの三人だけの誕生会。

病院内での、特に個室での火気は厳禁でしたので、蝋燭に火をつけること、はじめは許可してくれなかったんですが、看護婦長に頼み込んでやっと許可してもらいましたね。蝋燭に火をつけて室内の灯りをぜんぶ消したときのあの息子の顔は忘れられません。息子が本物の火というものをみたのは、それが生まれてはじめてだったんですからね。

光を受けたちいさな顔が闇の中に浮かんで、その眼の中でちいさな火がちろちろ揺れている。光を受けた妻の顔も闇の中に浮かんで、その眼の中でちいさな火がちろちろ揺れている」

師「親子三人水入らず」

毛「そうして、妻とわたくしで、周りに聞こえないように小声で『ハッピーバースデー』を歌ってから息子に火を吹き消させたまではよかったですけど、あたりまえといえればあたりまえ

なんです。火が消えた。とたん室内が真っ暗になっちゃいましたね。あのときはあわてました。猛ダッシュでドアの横。つちよのスイッチの所に飛んで行って部屋中の明かり点けまくりましたね。あんなにあわてたことありませんでした。息子が吹き消す寸前まではそうなることにぜんぜん気がつかなかったんですけれど、部屋が真っ暗になったとたん、気がついたですね」

師「そういわれてみりやあ、たしかに、あれ、めでてえ誕生日なのに、わざわざ命ふきけるようにみえなくもねえ」

毛「まあ、気にするほうがおかしいといわれればそれまでなんですけれど」

師「長男、そのあと良くなったのか？」

毛「いえ。まあ、これからもいままで通りいい意味で病氣と仲良くつきあっていってくれればいいかなとはおもっているんです。小児病棟でののはじめての誕生会。おもえば、あれからもう、三〇年以上になるんですねえ。
つぎの句です。

かなかなの声一筋や秋刀魚焼く

『佐藤春夫・作』という前書があります」

ト「あの『さんま苦いか塩っぱいか』という詩を聞いたひとか？」

毛「どうもそうらしいですね。夕方、開け放たれた台所で、あるいは庭先で、男がひとり秋刀魚を焼いている。遠くでかなかなが一匹啼いている。かなかなの声も一筋なら、秋刀魚焼く煙も空にむかつて一筋。晩夏というか初秋というか、静かな夕暮れどきの気分が満ちていますね」

師「かなかなの声一筋や塵置場」

毛「おっ、やるじゃないですか。じつに師匠らしい作品。もの悲しくも美しいかなかなの声と、もの悲しくも穢ない塵置場との対比がすばらしい。それにいたしましても、『かなかなの声一筋や』これ、下五にいろいろ置けそうですね。

かなかなの声一筋や奥座敷

とかなんとか。平凡ですけど、とりあえずそれなりの絵になる」

師「かなかなの声一筋やシャッター街」

毛「師匠の場合、その方向でやると、ほとんど出来そうですね」

師「かなかなの声一筋や『貸間あり』」

毛『『貸間あり』の貼り紙が、じつにいい。よれよれの貼り紙が、古い木造アパートの閉めきった雨戸なんかに貼りついて破れかかっている。映画の一シーンのようです。貧乏人にしかない視点ですね」

師「おそれいったか」

毛「かなかなの声一筋や本閉じる

かなかなの声一筋やオンザロック

わたくしも、ほとんど出来ることは出来るんですけど、師匠の作品には遠く及びそうにありません。育ちが良すぎるんでしょうね。トムさんも一句どうですか？」

ト「かなかなの声一筋や足が臭い」

師「なんだそりゃ？」

ト「このあいだ山で歩きつかれて木のかぶにこしかけてたら、ものすごいにおいがしてきたのでびっくりした。じぶんの足のおいであつた」

毛「今年は、かなかなの鳴く頃になつてもいつまでも猛暑日でしたからね」

35 世の中は三日見ぬ間に桜かな

毛『世の中は三日見ぬ間に桜かな』

大島蓼太という作者の名を知らなくても、この句を知っているひとは多いんじゃないでしょうか。

この最中(もなか)すつかすつかの中身かな

昔はこういう最中が多かつた。みた目はふつうの大きさなんですけど、中身は、真ん中へんにちよこつと餡子が座っているだけ。うっかり端っこから食べようもんなら、皮ばかりだから、それが上顎にべたッて貼りついちゃいましたね。舌の先でこそげ落とすのが大変でした」

師「あれはな、ひとくちかふたくちかくれえでほおりこまねえと、そういうめにあう」

毛「最近ほ中身がはみでちやいそうな最中もありますけど、あれはあれでまたちよつと最中とはいえない」

師「そもそも最中はすつかすつかするくれえにでけえ皮があるからこそうめえんだな」

毛「となると、昔の最中のほうが、本来の最中ということになるんでしょうか？上げ底的発想でああなつたわけではなかつた」

ト「上げ底といえは、一度、そば屋でひどいめにあつた。

ざるにもつてあるそばを箸でつかもうとしたら、箸のさきがカツツととまつた。あれつとおもつてよくみると、ざるをさかさまにふせたうえに、そばがはりつくようにならんでるのである。だから箸で二、三回ひろいあげたらもうおしまい。とんでもないいんちきであつた」

毛「それ、上野のお蕎麦屋さんでしょ？あれには、わたくしも最初は面喰らいました。ふつうは、笹のへこんだほうに盛りますけど、あそこは逆に、ふくらんだほうに盛る。おもわず笑っちゃいましたね。洒落なのかもおもいましたけど、どうもそうではないらしい。

わたくしだけの想像ですが、蕎麦をぶあつく重ねて盛ると、中のほうが蒸れてのびてしまつたりくつついてしまつたりするから、ああいう薄い盛りかたをするようになったんじゃないかないでしょうか」

ト「そんなことはどうでもいい。とにかく、あれはいんちきである。けつきよく、ざるそば十枚以上食べて、やつとおなかいっぱいになつた。ものすごい値段になつてしまつた」

毛「なにかの拍子に偶然、裏返しになつていた笹の上にお蕎麦を落としてしまつたときにひらめいたのかも。これなら蕎麦が蒸れてのびたりくつついたりしないのではないかつてね」

ト「だったら、おおきくてひらべつたいざるにうすくもりつけければいいではないか。あれは、す

くないそばを、いかにももりあがっているようにみせるためのいんちきである」

師「だったら一枚でやめて、ほかの店にいきやあよかったじゃねえか」

ト「はらはたつたが、すごくおいしかったので、つたくさん食べてしまったのである」

毛「そうなんですよ。たしかに高いんですけど、たしかにおいしいんです。わたくし、いまでもたまにあのお店行くんですよ。量の問題だけ眼をつぶれば、ついつい足が向いちゃう」

師「そばなんてもなあ、そもそもそうががつがつたくさん食うもんじゃあねえんだよ」

毛「**ガウディの三日坊主の後始末**

スペインの建築家ガウディの未完のサグラダ・ファミリア大聖堂。近年中に完成、という噂もあれば、百年後という噂もある。あの奇妙な建物を天才的なおもいつきで設計したのはいいけど、おもいついた当のガウディは、仕事半ばどころか、ほんのちよつと手がけただけでさっさと死んでしまったから、それを引き継いだ後世の建築家たちは大変な目にあっているわけです」

師「かりに百年後にできあがったとしてよ、それが、そのガウディとかなんとかいうやつのかんがえてたもんとおなじもんなのかどうか」

毛「そうですね。本人に聞くことできないですからね。もしかしたら、ガウディが頭に描いていたものとは似ても似つかない建物になってしまいかもしれませんね。ただ、時代の変化とともにどんなに新しいアイデアや技法を取り入れて建築をすすめていこうが、その奥には、かならずどこかにガウディの血液が流れているはずだとおもうんです」

師「何百年たつても、わざと完成させねえって手もあるわな」

毛「そうですね。それはそれでまたすばらしいアイデアだとおもいます」

師「さもないや、完成したその日に、ぜんぶいっぺんにこなごなに爆破しちゃったりな」

ト「そもそも人類がいつまでつづくのかわからない」

毛「あの『ひぐらし』という詩を書いた詩人の未発表の生原稿がつい最近発見されましたね。作品として書き遺したもののなか、たんなる覚え書きのつもりで書き止めておいたものなのか、短いものですので、全文読んでみます。」

人類は一匹の巨大な生き物なのである

地球という丸い惑星にへばりついた一枚のひらべたいアミイバ状の生き物なので

ある

だからわれらにんげんのひとりひとり

柔らかな大気の皮膜に覆われたアミイバの内部に浮遊する細胞のひと粒ひと粒だ

とおもえばいい

細胞たちは愛しい

ときには憎みあいながら

あらたな細胞を生んで死んでゆく

死んではゆくが

人類という一匹の生き物は生きつづけてゆくわけであり

その内部では

生み落とされたあらゆる細胞がさらにあらゆる細胞を生んでゆく

そうして一匹の生き物であるかぎり

人類は

いつかはかならず滅びるのである

師「『ひぐらし』とこの未発表原稿に共通しているのは、いずれは滅びるであろうこの世ではあるが、そのはかないこの世にすこしでもおのれの痕跡を残したいというさらにはかない心情なんでしょう。たしかにひとりひとりは無数の細胞のひとつにしかすぎないかもしれないけど、それでもなんとか、というか、それだからこそ、生まれて生きた証しを刻みつけたいんですね。そんなおもしろいのが、このふたつの作品の底には流れているような気がするんです。

暑き夜の形きまらぬ枕かな

師「おれあ、枕あるうがなかるうがいつだって天井むいて大の字」

毛「そういうひと信じられません。わたくし、こどもの頃から、大の字で寝たこと一度もないですね。枕いろいろこねくりまわしたり、右半身を下にしたり、左半身を下にしたり、足組み変えたり、ほんと大変。特に、まぶたは、かならず左右どちらかを枕にぎゅっと押しつけなとせつたいに眠れませんです」

師「なんでだ？」

毛「わたくし、ふだんから尖ったものがこちらに向いていると、もう駄目なんです。鉛筆とか鉄なんか、机にちよつと置くとときでも、かならず先っぽを向こう側に向けます。ぜつたいじぶんのほうには向けて置かない。机の抽斗に仕舞うときでも、かならずそうします。もしそうしないで、先っぽをこちらに向けたまま閉めてしまうと、むしろ机の上に置く場合よりもっと怖ろしい気分になります。なんせ、みえない所で、わたくしに向かって尖っているわけですからね」

師「枕にまぶたおしつけるのと、どんな関係あるんだ？」

毛「おそらく師匠には理解できないとおもうんですが、たとえば大の字になって、つまり、顔を真上に向けたまんま眼をつぶると、深い闇の上から、すーっと一本、尖ってくるものがあるんですよ。まばゆく銀色に尖ってくるものが。これ、ものごころついた頃からの、毎夜の慣わしなんです。針とか矢尻とかの映像が浮かぶわけでもなく、なんといったらいいか、『尖り』そのものが降りて来て、こちらに向かってじつと光りだすんです。そうなると思げようが無くなる。それにはどう対処したらいいのか？うつ伏せになって両まぶたを枕にぎゅっと押しつけるんです。

両まぶたを枕に押しつけければ、その尖ったものがこちらにむかって来ない、というか、むかって来ない、ということにするんです。つまり、無理矢理そうおもしろい込むようにするんです。すると、ま、どうにかこうにか気分が落ちついてくるんです。

ところが、枕に両まぶたを押しつけていると当然息がしづらくなる。いろいろやってみた結果、『どちらか片方のまぶたを押しつけるだけでも効果はあるだろう』と、これもまた無理矢理そうおもい込むようにして、それからは、眠るときにはかならず左右どちらかのまぶたを枕に押しつけることにしたんです」

師「効果あるのか？」

毛「効果あり、と無理矢理おもい込んで六〇年。まあ、なんとか無事に今日に至っておる次第であります」

師「ごころうさん」

毛「最後の句にいきたいとおもいます。

湯煙りも月下に縮む寒さかな」

師「おれあ、真冬の露天月見風呂、でるにでられず悲鳴あげたことあったな。肩からしたはなんとかあつたけえんだがよ、首からうえは氷点下。まつげにゆげがからんでそれが凍っちまつてるくれえなのによ、手足は煮びたしのみみずみてえにぶよぶよになっちまつてる。いつかはできやあなんねえんだが、でようとすると、からだ、それほしんからあつたまっちやいねえから、すぐ凍りそうになるんだな」

毛「で、けつきよくどうやって出たんですか？」

師「だから、悲鳴あげた」

毛「あ、ほんとうに悲鳴あげたんだ」

師『助けてくれ』つてな。そしたら、まっさおな月夜の下、旅館の番頭がにっこにこ笑いながら、

まっかな練炭のせた七輪とでっけえ毛布もってゆっくりあるいてきやがった」

毛「あわてて飛んで来たんじゃないやなくて、笑いながらゆっくりやあって来たんですか？」

師『毎晩、こーいうお客様が、かならずおひとりやおふたりいらっしやいます』つてな。泥まみれのガチガチにかじかんだ足ひきずつて、宿にけえつたときや、腹たつてしょうがなかった。なんでこんな目にあわにやならねえのかつてな。けつきよく風邪ひいちゃって、一晚のつもりが、一週間そこにとまることになっちまつた」

毛「にっこにこ笑っていたのは、宿代計算していたのかもしれないね」

師「もってつた金、すっからかん。『旅に病んで金は枯野を散りまぐる』。だがよ、あんときや、むしろせいせいした」

毛「せいせいしたんですか？」

師「ふしぎにせいせいした。なげえことかけてためてきたまとまつた金をそんなふうになだに遣うつてもいいもんだ」

毛「サグラダ・ファミリア大聖堂を、完成したその日に爆破させちゃうひとつて、たぶん師匠もたいなひとなんでしようね」

36 目に青葉山ほとぎす初鱈

毛『目に青葉山ほとぎす初鱈』前回の原句とおなじで、山口素堂という作者の名を知らなくて

も、この句を知っているひとは多いんじゃないでしょうか。『目には青葉』『目には青葉』世間では、どちらも通用しているようです。

間にあえば山ほどの傷つくらずを

『特急』『あずさ』に駆け込み乗車しようとしてすでに閉まっているドアに顔をいやというほどぶつけておもしろい跳ね返された体が通りすがりのやくざの体にぶち当たってしまったためにポコンポコンにされた近眼の男のつぶやいた一句』という長い前書があります。作者、かなりの猛烈ビジネスマンなんでしょうね。わたくしのもっとも嫌いなタイプ。ポコンポコンにされてざまあみろです。

わたくし、たまに新宿から特急『あずさ』の指定に乗るんです。妻の実家まで行くわけですが、いつも妻は先に行っており、わたくしだけ仕事終わってからひとりで行く。それで、いつもおもしろいんですが、新宿駅から八王子駅間がじつに不思議なんです。通い慣れている毎度お馴染みの見慣れた駅や街並みが、いつもと違った表情をつくって旅情を醸し出している。まったくの別世界になっている。もう、じつに優雅なるひとり旅気分になれるんです。

つまり、わたくしにとって『あずさ』は旅情を発見するための乗り物であるのにたいして、この作者は日常生活の中の単なる移動手段としてしか認識していない。こころに潤いというものがなく、

ト「仕事熱心のあまりポコンポコンにされたビジネスマンをざまあみろとおもってるあなたにこころの潤いはあるのか？」

師「おれもいま、それきこつとおもつた」

毛「つぎの句です。」

水桶のびちやりと置かれ夏は来ぬ

『魚屋にて』という前書があります。これも、ぜんぜんパロディになっておりませんけど」

師「釣瓶井戸の底からひきあげた桶を店先の地べたにびちやりと置く、たっぷりへえつてる水が桶のふちからあたりに飛び散るんだな」

毛「灼熱の町なかで、そのあたりだけ空気が澄んでいるんですよ。そういう店、昔はよくありました。店先に出した大きな台の上に俎板置いて、そこで魚を裁く。そして俎板の上に残った内臓なんかを、その井戸水で洗い流す」

師「おれあ、おっさんがすてちまうまえに、その内臓ただでもらってけえつて、それ、おふくろが塩からにしたっけな」

師「むかしから、ただのものをよく食べてたわけだ」

師「ありやうまかったな」

毛「都内でも、井戸、けっこうありましたよね。わたくしの家の前は都電走っていたんですが、そんな都会の裏の路地にも井戸ありましたものね。珍らしくもなんともなく、みんなふつうに使っていました。」

その井戸は、釣瓶井戸ではなくて、手押しポンプ式の井戸でした。ポンプのてっぺんについ

ている長い鉄の取っ手の端を握って上下させると、おおきな蛇口から水が出てくるってやつ。ガツチャンコ、ガツチャンコ、最初は金属同士を軽くこすりあわせているだけのスカムゝの手応えで、こどもでも片手で楽に上下させることができるんですが、四、五回目くらいに突然重たくなつて、右手のひらにぐツと抵抗感が加わつて来る。水の塊りを掴んだ瞬間のあの嬉しき。すかさず、こんどは両の手で、全身に力を込めて上下させると、ポンプのてっぺんからも、蛇口からも、豊かな水が飛沫あげて溢れ出てくるんですね。がぼがぼ溢れ出てくる水を見てるとなんだか誇らしくなつて、大人になつた気分がしたものです。

師「それにいたしましても、井戸があつちこつちにあつたということは、都会の地底に巨大な湖があつたということなんですからね、これはとてもすてきなことです」

ト「都会の底に湖があつたのか、湖のうえに都会がかんでいたのか？」

毛「どちらにしてもすてき。水の都東京」

ト「京都なんかも、地面の下はたつぷんたつぷんの水だらけということである」

毛「そうらしいですね。年間を通してつねにお腹の中に澄みきつた水をたつぷりと蔵しているんですから、やはり京都、じつに豊かな土地といえますよね。

目に青葉翳し透かせば子らの声

家族そろつてのピクニック風景ですね」

師「つまらねえ句だ。句がつまらねえというよりは、この作者のやろうがつまらねえ」

毛「つて師匠はおもっちゃうわけなんですよね。わたくしも独り身のときは、よくそうおもつたもんです。妻子を連れた若い父親が、デパートのファミリー食堂なんかにいそいそ出かけて行つていたらこにいたらこしているのみてみると、わけもなく軽蔑したもんです。

『あーあ、べつたりと家族やつてるなあ』つて」

師「ああはなりたくねえもんだ」

毛「つてね。ところが、いざじぶんが妻子持ちになつたとたん、毎週休日の昼になると、三人で

そのデパートのファミリー食堂に行つて、にいたらこにいたらこしております」

師「つまらねえやろうだ」

毛「そういわれると反論できません。

ただ、それはそれといたしまして、この句、読みようによってはちよつと屈折しているんですよ。妻やこどもたちの笑い声を聞きながら、両ひざに両ひじをついてじつとひとり目に青葉翳して、その向こう側をじつと透かし覗いている。幸せに満ちみちているこのひとときをそうやってじっくりと確かめているのか、それとも、おれはこれでいいのだろうか？という疑問のようなものがふと湧いてきているのか。どちらにしても、この作者、このとき、家族の中で、ひとりちよつと浮いているんですね。なにげない句ですが、透明な孤独感がひんやりとひと筋、流れているような気がいたします」

師「あんがい、ちよつとはなれたとこで、妻も目に青葉翳してたりしてな」

毛「つぎの句です。

みつめればはにかむがごとく雪は解けゆく

初々しい作品です」

ト『はにかむ』って?」

毛「羞ずかしがるってことです」

ト「だれがはずかしがっているのか?」

毛「どういう風にも取れますね。雪がはにかんでいるのか、作者がはにかんでいるのか、一緒に歩いている恋人がいて彼女がはにかんでいるのか、あるいは風景全体がはにかんでいるのか」

ト「ぜんぜんわからない」

毛『はにかむがごとく』という響きを素直に耳に送り込めば、眩ゆいばかりの光景が眼に浮かんでくるはずです」

ト「どうして『はにかむがごとく』ではなくて『はにかむがごとく』なのか? 字あまりになるのがいやだったのか?」

毛「わたくしにわかるわけありません。作者に聞いてください。」

冬の終わり頃って、じぶんの中のかなにかがほどかれてゆく解放感みたいなものもあるんですが、同時に、大事に胸の奥で守り慈しんできたものを根こそぎ奪い去られてゆく喪失感みたいなものにも襲われるんです。だから春めく頃って、あんまり好きじゃない」

ト「ぼくは、日本の春夏秋冬、ぜんぶ好きになってきた。これからもずっと日本で暮らしたい。だから、いつかママをよぶつもりでいる」

毛「日本のこと『変な国』っておっしゃっているのに、来てくださいますかね?」

ト「くれば、ぜったい好きになる。俳句を好きになるかどうかはわからないけど」

師「あんがい好きになって、じぶんでもつくりだすかもしんねえぞ。『目に青葉山ほととぎすハム サンド』なんてな」

毛「**目脂(めやに)をば山ほど溜めて初ギネス**

『ギネス初挑戦に失敗して』という前書があります。どのくらい溜めたんでしょうかね」

ト「ぼくの日本のともだちの句かもしれない」

師「いろんなともだちいるんだな」

ト「自動車事故の全身複雑骨折で入院したとき、ひまつぶしにもなるということで三カ月間ずっと眼をつぶりつづけて溜めたそうである。二週間くらいたったころ一度病室をたずねたときサングラスをはずしてみせてくれたけれど、つぶっているというよりもくつついちゃってる両まぶたの両はじに、茶色っぽいおおきなかたまりができていた。かわきかけたなっとう豆みたいに、皺がよっているのになんとなく艶々していて、指でつまめばニチーツとつぶれそうなかたまりであった」

毛「じぶんのからだから出たものや、じぶんのからだの一部分に、妙な愛着心みたいなものが湧くんではないかね」

師「おれあ、昔、夏のおわりんころになると、かならず足のかかとにでえ水ぶくれができたんだがよ、それがつぶれると、なんせ皮のあつかかとのとこだからかなりぶあつかきぶた

になる。それを剥くのがなんともたのしいんだが、そんなりっぱに剥けたかさぶたみてつとよ、つい、口にいれて歯でぶちぎりたくなるんだな。ぶちぎって、もぐもぐやってるうちに、とうぜんのなりゆきとして呑みこみたくなる」

毛「わかりたくありませんが、なんとなくわかります」

師「あなたもやるんだ」

毛「いえッ、やりませんよ。やるわけはありませんが、そういうかたつてつこういらつしやるんじゃないかなとおもいますね。

髪をのばしつづけたり、爪をのばしつづけたり、そんなひとがギネスに挑戦しているところみたことありますけど、ギネスブックに載りたい気持ちもたしかにおおきな動機のひとつなんでしょうが、そもそもは、じぶんの体の一部を慈しみたい気持ちから始まったんじゃないでしょうか？ギネス挑戦は、あくまでも髪をのばしたい爪をのばしたいという気持ちの延長線におもいついただけのことだとおもいます。だから、ギネスに認定されたあと、すっぱりと髪や爪を切ったとき、かれら号泣しておりましたものね。ギネスに認定された喜びよりも、髪や爪を失ってしまった悲しみのほうがはるかにおおきかったようです」

師「で、その目脂のともだち、どうして失敗したんだ？」

ト「ギネス認定士がやってくるというその日の朝、うっかり、みごとギネスに認定された夢をみてうれし涙をながしてしまっただけ。いつものように眼をつぶったままそつと眼をさましたときには、左右の目脂がすっかりとれてしまっただけのことである。でも三カ月つづりつづけていたまぶたをあけたときの感動は、そうとうなものであったらしい」

師「そりゃそうだろうな」

ト「晴れわたった朝の窓のそとから眼にとびこんでくるさまざまの色や形が、ひとつひとつ匂うように感じられて、無神論者のくせに、この世はやはり神がつくったものにちがいないとおもったそうである。ちょうどリハビリもおわってその日から杖なしであるけるようになったから、よろこびはさらにふくらんで、ギネス初挑戦は失敗におわったけれど、こんなすばらしい朝をむかえることができたのは、ギネス挑戦のおかげですといっていたらしい」

毛「成功はしたもののばしつづけてきた髪や爪を失って悲しみのあまり号泣していたひとたちと、この目脂青年、どちらが幸せなんでしょうかねえ」

37 がっくりと抜け初むる歯や秋の風

毛「杉山杉風の『がっくりと抜け初むる歯や秋の風』老いの哀しさを、ちよつと突き放して詠んでいるところが余裕ですね。

ずっしりとゆら揺れる枝に小鳥かな

『柿の木』という前書があります。青空のもと、溢れるほど総身に実をつけた柿の木の、一本の枝だけが、ゆっくりとおおきく揺れている。よくみると、その枝の実に一羽の小鳥がいてせわしげに突っついているんですね。重たい実をたっぷりつけた枝が、軽い小鳥の体に乗った

だけなのに、ゆっくりおおきく揺れている。柿の実のゆたかな重量感と小鳥の清潔な軽さとの微妙な対比が、ある種の感じを出していますね」

ト「このあいだ、庭の柿をたくさん食べた夜、ぼくが柿の実になってしまったというこわい夢を見た」

師「かつてにひとん家に住みこんで、かつてにひとん家の庭の柿を食うからだ」

ト「ものすごい崖っぷちにはえている柿の木の枝にぶらさがっているから、いまにもふかい谷底に吸い込まれそうでおしりがむずむずする。耳をすますと、枝から首筋におくりこまれていく樹液の音がかすかにする。樹液は、ゆっくりではあるがあとからあとからおくりこまれてくるから、ぼくの体はどんどん甘くふくらんでくる。

下をみればふかい谷底。

体はさらにはんぱんにふくらんでくる。首筋もさらにひっぱられて石のようにしびれてくる。そして、とつぜんブチツという音がして、首筋がふわっとかくなるからおもったら、谷底へまっさかさま」

師「やっぱり罰があたったわけだな」

毛「そして谷底にぶちあたって即死？」

ト『ひえーっ』というじぶんの悲鳴で、底につくまえに眼がさめた。汗びっしりになっていた。もう二度と柿は食べない」

毛「たしかに、ゆたかに実ってゆくということは、死に近づいてゆくことでもあるんですね」

師「柿は、寝るまえじゃなくって、朝食うもんだ。二日酔いなんぞケロリとなおる」

毛「 たつぷりと油浮かべて兜虫

スナップショット。安っぽい絵葉書なんかでよくみかける図です」

ト「かぶと虫つかまえてきて、はりがねの虫かごでかったことがあった。えさのつもりで濃いめのさとう水しみこませたしろいガーゼをいれておいたのであるが、つぎの朝、ガーゼがまっくろになってた。蟻がびつちりすきまなくなっていたのであった」

毛「蟻が寄ってくるって、うっかりかんがえに入れてなかった」

ト「ちょっとかんがえればわかることなのであるが、うっかりしていた。階段からおりてきたママ、一分くらい失神した」

師「うっかり、といやあつり仲間に信心ぶけえ爺いがいてよ。昔、放火魔に家火つけられて焼けだされたことがあったらしくてな、それからというもの、とにかくあつちこつちの神社仏閣まわって火除けの御札あつめまくった。で、十年前ちいせえながらも念願の一戸建て新築したときに、その御札ぜんぶ、家のまわりにずらりとたてかけた。ところが去年の暮れもおしせまったころそれにかたっぱしから火つけられて、家全焼しちゃったんだな。家のまわりにおくすぺらな木の御札ずらりたてかけておいたら、放火魔にしてみりや、どうぞ火をつけておくんないませってなもんだ。だれがかんがえたって、ひやひやもんなことぐれえわかりそうなもんだがよ、その爺い、うっかり、十年間、一度もそれに気がつかなかったってえわけだ」

毛「十年間、朝から晩まで家のまわりにずらりと盲点が並んでいたわけですね。いままで火をつけられなかったことのほうが不思議です。それでそのお爺さん、大丈夫だったんですか？」
師「ひとり住まいだし、そんなときや、いつものようにそとで飲んだくれてたらしいから、けがひとつしなかったそうさ。へべれの午前様なんてけえってきたときや、家、かげもかたちもなかったってえことだ」

毛「いまどうされてるんですか？」

師「あつというまに無一文になったからあつというまに大金持ちになることだつてあるだろうってんでいろいろでけえ商売かんげえてたとき、『いまや空前の俳句ブームである』ってこと小耳にはさんだらしいんだな。『じゃあ俳人になって俳句売りあるけばかなりもうかるかもしれない』ってんで、いま、全国放浪の旅にでてるらしい。俳句なんてもなあ元手はタダだし、作れば作っただけ、売れば売っただけそっくりそのままもうけになるんだからこんなおいしい商売はない、つていつてたそうさ」

毛「いつの日か、立派な防火設備のついた超豪邸に住めるかもしれませぬね。つぎの句です。」

しゃくとりがなにを測るかこの夕べ

尺取り虫という名前のとおり、ひとが親指と人差し指で長さを測るようにぴったんぴったんって全身をのび縮みさせながら歩みをすすめてゆくあの動きをみると、神さまって不思議な生き物を作るもんだなあつて、つくづくおもったもんです」

ト「このあいだ広角レンズで蟻の写真をとろうとファインダーのぞいてたら尺取り虫がやってきた。蟻のとりの尺取り虫はものすごく巨大にみえた」

毛「たしかに体長三ミリくらいの蟻から見れば、四センチくらいの尺取り虫でも十三倍も巨きいわけですからね。一匹の尺取り虫がそばを通りすぎるだけでも、蟻さんにとつては一大事だつて、もしわたくしのそばを、体長二十三メートルの巨大な尺取り虫が、暮れなずむ空を背にして、体液たっぷりの透きとおるような胴体をおおきくふたつ折りにのぼしたり縮めたりして通り過ぎていったら肝つぶしますよね。で、やっと通りすぎてホッとしたとおもったら、こんどは身長が千メートル以上もあるトムさんみたいなひとが、巨大タンカーを伏せたような靴履いてずっしんずっしんやつて来る。おそらく生きた心地しないでしょう。」

蟻さんたちは、来る日も来る日も朝から晩まで、そんな暮らしを強いられていたんですね」
師「蟻になったことねえからぜんぜん気がつかなかったな」

毛「それにいたしてもこの句、すばらしい。」

『しゃくとりがなにを測るかこの夕べ』神さまが造ったこの奇妙な虫。おだやかな夕べのほとり、一体なにを測っているんでしょうね」

38 いもを煮るなべの中まで月夜哉

毛「芭蕉から始まり、いわゆる近世俳人たちの俳句のパロディ句をいろいろ採りあげて、ああだこうだとしゃべくりあつてきたわけですが、近世俳人シリーズは、今回でおしまいということに相成ります。」

この句、森川許六の代表作ですね。おだやかで平和な夜のいも煮鍋。家族ひとりひとりの染しげな顔が眼に浮かぶようです。最初の作品。

井戸深く消えゆく雪のゆくへかな

父の実家の庭に、もの凄く大きな釣瓶井戸がありましてね。夕暮れどきだったし、かなり深かったから井戸の底はぜんぜんみえない。そのみえない底にむかって、凄まじい雪が音もなく吸い込まれている。ふり落ちてゆくのではなくて、地の底へ猛烈に吸い込まれているという感じ。じぶんまでが吸い込まれそうな気がしてきて、あわててその場、離れましたね」

ト「柿になった夢おもいだしてしまった」
毛「あ、ごめんなさい。じゃあつぎの句にいきましょう。」

身を振り喚く空き家に蔦からみたり

こどもの頃、近所にこんな空き家が一軒ありました。崩れかかった木の塀のり越えて、降りた庭から眼をあげると、おおきな窓がひとつ、いつもこちらにむかって両開きにひらいておりましてね。爪さき立ちの格好でその窓の辺に両手をかけて攀じ登り、塀越しにちよつとあたりを窺ってから、室内に飛び降りるんです。うす暗い板張りの室内は、いつも、湿ったような埃臭いような匂いがしんと漂っていて、その匂いが鼻腔にひろがると、いつも体の芯のあたりにひんやりと鈍い光のようなものがよぎるんですね。

あの一瞬の感覚、いまでもはつきり実感できるんです。なにかを盗みに這入り込んだわけでもなんでもなくて、家の中をぐるりひと巡りしたらすぐ帰るだけなんです。なぜか入った瞬間、ちよつと甘美な犯罪者めいたところがちになるんです。見知らぬひとの体内に無断で忍び込んだようなね。ぞくつとするような快感。誰しも、一度や二度は、これと似た経験あるんじゃないでしょうか。うす暗い世界からの誘惑、うす暗い世界への一瞬の舌なめずり。いまでもわたくし、空き家みると、入りたくなくなります。もちろんもう立派な大人ですから入りませんけどね」

師「りっぱなおとなのくせに、無断でひとの空き家に住みつづけてるやつもいるがな」

ト「きのう、ともだちにてつだってもらって、家のなかの壁、ぜんぶぶちぬいた」

毛「なんでまた？」

ト「一階二階をそれぞれおおきなワンルームにすれば、どんなにおおぜいのともだちがきてもパーティーができる。おもったとおり、みちがえるようにきれいにひろくなったから、もううれしくてうれしくてたまらない」

毛「つぎの句です。」

糸を引く白身まばゆき夏あさげ

熱つつあつのご飯のうえで生卵を。パカツとやると、中身が糸を引いて落ちる。あとは醤油たらして、掻きまわすだけ。料理ともいえない、なんともシンプルな食べかたなんです。卵のおいしさをこれほど豊かに味わる料理は、ほかにないとおもいます」

師「卵だけじゃなくて、飯のうまさも醤油のうまさも、こいつほどはつきりわかる食いもん、た

しかにほかにはねえな。卵だけ呑んでも、飯だけ食っても、醤油だけ舐めてもこうはいかねえんだが、この三つをあわせると、とたんにうまくなる」

毛「それでいておっしゃるとおり、卵、ご飯、お醤油の味や香りが、それぞれしっかりと自己主張しているんですからね。不思議な食べ物です」

ト「日本にきて、はじめて下宿の朝食で生卵だされたときはびっくりした。どうやって食べるのだろうかとかんがえていると、となりにすわっていたおなじ下宿人の学生が、卵かけご飯にしようまそうに食べはじめた。みていてもちわるくなつたのであるが、あんまりうまそうに食べているので、おそろおそろまねしてやってみてびっくりした。こんなにもおいしい食べかたがあつたのかとおもつた」

毛「わたくし、卵料理を食べるときには、いつもどうしても、おいしく味わうことは二の次の問題になつてしまうんです。

たとえば、レストランなんかで出てきたオムライス。まず上にかぶさっている卵をとりあえずぜんぶ食べちゃうんです。そしてそのあと、下に残つたケチャップライスを食べる」

ト「卵とケチャップライス、いっしょに食べなければ、オムライスとはいえない」

毛「そんなこと、百も承知しているんです。でも量が多いときなんか、そういう食べかたをしていかないと、最後に卵をのせたまんま残すことになるかもしれない。だから、まずは上のつかつている卵をぜんぶ食べきる。もちろん、そんな食べかた、おいしくはありません。

月見蕎麦なんかもそう。上のつかつた生卵をつぶして、それをお蕎麦にからませながら食べるのが一番おいしいことくらい、百も承知しているんですが、でも、潰して汁と混ぜてしまつと、もしも最後の頃にお腹いっぱいになつてしまつて、その、卵がうんと混ざっている汁、ぜんぶ呑み干せないかもしれないじゃあないですか。だからいつも、月見蕎麦がくると、最初に、井の真ん中におちよぼ口を突き出して、つるりと生卵だけぜんぶ吸って呑み込んでやうんです」

ト「それも、月見蕎麦とはいえない」

毛「ところが卵かけご飯だけは例外なんです。卵かけご飯はじぶんで分量を決められるから食べ残す心配がいらないんですね。だから、卵から食べようかとかご飯から食べようかとか悩む必要がないんです。悩まなくても栄養は無駄なく完璧に摂取できるんです」

ト「でも、食べおわつたあと、茶碗のうちがわに、卵がべつたりのこるではないか」

毛「そこなんです。トムさん、とても鋭いところを突いてきますね。あのですね、そのときのために、たくあんをひと切れかならず用意しておくのです。そして、そのたくあんをヘラにして、お茶碗の内側にべつたり残っている卵をきれいに拭い取つてしまふ。そのたくわんは、もちろん食べる。これで卵の摂取作業は完璧なものとなるのです」

師「おめえさん、卵の話になると、ほんとに熱くなるな」

毛「すみません。また、長話になっちゃいました。最後の句です。

いとをかし清少納言ちとせ越へ

これも、原句の面影どこにもありません。近世俳人シリーズの最終作品なのに、もしかし

たらいままでのパロディ句の中で最悪の作品かもしれません。ま、それはそれといたしまして、『枕草子』の清少納言、ほんとうにいまでも言葉が生きている。この句は、そんな活きのいいぴちぴちの女の子が今もしどこかで生きていれば、もうちとせ千歳を越えた超々婆さんになっているんだなあ、と詠んでいる」

ト「かなりかわいてしぼんでいることであろう。動くサラミソーセージ」

師「それにくらべりや、おれなんざ、まだまだ若僧もいとこだわな」

毛「わたくし、五〇歳を過ぎた頃からは絵画をみたりするときなど、いつもこの句のような視点でみてしまう癖がついちゃってましてね。絵画の中の透きとおるような美少女なんかみていると五〇過ぎのおやじのじぶんがつくづくしよぼくれてみえてくることがあるんですが、そんなとき、制作年代をみるんです。

『一六六五年』なんて数字がみえると、もう嬉しくなっちゃいますね。『やっぱりな、やっぱりそうだな。これ、おれの生まれる遙か昔に描かれた絵なんだよな。この美少女は、このとき、おそらく十五歳くらいだろうから、一六五〇年生まれ。一九五〇年生まれのおれより、三〇〇歳年上ということになる。やっぱりな、やっぱりおもったとおりだ。うん、おれのほうが若い。三〇〇歳も若い』

ト「美術館にいつて、そんなばかなこといつもかんがえてるのか？」

毛「若いマイクさんには、このわたくしの気持ち、まだわからないでしょうね」

師「おれにもわからねえ」

毛「半分死んでいる師匠にも、わかるわけありません。わかるのは、わたくしだけです。

見渡せば、その絵だけではない。あつちにもこつちにも、わたくしより三〇〇歳くらい年上の透きとおるような美少女たちが、額縁の中で光り輝いているんです。なんとという美しさを。そして、なんとというわたくしの若さ。一作一作を念入りに鑑賞し、制作年代をしっかりと確かめてから外に出れば、なんとという青空。

輝く樹々のいとをかし。かすめる風のいとをかし。舞い飛ぶ鳥のいとをかし」

ト「あなたが一番いとをかし」

39 いくたびも雪の深さを尋ねけり

毛「近代俳人シリーズ第一弾は、正岡子規の『いくたびも雪の深さを尋ねけり』

凄まじい病床生活の中でよれよれになりながらも、近代俳句の先駆者として威勢のいい痰まじりの啖呵を切りつづけた人物ですが、つねにその心情だけは、すーっと透明に一本通っているようにおもいます。では最初の一句。

白足袋のけさの白さや初詣で

『けさの白さや』が光っておりますね。下ろし立ての無垢の白足袋が、新年の朝の空気にふれていきいきと呼吸を始める。あるいは、箆笥の奥に大事に仕舞われていた母の代からの白足袋が、純白に蘇える。日本ならではの、じつに静かなめでたさが境内に漂っていますね」

師「正月の神社の境内つてえのは、たしかにめでたさもただよっているがよ、おれあ、あのスコ

ーンと抜けたみてえな感じが、なんとも好きでな」

毛「たしかに、お正月って、神社はもちろんのこと、街の中も、なんとなくスコーンとおおきく抜けた感じがありますね。去年一年間の垢とあぶら汗を絞り切って、きれいさっぱりと乾燥している。空気が希薄になっていて、建物の輪郭なんかじつに鮮やかでひりひりしている。そういう清潔な空白感と仄かなめでたさが、ほどよくブレンドされているのが、日本のお正月。

会うたびに相手の名前を尋ねけり

わたくし、こどもたちの小学校の会長をやっていたときなんか、えらい眼にありましたからね。教師父兄はじめ大勢のみなさんはわたくしひとりの顔と名前を憶えるだけで済みますが、こちらはそうはいかない。

女性本部役員のかたとふたりで学校の前を歩いているとき、入学式とか卒業式なんかでなんとなく見覚えのある老人がにこにこ会釈しながらすれちがったので『ねえ高橋さん、いまのかた、なんてお名前でしたっけ？』って聞いたたら『わたし、高橋じゃないですよ。斉藤です』って、睨まれたこともありました。それでもなんとかかんとか六年間やり通しましたから、名前なんか憶えなくても、にんげんそこそこやっていけるんですね」

ト「まよいこんできた子猫、もう名前つけたのか？」
毛「つけておりません。餌あたえておいてやれば、名前なんぞあたえなくとも、ちゃんと生きていけるんですから。」

浅漬けに雪の深さをおもいけり

妻の実家で出される義母の白菜の浅漬け。雪の底に貯蔵しておいた白菜を、天然粗塩と赤唐辛子だけで浅漬けにするんですが、もともと冷めたくなっているやつを寒い土間のガラス鉢の中で漬けるから、噛みしめると、ときどき薄い氷がしゃりしゃり解けて、それがとてもすてきなんです。深い雪の底から食卓にやって来た白菜を食べていると、ほんとにもう口の中のみずみずみまで清らかになる。そしてこの句のように、噛みしめるたびに、つい雪の深さにおもいを馳せてしまうんです」

ト「このあいだ、一晩中の吹雪が去った朝、まっ青にはれわたった雪原をみてるうちに、ビーフシチューをつくって雪の底にうめたらどうなるんだろう？というアイデアがうかんだ。さっそくグツグツ何時間もかけてつくり、それをながいヒモつけたビニール袋につめて、深夜、雪原にうめたのであった」

毛「雪国でしかない料理ですね」

師「高野豆腐とか寒天なんかも、寒いところでしかできねえらしいな」

ト「そう。東京なんかではおおもいもつかない、さむい雪ぶかい土地ならではの画期的独創的料理」

毛「で、お味のほうはいかがでした？」

ト「つぎの朝、ビニール袋入りのこおったビーフシチューをお湯でもどして食べてみたのであるが、どうってことのないフツのビーフシチューであった」

毛「つまり、画期的独創的料理をおもいついてさんざん苦勞して完成させたわけだけでも、よくよくかんがえてみたら、そこらで売っている冷凍レトルト食品とおんなじものを作っただけの話」

ト『雪原にうめた』ってことばでいえばひとことであるが、それだけで五時間かかっている。深さ四メートル以上の雪の穴をほるには、スコップをうごかしたりするスペースをかんがえると、すくなくとも直径一・五メートルくらいの穴をほらなければならぬ。さむいのに、汗びしょびしょであった」

毛「志は高かったんですね。わたくしも、昔、初めての懐妊告知を受けた妻に、特性の冷製野菜スープを手間暇かけて作ったことがあるんです。ベースとなる生の完熟トマトをはじめ、セロリ、パセリ、人参、外国産の岩塩、粒コショウ、香草、香辛料を買い集め、それでまず熱い野菜スープを作り、しっかりと裏漉しする。それを室温でゆっくり冷ましながら味をなじませたあと、最後に冷蔵庫で冷やして完成。色も味も香りも、まったく問題なしでした。キンキンに冷やしたワイングラスに注いで妻に出したんですけど、妻はたったひと言、『このトマトジュース、どこのメーカーのやつ?』でした」

師「トムもあんたも馬鹿としかいえねえな」
毛「最後の句です。」

いくたびも雪の深さを訪ねけり

これ、たしかにパロディ句なんですけど、じつはわたくしつい最近まで子規の句を、この句のように誦んじていたんです。つまり『誤読』していたんです。

『いままでもいくたびとなく訪れたこのなぜかころに沁みる雪深い里。気がついたら、きょうもまたいつのまにかここに来て、ひとり、雪の深さにおもいを寄せているのだなあ』
そういう感慨を吐いている句だとおもっていたんです。

ところが、今回この鑑賞会のためにあらためて読んだら、『訪ねけり』ではなくて『尋ねけり』なんです。わたくし、子規の名やいくつかの句くらいは知っていたものの、この句を詠んだときの生活背景などほとんど頭になかったから、まさか蒲団にくるまったまま、庭の雪の深さを妹に『尋ねて』いるのだとは、夢にもおもっていませんでした。

今回あらためて読んだときだって、『尋ねけり』とたしかに印刷されているにもかかわらず、わたくし、それを『訪ねけり』のつもりで読み味わっていたんですが、ちよいとその横の『評釈』を読んでびっくり。『えーっ?そういうことだったのー?』ってな感じ。何十年間も、根底から誤読していたんですね。知らず知らずに、わたくしの中でパロディ化していたことになりました」

ト「芭蕉の『五月雨を集めて早し最上川』ぼくはあれ、ゆうぐれ、川岸ちかくの高台に立って詠んだ句だとおもっていた。するどくつきさすように降っている雨のしたを、ものすこくうねりながらながれている最上川。ちいさな雨粒でも、あつまればこんなにもものすごい流れとなる。そういう句だとおもってた。でもじつさいは、あかるい昼間、芭蕉じしんが舟にのったときの句らしい」

毛「トムさんのその解釈、すばらしいとおもいますよ。縦に降りしきる雨と、もの凄いうねりを立ててずっしりと横に流れている大河。

たとえばあの蕪村の名句『五月雨や大河を前に家二軒』あれなんかぜったいその句から影響受けているとおもうんですが、おそらく蕪村も、トムさんとおなじ解釈の仕方ではないかな。たんにじゃあないでしょうか。

そう解釈したからこそ蕪村のこころを動かしたんだとおもいます。蕪村のその誤読がなかったら、『五月雨や大河を前に家二軒』という名句は生まれなかったんじゃないでしょうか」

40 糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

毛「きょうの原句も子規です。

秋の夜は彫り深まりし仏かな

原句とちがつて、この仏は、お仏像。秋の夜の冷気にふれて、お仏像のお顔やお姿の彫りが一段と深くなったようにおもえたんでしょう。静かな作品ですね」

師「ときどき仏像みたくなるな」

毛「お仏像をじっとみつめているだけで、全身が吸い込まれてゆくというか包み込まれてゆくというか、とにかく身もこころも赤児のようになってゆきますよね。柔らかに抱かれ、ひたすら守っていただいているというような安らかな心地になる。

神様は、その点、恐ろしい。拜んでも、いつ神殿の奥から獣のような声が吹いてくるかもしれないという微かな畏れがよぎる。こどもの頃わたくし、自宅の鴨居に造りつけた神棚に向かつて、夕食前、かならず三〇分くらい両手を合わせてぎゅっと眼をつぶって拜むのが習慣でした。とにかく『もうしません。ゆるしてください』みたいなことをずっとつぶやいていたみたいです。ぼくを守ってください、ではなくて、ぼくを懲らしめないでください、だったみたいです」

師「そういえば、神の崇りってえのはきくが、仏の崇りなんてえことば、きいたことねえもんかなあ」

ト「きのうひさしぶりに鏡でじぶんの顔をじっくりながめてたのだが、秋になったせいか彫りがふかくなってた」

毛「本人がおっしゃるんですから、そうなんでしょうね」

ト「夏より利口そうな顔になってた」

毛「本人がおっしゃるんですから、そうなんでしょうね」

ト「こんどの冬は凍りつくようなさむい日がつづくそうであるから、たぶんこのまま固定するはずである」

師「そのあと、春がきて、夏がきたらどうなるかな」

毛「**落葉焚いて天を仰げば喉仏**

落葉焚きで火照った顔をあげると一面に天が漲りわたっており、気がつけば、じぶんの喉仏

がぬつくと剥きだしになって冷めたい風に晒されている。このひんやり感、いいですね」

師「ちかごろあ、街なかあるいても、焚火してるの、みかけなくなつたなあ」

毛「条例かなんかで禁止されているんでしょうかね。煙たいことは煙たいんですけど、あれ、いいもんですよね。」

晩秋の、陽が傾きかける頃、人気のない住宅街の曲がりくねった狭い道を歩いていると、古い板塀の向こうでパチパチいう音がして、煙があがっている。その煙が道のほうへ下りてきていて靄のように立ち籠めているところに、どこからか射し込む陽光が斜めの筋をつくっているんですね。犬を連れた老人が通ったりすると、漂っている煙は一瞬、老人の服や犬の毛にまとわりつくんですけど、かれらが通りすぎてしまえば、煙はその場でしばらくゆらゆらたゆたつたあと、また、あたりの煙に静かに馴染んでゆく。そしていつのまにか陽光がまた斜めの筋をつくっている。

襖あけて亡母は来たりし秋午前

師「この年なんつてもよ、ときどき、こういうことがあるんだな。おふくろは、わけえころ死んじまつてるからよ、襖あけて入つて来るときや、とうぜん、いまのおれよりはるかにわけえわけだ。なのによ、やつぱり、おれにとつちやおふくろにちげえねえんだな。おふくろ以外のなものでもねえ」

毛「わたくしの家の襖もときどき開きますね。父は、長い闘病生活のあとに、いいかえれば母や姉たちの手厚い看病生活のあとに亡くなったものですから、父もそれなりに納得できたであろうし、残された者もみなそれなりに納得できたのではないかとおもうんです。そのためでしょうかねえ、父はずつとおとなしく真面目にお墓の中で眠っている。突然襖を開けて入つて来るなんてこと、まずない。」

ところが、母は、いま父とおんなじお墓で眠っているはずなのに、ときどき、にっこにっこ襖開けて入つて来るような気がするんですね。わたくしたちの眼の届かない所で、ある日突然、ひとりつきりで亡くなったからなのかもしれません。独り住まいの大きな屋敷の風呂場で、足を滑らせての急死だったものですから、わたくし、いまだに母が亡くなったことがびんときていないのかもしれない。いまだに、母の死が納得できないんですよ。納得できないんですが、でもどこ見渡しても、母の姿がみあたらないことだけはたしかなんです。わたくしにはもう手も足も出すことができない。謝りたいこと、報告したいこと、山ほどあるのに、それができないことだけはたしかなんです。

そんなときなのかもしれないね、襖が開いて、母が入つて来るような気がするのよ」

師「入つて来て、すつと消える」

毛「ええ、入つて来て、すつと消える。で、明かるい秋の午前の部屋には、にこやかな気配だけが残るんですよね」

ト「あんたの家の名なしの子猫、母親はどんな猫なのか？」

毛「ご近所のどなたにお聞きしても、どんな猫なのか、どこにいるのか、知っているかたはおり

「ませんし、第一この世にまだいるのかどうかもわかりません」

ト「子猫、そとで母親とでくわしたら、わかるのであろうか？」

毛「どうなんでしょうねえ。わたくし猫になったことありませんからねえ。」

でも実際の話、猫なんでものは、それこそ猫も杓子もみんなおんなじような顔しているし、おんなじような体つきしているし、おんなじような歩きかたしているから、もし見分けることができるのであれば、いったいどこで見分けるんでしょうね」

師「あんがい、にこやかな気配がただよってよ、それでわかるのかもしんねえな」

41 柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

毛「『柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺』きょうの原句は、子規の、あまりにも有名な句です。」

『柿』『鐘』『法隆寺』この三つの言葉がいつ読んでもおさまるべきところに正確な重量で正確におさまっていて、ほかの言葉と交換できない。そしてぶっきら棒な句なんですけど、読むたびに、眼にみえないありがたい時間がやって来る。なぜなんだろう？とおもってもよくわからない。仏頂面した十三文字が、縦に一筋並んでいるだけ。誰にでも作れそうで、作れない句です。」

柿くへば種がにゆるにゆり法隆寺

「ありがたい時間、やって来そうにないですね」

師「あの柿の種のまわりのにゆるにゆる。舌のさきで上あごにグツとやって、種からつるりツと取れると、『やったあ』っておもうんだな。それでよ、かたい種をおちよぽ口でふきとばしてから、そのにゆるにゆるをゆつくりのみこむとよ、のどの奥がいがらつぽくなるくれえ甘くってなあ。実の部分よりもうめえ」

毛「たまに、つるりツと取れなくて、硬い種にしつこくこびりついちゃっているときもあるんですけど、そういうときは無性に腹が立つんですよね」

師「実のほう食うのは、おまけみてえなもんだ」

毛「ほんとにそうですね。にゆるにゆると種の分離作業。ちよつと面倒くさくはあるんですが、あれに夢中になると、実のほうはどうでもよくなっちゃう」

ト「日本にきてはじめて食べたゆでカニ料理。はじめは、殻から身をほじくりだすのがめんどくさかったのであるが、いつのまにかそのめんどくささが楽しくなってきた。やめられなくなつた。ああいう食べかたは、いままでしたことがなかった。一度、旅館のおかみさんが、ぼくがガイジンだったからなのか、親切に、ぼくのまえでおおきな殻からきれいにとりだした身を、皿にならべて出してくれたことがあった。中身だけを皿にならべるとおもってたよりずっとすくないのでびっくりしたし、おいしいことはおいしかったのだがひとくちでなくなつてしまったのでなんとなくきよんととしてしまった。カニは、やっぱりじぶんですしすこしずつほじくりながら食べるのが一番おいしい」

毛「はたからみるとずいぶんやりにくそうにもたもたやっているようにみえるかもしれませんが本人にしてみれば楽しくて大切なひとときなんですよね。それを横から手を出されてよけい

なことされると、ちいさな親切よけいなお世話、ということになる。

錠かえば妻とふたりの秋の夜

わたくしたち夫婦も、いずれこういう秋の夜を迎えるんでしょうねえ」

師「かかあがもどってきたら、おれもこんな秋の夜むかえるわけだ」

毛「そういわれてみればそうですね。わたくしたち夫婦の場合は、こどもたちがみな去って家中に妻とふたり取り残されるわけですけど、師匠の場合は、侘びしい独り住まいから夫婦水入らずの暮らしに戻るわけですものね。

そうなったとき、師匠夫婦とわたくしたち、どちらが幸せなのか？」

ト「かかあ、いまでもときどきどこかに出役しているのか？」

師「たまに近所のやつらが知らせてくれるから、すつとんでいくんだがよ、いまだにいきあえねえんだな」

ト「いまでも、すつとんでいくのか？」

師「わすれてるつもりなんだがよ、知らせきくと、すつとんでつちまうんだな。体がかつてにうごいちまう」

毛「失礼ですが、奥さま、いまおいくつになられるんですか？」

師「おれよりは下だけだよ、百はこえてるはず」

毛「おふたり合わせて二百数歳。すごい生活が始まるわけですね」

師「新婚気分になつちまうかもな」

毛「想像するだけでもじつに美しい光景ですねえ」

ト「じつに美しい光景かもしれない」

毛「チャーミングじゃあないですかあ。ぱつさばさのおふたりが花のように水分取り戻してゆくところ、ちよつとみてみたいですね。

それにいたしましたも師匠や奥さまくらいの年齢のお方を縦に二〇人くらい繋げると二〇〇歳を超えちゃうわけですから、二〇〇〇年前、つまり紀元前なんてそれほど大昔ってわけじゃあないんですね」

ト「あなたの家は、名無しの猫がいるから、ふたりつきりというわけでもないな」

毛「でも猫は猫ですからね。家族の一員にはなれない。妻はもうメロメロなんですけどね」

師「かあちゃん、いまでも猫の俳句つくってんのか？」

毛「ええええ、作ってるんですよ。このあいだも、一句できたといってみせてくれたんですけどねッ、これかけっこうおもしろいんです。

『迷子猫(まいご)ちゃん甘噛みどこおぼえたの?』

ねッ、いいでしょう。『迷子猫』に『まいご』なんてルビ振ったり、『ちゃん』付けしたり、句尾に『?』マークつけたり、素人丸出しのにわか俳人だからかなり強引な荒技使つてはいるんですが、でもねッ、これ、けっこういけるでしょッ？」

ト「『甘噛み』ってなんだ?」

毛「相手が痛みを感じない程度に、加減して軽くハグハグ噛むこと。うちの猫、ほんとにこうな

んですよ。けっして強くは噛まない。母猫にこのような優しく慈しむような噛みかたをさ
れていたのか、それとも、あちこちの家で手から餌をもらっているうちにいつのまにかこん
な習性を悲しく身につけたのか、よくわかりませんが、ほんとうに、いっどこで覚えたんだ
ろうと感動いたします。相手の痛みを推し測ろうとするうちの猫。名もなく優しく美しく、
淡い黒と白のけなげこのうえもないちいさなうちの猫。こんな猫、みたことない。たぶん、
どこにもいないとおもいます。テレビCMに出てくる可愛い子ぶって猫被っているあんなち
やらちやらした子猫ども、たぶん甘噛みなんてデリケートなこと、知らないに決まっている
んです。飼い主の指が血まみれになるくらい、おもいっきり無神経に噛みつけているにちが
いありませんね」

師「あなた、やつぱり、もうおしめえだな」

毛「つぎの句です。」

たたずめば影も佇む冬三時

気ままに降りた街をぶらりひとり散歩していて、ふと出会う場面ですね。冬三時というと、
陽射しは明かるいことは明かるいんですが、その明かるさの中に、すでにどこことなく鈍色の
疲れが現われはじめている時刻。そして、足もほどの良い疲れを覚える時刻、でもあるんで
すね。つまり、お茶の時間となるわけです。

先日、郊外の街のちいさな喫茶店に入りましてね。窓際のちいさなテーブル席に座って、マ
スターらしき、おだやかな笑みを浮かべている小柄な老人にコーヒー頼んだんです。わたく
し以外に客はいない。

ゆっくりと手回しミルで豆を挽いて、ゆっくりとサイフォンで淹れてくれたコーヒーを、ゆ
っくりと持ってきてくれたはいいんですけれど、そのまっ黒な飲物、ゆっくりと淹れてゆっく
りと持ってきてくれたおかげですっかりぬるくなっちゃっているし、香りもなければ味もた
だ苦いだけでしてね。たぶん、客がほとんど来ないから、豆がしけっちゃっていて、そのし
けっちゃった豆をむりやり挽いて出すから、客はますます来なくなっただけでしょうね。でも
マスター、客が居ようと居なからうとどこ吹く風といった感じ。といって、なぜやりに感じ
は微塵もなく、やることなすことすべてゆっくり丁寧なんです。

おかしなもので、そうなると、そのコーヒーのまじさが気にならなくなる。気にならなくな
るところか、そのまじさがひとつの個性におもえてきまして、むしろありがたみさえ覚えて
くるんですよ。コーヒーなんてものは、香りも味も良ければもちろんそれに越したことはな
いんですけど、たいていは気分を飲むものであり、あるいは気分を飲むものなんでしょうか
ら、その意味では、あれ、最高のコーヒーでしたね。

旬食えば金がなくなり風流人

師「こないだちよっとした金がへえったもんでよ、五〇ねんぶりに松たけ食った。ちいせえやつ
一本を四つに裂いて出してくれたんだがな、酒一本と松たけだけで、有金ぜんぶふつとんじ
まった」

毛「さすが風流人。ほんのちよつとの旬のものに有金ぜんぶ遣い果たしちゃった」

ト「風流だかなんだかしらないけれど、あんなうすっぺらいカンナくずみたいなものの、どこがおいしいのか？」

毛「たしかに、松たけってどんな味？って聞かれても、なんとも答えようがないですね。ほとんど醤油と柚子の味だけで、本体そのものは無味乾燥の木屑みたいでおいしくもなんともない。松たけ、味は二の次で、やはり匂いを楽しむものなんでしょうね」

ト「その匂いだって、あばら家の陽あたりの悪い廊下みたいな匂いで、鼻の奥がさびしくなってくる」

毛「最後の句です。」

雁がねや夜を従がへて音もなし

じつにおおきな作品ですね。『夜を従がへて音もなし』ふたつのS音の『し』が、たがいに響きあって、夕暮れの深い奥行きが、一読、ひろがります」

ト「ぼくも一度、旅先で、ものすごいやつをみたことがある。」

枯野の地平にひろがってる真つ赤な鉄の溶岩みたいな夕焼けをみてたとき、ぼくの背後から、すえひろがりの雁の大編隊があらわれたのである。すくなくとも一〇〇羽はいたであろうか。編隊全体が一对の翼みたいになって、それが、夕焼けの地平線にむかって音もなく滑ってゆく。みんな長い首を前方にまっすぐのばしているのであるが、一羽も鳴いてない。羽音も聴こえない。ゆつくりと高くなり低くなりしながらだんだん遠去かってゆく大編隊をみていると、まるで、夜をおおきな網で曳いてゆくようにもおもえたのであった。

ほんとうに、息を呑むような光景であった。

そして、気がつくくと大編隊も夕焼けもこの世から消えていて、立ちつくしているぼくのまわりには、雁たちが曳きつれてきた夜がいつのまにかいちめんに降りているのであった」

師「そんなものすげえ雁の大編隊、夢でもみたんじゃあねえのか？」

ト「いまおもうと、ほんとうのことだったのか夢のなかの出来事だったのか、よくわからない」

毛「それにいたしましてもこの句、原句をどうひねればこんな句に辿り着くんでしょうねえ」

42 春風や鬨志いだきて丘に立つ

毛「きょうの原句は高浜虚子。『春風や鬨志いだきて丘に立つ』わたくしは『しゅんぷう』と読んでおりましたが、どうやら『はるかぜ』と読むらしい。ま、どちらにせよ、この句のどこがいいのか、わたくしにはわかりません」

師「春風や若かりしかかあ夢に立つ』」

ト「春風やママの電話に腹が立つ』」

毛「どれもこれもドングリの背くらべ。最初のパロディ句です。」

春風や障子へこみてふくらみて

和室でしか味わえない季節感ですね。『へこみてふくらみて』の『て』の音の繰り返しが効いています。閉め切った障子の紙が、家のどこからか入ってくる春風のせいでハタハタ音立

ててへこんだりふくらんだりしている様子を、うまく表現していますね。冬のあいだの障子はパンパンに乾いているのでこうはならないんですけど、春になってやんわりゆるんでくると、ときたまこんなことになるんですね」

師「おれの部屋なんざすきまっ風だらけだからよ、春風、じかに堪能できる。ただ、うつかりしてっと風邪ひくんだな。春の風邪ってやつはだらだらながびくんだわ」

ト「ちいさいころ、風邪ひくと、かならずママがアイスクリームかかってきてくれた。それも、肩がひえるといけなからといって、かけぶとんをあごのしたまでギュッとずりあげてくれて、ママがスプーンで食べさせてくれた」

師「あんなうれしいことはなかったな。ちよつとしたお坊っちやま気分」

毛「アイスクリームだとか、バナナだとか、本物の葛粉で作った葛湯だとか、ふだんめつたに口にできないものが、頼まなくつたつて向こうからやって来る。なんとなく夢見心地になって、ふと横を向くと、この句のように、明かるい障子紙がときどきハタハタと音を立てておりましたっけ。

ビル風に帽子抱きて涙ぐむ

これ、よくわかります。じつによくわかります」

ト「ぼく、これ、なにいつてるのか、ぜんぜんわからない」

毛「あたりまえです。トムさんなんかにわかるわけないじゃありませんか。でも、わたくしにはわかる。この作者の深い嘆きと悲しみと怒りが、手に取るようにわかるんです」

ト「手にとれないからわからない」

毛「じゃあ、わからせてさしあげます。この作者、髪薄いんです」

ト「ますますわからない」

毛「まあね、トムさんのような髪を知らぬ者にこの作者の苦悩をわかれというのが土台

無理なんでしょうけどね」

師「おれにもわかんねえ」

毛「あたりまえです。師匠なんかにわかるわけないじゃありませんか。師匠みたいな、完全なハゲといつてもいいおひとには、やっぱりわからないんだとおもうんです。

いいですか。

この作者は、完全なハゲではなくて『髪が薄い』んですよ。つまり、『中途半端』なんです。

このきわめてデリケートな事態に陥っている作者の心情、もっとおもんばかってあげなくてはいけないとおもうんです」

師「やっぱ、わかんねえ」

毛「師匠、櫛、持ち歩いておられますか？」

師「いんにゃ」

毛「でしょうね。必要ないんですからね。でもね、この作者、つねに持ち歩いているんです。ぜったいの必需品だからです。髪の毛の薄いにんげんにとつて、櫛というものは髪形を整えるためだけの道具ではなく、整えながら地肌を隠すというもうひとつのじつに重要な役目を持って

いる道具だからなんです。

師匠、帽子、持ち歩いておられますか？」

師「いんにゃ」

毛「でしょうね。そこまで完璧になんにもなくなってしまった頭、いまさら隠したってしようがないし、髪形守る必要そもそものなし、ですからね。でもね、この作者はつねに持ち歩いてるんです。こういう髪の薄い作者には、ぜったい手離すことのできないこれも必需品なんですよ。櫛、そして帽子。このふたつは作者にとってぜったいに手離すことのできない大事な道具なんです。

さて、うららかな春風そよぐある日、この作者、おそらく恋人か女友達と会う約束でもあったんでしよう。家を出る前、おそらく鏡みながら入念に愛用の櫛で髪を整えたにちがいないんです。ゆっくり整えながら、そして、さら地になりかけている地肌がなるべくみえなくなるようにゆっくり貼りつけながら、ひたすら梳かしつづけたにちがいないんです。

そして愛用の帽子。もちろん被るときは、せっかく整え貼りつけた髪形を崩さないように、注意深く、そつとそつと被ったことでしょう。待ちあわせの喫茶店のトイレに鏡あるとはかぎりませんから、彼女の前の席についてそつとそつと帽子を取ったときの状態を充分考慮に入れながら、そつとそつと赤子を寝かしつけるようなおもいで被ったんでしようね。ところが悲劇は突然やって来た。

ひさしぶりに会う彼女の顔おもい浮かべながらうき歩いていたところまではよかったんですが、あとすこしで喫茶店という街角を曲がったとたん、さきほど来の春風が、突然猛烈なビル風に変身して吹いて来たから、ひとたまりもない。帽子吹っ飛んじゃった。あわてて追いかけて泥だらけの帽子を拾いあげたはいいけど、そのときこの作者、苦心のすえの髪形がどうなったか、頭に手をあてるまでもなくわかったんでしよう。『汚れつちまった悲しみ』みたいな帽子を胸にギュッと抱いて呆然と佇んでいる作者の鼻の奥にはツーンとしたものがよぎり、眼頭には熱いものが込み上がって来たにちがいません。乱れに乱れた頭には、ふたたびまたび猛烈なビル風がこれでもかこれでもかと襲ってくるんですが、一度乱れてしまえば、あと何度乱れようとおんなじことですので、気にもならない。気にもならないどころか、唇には『風よ、風よ、ビル風よ、もっともつと吹きまくれ』なんて詩みたいないリフすらのぼって来るのでした」

ト「けつきよく、彼女には会ったのかな？」

毛「どうだったんでしょかね」

師「それにしてもよ、あんた、この作者のきもち、なんでそんなにわかるんか？」

毛「つぎの句です。

こっそりと冬至来たりて街に立つ」

師「冬至ってのは、いつもこっそり来てこっそり去っていくんで、気がつかねえんだな」

毛「天皇誕生日、クリスマス、大晦日、お正月と、有名な日が目白押しの際に来るからなんですよ。しかも冬至本人が暗いやつですから、ほとんどのひとは気がつかない」

師「冬至ってえ日は、これから世間があかるさをましてゆく最初の日なのにな」

毛「ええ。それかんがえると、クリスマスや大晦日や元日よりも重要な日なのかもしれませんよね。」

春の宵尼ら光りて堂に満つ

春の宵、舗道に面した庭の奥の札拝堂に眼をやると、大きく開かれた窓の向こうに、たくさんの尼僧がゆらゆら居並んでいる。みな、それぞれ一本の燭台を持ち、その光が顔にあたつて、堂内に、神々しいような、艶めかしいような空気が充滿している。通りすがりにふと眼にした光景を、静かにとらえています。

最近、近所のちいさな古家に、遠い地方から三人家族が越して来ましてね。両親と十歳くらいのおとなしそうな男の子がひとり。宵どき煙草買いに行く途中、低い塀越しに、まだカーテン取り付けていないちいさな明かりリビングルームが丸見えだったんです。その男の子が、なんとなく疲れた感じで、まだ家具のないリビングルームの壁にひとり背をもたれて足投げ出して座っていたんです。それみたたん、なぜかしら鼻の奥にツーンとしたものがよぎり、眼頭に熱いものが込み上がってきましたね」

師「きようは、やたらよぎつたり、こみあがってきたりするな」

毛「もうなんとも愛おしくなってきたやいましてね。前の学校の友だちや近所の幼な馴染みと別れることになっちゃってかわいそうだなあ、とか、そういうんじやあないんですよ。そういうんじやあなくて、親犬のあとに従う子犬のように、この男の子は、親のあとについて遠いところからこの家にはるばるやって来たんだなあ、そして、これからはずっとこの未知の土地の未知の家で暮らしてゆくことになるんだなあっておもったら、ギョツて抱きしめたくなっちゃったんですね」

師「どこの家族だつて、引越したときや、みんなそうだろうが」

毛「それはわかっているんですよ。わたくしだつて、かれの親たちとおんなじことやってきたわけですからね。ただ、なんというか、生きものというものは、その親のもとに生まれた以上、あとはひたすらはぐれないように親のあとについてゆくしかないんだなあとおもったら、抱きしめたくなっちゃったんです。最後の句です。

春風やどこかで誰か転んでる

理屈抜きで納得できちゃう句ですね。道歩いていて、沈丁花なんかの匂いを含んだ明かい春風が吹いて来たりすると、たしかにこんな気がいたします。たしかに、どこかで誰か転んでる」

ト「なぜ転んでるのか？」

毛「春だからです。そして、転んではいるんですけど、不思議と怪我をしない」

ト「なぜ怪我しないのか？」

毛「春だからです」

ト「きようは、わからない句がおおい」

師「ちかごろ春めいてきたせいかな、うらの路地にさかりのついた野良猫どもがギャアギャアうる

さくってな、石なげつけたくなる」

毛「うちの猫はそんなことはございせんね。毎日のように庭に来る汚ならしい猫などには眼もくれず、家の中をしなやかにゆらゆら歩いているか、あとは静かに眠っているだけです。それにいたしましても、猫というものはよく眠るもんですね。ほとんど一日中眠っている。眠るために生まれてきたのかとおもうくらい。もちろん平日であろうと休日であろうと関係なし。あしたは月曜日で朝礼あるから今夜は早めに寝よう、なんてことがない。

ま、かんがえてみたら、猫にかぎらず、すべての動物や植物、山や川や海や空、つまりにんげん以外のものにとつては、曜日なんてもの、関係ないんですからね。曜日に左右されるのは、にんげんだけ」

師「おれあぜんぜん左右されねえがな」

毛「やっぱりにんげんじゃあないのかもしれないね」

43 去年今年貫く棒の如きもの

毛「どうもやはりわたくし、虚子は苦手ですね。コメントのしようがない。

去年今年ひとりぼっちの落とし物」

師「年越しんとき、除夜の鐘ききながらひとこみんなかあるいてつと、かならずひとつやふたつ落とし物がころがってんだな」

毛「落とし物、道端にポツンとひとり取り残されてさみしく年を越している」

師「落とし物、おれなんぞこの歳なるまでかぞえきれねえほどしてきているのかもしれない」

毛「物だけではなくいろいろな大切なものをいくつも落としてきているのかもしれないのに、それに気がつかず、それどころか、そんなものを昔じぶんが持っていたことすらすっかり忘れていられるのかもしれない」

師「落とし物つちや、こないだの夕方、けえつたらおれんちの玄関前の路地にハンカチが一枚落ちてたんだな。なんとなく気になってよ、ひらつてよくみたら、いくつもの薔薇の刺繍がへえつてる絹の高級品でな、みおぼえがある。そとんでるときにハンカチなんぞもってかねえからおれが落としたもんじゃあねえことはたしかだしよ、近所のみんなにもきいてみたが、だれもこころあたりはねえつてことだった」

毛「もしかして、奥さまがいらしたんじゃあないですか？」

師「それっきゃかんげえられねえんだな」

毛「うっかり落としてしまったのか、あるいは、わざと落としていったのか、どちらにしても、いらつしやつたことだけはたしかなんじゃあないですか？」

師「どうみても、無けなしの金でかかあに買ってやった誕生プレゼントにちげえねえんだわ。かなり無理したからよくおぼえてる」

毛「で？」

師「でって、それでおしまい」

毛「そのあと、連絡はなし？」

師「なし」

毛「そのハンカチは？」

師「部屋のダンスのおくにしまつてある」

毛「いつかそつと取り出して、おふたりでひろげて眺める日が来るといいですね。」

春の夜をすぎゆく能の如きもの

「春の夜など、おおきな風が吹くと、あたりの月明かりの中をさらに薄い光の膜のようなものがひかひかとよぎつてゆくことがあります。この作者、そのひかひかを、能の如きもの、と表現しています。能を舞うひとや鼓を打つひとがみえたわけではなく、能の実体みたいなものそのものが、ひかひかとよぎつてゆくようにみえたんでしょう」

ト「一度、能をみにいったことがあるが、うつらうつらしながらみてたので、夢のあいまに能があらわれたのか能のあいまに夢があらわれたのか、いまだにはつきりしない」

毛「ある意味、正しい観かたなのかもしれませんね」

ト「能面つて、だれかににてるようで、だれにもにでない」

毛「表情を変えない顔のことを、よく能面のような顔つていいですけど、そういうえば、師匠の笑つたお顔、みたことありませんね。けろつとした憎めないお顔ですけど、笑つたところ、みたことありませんです。トムさんのお顔も、おっとりぼんやりした憎めないお顔ですけど、やっぱり、笑つたところ、一度もみたことありません」

師「あんだだつて、しんねりむつりまじめくさつてときどき眼えつりあげるばかりですよ、笑つたこと一度もねえじゃあねえか」

毛「ああ、そうなんですか。じぶんでは気がつきませんでしたけど、師匠がそうおっしゃるんならそうなのかもしれませんね。じゃあ表情変えずに、つぎの句にいきましょうか。」

こそごとし毎年かくの如しかな

師「まっただな。大晦日から新年にかわつたとたんつてえのは、ゆでたての衣かつぎの皮がつるんつてむけたみてえな気分になって、なんともこんころもちいいんだがよ、よくかんげえてみたら、一年めえの年越しんときの気分もやっぱおんなじような気分だったんだわな」

毛「そうなんですよ。われわれ、毎年毎年おんなじことの繰り返しをやっているにすぎないんですね」

師「気がついたら百歳こえてた」

毛「ほんと、月日の経つのが早いこと早いこと。年取れば取るほど、じつに早くなりますね。」

「一〇歳の少年にとっての一年間はその少年の全人生の一〇分の一、七〇歳の老人にとっての一年間はその老人の全人生の七〇分の一ということになりますからね。単純計算すれば、老人の中の時間の流れは、少年の中のそれよりも七倍早いということになる。一〇歳の少年の眼からみると、七〇歳の爺さん婆さんは七倍速の日々を送っているわけです」

師「よろよろもたもたのんびりするようにみえるがな」

毛「じつはもの凄いスピードで時間に追われている。一日が三時間半くらいで過ぎてっちゃう。老人が転んで足骨折したなんて話よく耳にしますけど、朝から晩まで時間に追いまくられて

いたら転ぶのはあたりまえなんです。のんびり泳いでいるようにみえる水鳥でも水面下では必死に足ひれバタバタさせているのとおんなじように、お爺さん、お婆さん、はた目には優雅にみえるけど、じつはおおいに慌てる。『少年老いやすく学なり難し』若い頃軽く聞き流していた格言が、にわかには現実味を帯びて迫って来ている」

師『老人気がつけば後あまり無し』

ト「定年後にとつぜん『自分史』みたいなもの書きたすひとがおおいな」

毛「現役終えたらとつぜん先がみえてきちゃったもんだから、早いとこなんらかの形でじぶんの痕跡をこの世に残しておかなくっちゃって、慌てるんでしょね。あるいは、あまりにもメリハリ乏しく生きて来たじぶんに、なんとかじぶんなりの納得ができるように、輪郭をつけなくなるのかもしれない」

師「おれの知りあいにも、そんなやつがひとりいてな。ところがそいつ、机のうえにつみかさねたぶあつい原稿用紙の一番上の一行目に『一九一〇年、浅草に生まれる』って書いたつきり、あと、なんにも書くことおもいつかねえんだな」

毛「そういうかたも、けっこう多いとおもいます」

師「で、いくらなんでも一行だけじゃ本にならねえってんで、必死に記憶ほじくりかえして書いてたらしいんだが、『十歳で尋常小学校を退学。その後、伯父のツテで鮮魚問屋に入社。その後、六〇年間の長きにわたり務めに精を出す。その後、退職。その後、現在に至る。既婚歴なし。趣味とくになし。特技とくになし。性別・男。血液型A B型。乙女座』って書いたら、もっおわっちゃまったらしい」

ト『自分史』ではなくて『履歴書』

毛『「六〇年間の長きにわたり務めに精を出す』って、さっぱりと書いてありますが、『自分史』を書こうというんなら、そこが肝腎なところだとおもうんですけど」

師「本人も、それ、ずいぶんやんだらしくてな。なんとかエピソードらしきもの必死こいておもいだそうとしたらしいんだが、なにひとつおぼえてねえ。おぼえてねえというより、どうも、もともとそんなもんぜんなかったみてえんだな。で、あきらめた」

毛「でも、とりあえずは、じつにわかりやすい人生をじつにわかりやすい文章でじつに簡潔に書きあげてじぶんなりに納得できたんですから、よかったじゃないですか。

ひっそりと汗ばむ桃のひとりごと

明かるいお皿にぼつんとひとつ載っている桃の姿、眼に浮かぶようです。なにつぶやいてい

るんでしょね」

師「こないだ、飲み屋のおやじにいわれてはじめて気がついたんだがよ、どうやらおれ、しょっちゅうひとりごとというてるらしい」

毛「どんなひとりごと？」

師『「にんげんひとりごと」どうようになっちゃあおしめえだな』って」

毛「眼に浮かぶようです」

師「たまにとなりあわせになるじじいがひとりいてな、そいつもしょっちゅうひとりごとというて

んだ」

毛「どんなひとりごと？」

師『にんげんひとりごと』というふうになっちゃあおしめえだな』って」

ト「その爺さんとはともだちなのか？」

師「いんにゃ、いっぺんも口きいたことねえ」

毛「つまり、カウンターにふたりのお爺さんが並んで座って、おんなじひとりごとつぶやいてい
るわけなんですね。それも、おたがい、じぶん自身に向かつていつているのか、相手に向か
つていつているのか、わからない」

師「ま、店のおやじからみりゃあ、へんな光景ではあるな」

毛「誰からみても変ですよ。最後の句です。」

回る寿し居並ぶ通のとき顔

いるんですね、たまに。

回転寿司屋で、暖房の効いた店内をもう何周も回りつづけている赤身の握りをみながら、連
れの女の子に『このマグロ、どこから取り寄せたんか、色艶、あんまり感心しないな。たぶ
ん暖流の影響をかなり受けてるんだね。寒流に鍛えあげられて培われる本来あるべきはずの
照りというか、赤身の内部から滲みあがってくる活きの良さみたいなのがちつとも感じら
れないんだよね』なんて一生懸命語っている」

ト「以前しばらく住んでたイタリアの町では日本食、とくにスシがすごくはやってて、どこのス
シ屋にいつても満員であった。一番人気は、『ヒノマル』というなまえの、アボカドと生ハ
ムをふつうのごはんでほそながく巻きズシにしたやつ。そのほそながいやつを六等分にきり
わけて出すのであるが、まんなかの生ハムのピンクがとてもきれいなので、ヒノマルとい
うなまえがつけたいらしい」

師「酔飯じゃねえのか？」

ト「酔飯はすっぱいからつかわない」

師「ノリは巻かねえのか？」

ト「ノリはなまぐさいからつかわない」

師「ワサビは？」

ト「ワサビはからくて鼻にツーンとくるからつかわない」

師「スシでもなんでもねえじゃあねえか」

毛「でも、その町では、それがスシなんですわ」

ト「そう。もちろんしょうゆをつけて食べるのであるが、食べるときはかならずハシで食べる」
師「おれあスシ食うときあ、ハシつかったことねえがな。どんなスシだろうがよ、いつだって手
でつまんで食う」

ト「そんなことしたら、彼女にわられる。スシをハシで食べるから、日本のことを知りつく
したすごい日本通なのねと、尊敬のまなざしでうっとりみつめられるのである」

毛「トムさんが住んでいたその町には、やはりそういう『通』、たくさんいらしたんでしょうね」

ト「いた。『通』ではあきたらなくなってスシ職人になろうと決意したともだが、念願かかって本場の日本にグルメ旅行にいった方がいいのだが、一ヶ月の予定なのに一週間でかえってきた。あちこちのスシ屋にいったら、あちこちでさんざんなめにあつたらしい。」

「ごはんはくさりかけのパエリアみたいにすっぱいし、みたこともないまぐさくてまっ黒い紙みたいなものが上あごにピタタンコはりついてきたり、鼻のおくがツーンとしたかとおもったら顔面がしわくちやになつたり、『あんなものがほんとうのスシなのかとおもつたら、きゆうにスシ職人になるのがばかばかしくなつた』といつてかんかんにおこつていた」

毛「そのかたにとつては、『ヒノマル』こそが『スシ』だったんですね。イタリア式スシ。」

「そういう意味では、あの『スパゲティ・ナポリタン』は日本式スパゲティ。」

「うどんみたいに太くなつたスパゲティに、甘つたるいケチャップがたっぷりまわりついていて、真つ赤な魚肉ウインナーソーセージがかならずひとつかふたつ入っているヤツ。そのウインナーが蛸ちゃんの形になつていたら、もういうことなし」

師「どういうわけか、おおきなレストランよりも町のこぎたねえ喫茶店ででくるヤツのほうがうまかつたな、」

毛「レストランとちがつて、ちいさな喫茶店の場合、そうそう頻繁に出るわけではないので、茹でおきの麺がのびちゃつているからなんでしょうね。でも、だからおいしいんですね。」

「ところが、この『ナポリタン』、本場のイタリアには、どの町行つてもないそうで、もちろん、ナポリに行つても、ない。ようするにスパゲティを使った日本食なんですわね」

師「イタリア食であるが、日本食であるが、うめえもんはうめえ」

毛「うまいものはうまい。アルデンテだかなんだか知りませんが、ちよつと芯が残っている硬めのスパゲティに乙にすました贅沢な具材がからまつているようなものは、スパゲティじゃない。『ナポリタン』こそが『スパゲティ』」

「だから、そのイタリアのお友だちだつて、日本の本場のスシなんかにめげず、徹底的にイタリア式スシを追求すればよかつたんですよ。バジルの葉っぱ巻いたおにぎりにオリーブ詰め込んで粉チーズとお醤油ふりかけて箸でつまんで食べたなら、あんがい受けるかもしれません。『スーシー・キョートネツラ』とかなんとか、堂々と名前つけてね、」

ト「そうとうまずいにちがいない」

毛「『ナポリタン』だつて、イタリア人が食べたなら、そうとうまずいはずですよ。そのかた、いま頃どうしているんでしょうかねえ」

ト「いまは日本ソバにこつてるらしい」

師「麺類ならお手のもんだろ」

ト「でも、その町では、ものをズルズルすつて食べるのは下品ということになつてるので、かなり苦労してるらしい」

毛「それは致命的な壁ですねえ」

ト「だからスプーンですくつて一口ずつそつと食べられるように、いま、ながいソバをこまかくきざんでためしているらしいのであるが、なんとなく病院食みたいでうまくもなんともない

し、なによりも肝腎のハシではうまくつかめないのが最大の難点といって、かんかんにおこっている」

44 くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

毛「きょうの原句は、飯田蛇笏の『くろがねの秋の風鈴鳴りにけり』一気に詠みくだしていて、じつに端正で格調の高い句ですね。体中がすつときれいになるような句。大好きです。

では、最初の作品。『猫の晩めし』という前書がついておりまして、

黒こげの秋刀魚ためしにやってみる

なんなんですか、これ」

師「にんげんさまの晩めしのしたくしててうっかりこがしまった秋刀魚、すてるにしのびなかつたんだろな。もし食ってくれたらめつけもん」

毛「こんなひとに飼われている猫、たまったもんじゃあないですね。わたくしの家では、朝昼晩、ちゃんとしたメーカーのちゃんとした乾燥キャットフードしかやっておりません」

ト「それもある意味かわいそう」

毛「黒こげの秋刀魚なんぞ食べさせたらガンになるにきまつております。ちゃんとした乾燥キャットフードであれば、成分表みたって体に悪そうものは一切入っていないし、袋破つてそのまんまなんの手も加えずきれいなお皿に移したものをあたえるわけですから、雑菌がまぎれ込むこともない。どこのスーパーでもたいてい売っているし、いいことづくめなんです」

師「飼い主にとっちゃな」

毛「いえッ、猫にとつても、いいことづくめなんです。なにより食べやすい大きさだし、硬すぎず柔らかすぎず、いつもおんなじ味だから多少飽きることもあるかもしれませんが、そこはものはかんがえようで、一定の味というものはかれのころにじつに深い安心感をあたえているはずだとおもうんです。乾燥キャットフードでお腹一杯になれば、当然、われわれ家族の食卓にのぼっている刺身やら煮魚みても、ぜんぜん食べたいとおもわなくなるし、食べたいとおもわなくなるれば、これも当然のなりゆきとして口に入れることもなくなるわけだし、口に入れなければ魚の骨が咽喉に刺さるなんて悲劇ももう起こらなくなるんですから」

ト「もう起こらなくなる、ということは、いままで刺さったことがあるのか？」

毛「口に掃除機突っ込んでもだめだったんで、獣医に連れてって、なんとか事無きを得ましたけどね。だから、乾燥キャットフードが一番なんです。賢そうにみえても猫は猫。なに口に入れるかわからない。

猫舌だからまさか食べないだろうなど、わたくしの食べていた熱々のお茶漬け、ためしに目の前に置いてみたら、パクッと口に入れたはいんですけど、入れたとたん、ぴよんぴよん飛び跳ねておりましたし、このツンツとした匂い嗅いだらまさか食べないだろうなど、ためしにかつお節にタバスコちよつとかけてみたら、パクッと口に入れたはいんですけど、一瞬きよんとしたあと、やはりぴよんぴよん飛び跳ねておりました。だからやはり乾燥キャットフードが一番なんです」

ト「この句の猫のぼうがまだしあわせかもしれない」
毛「クロールの音微かにて庭木立

近所にもこういうお邸がありましてね。坂道の上からみおろすと、鬱蒼とした庭木立に囲まれた青い大きなプールで、いつもおなじ青年がひとり泳いでいる。ゆっくり泳いでいるんですけど、手足が立てる微かな水音が坂道の上まで聴こえてくる。しんとした昼近い屋敷町に、その水音だけがしている」

師「世の中にや、そういう暮らしもあるんだな」

毛「プールだけでも師匠のお住まいが一〇個くらい入るんじゃないでしょうか。誰も泳いでいないときは、一枚ガラスのような水面に雲が映っていたり、その中を鳥の影がついと横切っていたり、夜になれば月が浮いていたり」

師「きいてるだけで腹がたってくるな」

毛「でも、この作者はそんな優雅な光景に素直に感動しているわけです」

師「あんがい、夜になったらプールサイドいって、おもいっきりしょんべんぶちまけてやるうっておもってんのかもしんねえ」

毛「なんとなくすつきりしたところで、つぎの句です。

頬骨に秋の風格ただよへり

『初老の自画像』という前書があります。初老を、人生の秋とみている。月並みといえば月並みな発想ですけど」

師「堂々とおちついているのか、どうとでもなれとふてぶてしくなっているのか」

毛「どちらなんでしょうね」

師「年とったなあとはじめておもったのはシワのうえにさらにネジワよったときだったな」

ト「ネジワ？」

毛「枕に顔つけて寝ていると、朝起きたとき、もともと皺だらけの顔一面にさらにくつきりと深い皺ができています。あれ、年とつてくるとなかなか消えないんですよ、寝皺。だから午前中はひとに会いたくない」

ト「それにしてもなぜ、風の格とかくのか？」

毛「風雅、風趣、風情、風味、風流、どれも吹く風とは直接あまり関係ないですよものね。

日本には、なんとなくわかるようにならない言葉がある。そして、そういうわかりかたでしかわからない言葉がけっこうあるんですけど、この風格という言葉なんかまさにそれですね。

だから『風格』は『風格』なんです。人格ともちがうし、品格ともちがう。師匠には春の風格を感じますね。なんにもかんがえていないひとにしか具わらない稀有な風格。あやかりたものです。

ふうわりと硬き風船ゆれており

いい句ですけど、やな句ですね」

ト「ふうわりと硬き風船ゆれており」

毛「この硬き風船、おもしろい浮かべただけで心落ち着かなくなる。

お祭りの風船売りの屋台の風景なのか、ぼつんとひとりごとでもが手にしている風景なのか、とにかく水素だかヘリウムだかではんぱんに膨れきった、向こう側が透けてみえるくらいに薄い風船が、風に揺れている。ちよつとでも触れたらいつでも破裂するつもりでいるやつが、眼の前でふうわり揺れているんですよ。こんな怖ろしいことはありません。

こどもの頃、通っていたソロバン塾で、よく細長い巨大なソーセージみたいな風船を投げ合いつつしている連中がいたんですよ。授業の始まる前など、教室内に、はんぱんにはち切れんばかりの風船がいくつも飛び交うわけなんです。それが始まるとじつに憂鬱な気分になりましたね。

講師が入ってきて、遊びはそこでとりあえず終了するんですけど、ソロバンの授業が始まった、あつちこつちの生徒の机の上で、はんぱんに膨れた風船が窓のすきまから入ってくる風にあつち行ったりこつち行ったりしている。それみているとわたくし、なんだか咽喉にみえない太い棒を突つ込まれたような気分になってきちゃいましたね」

師「いつパンツてられるかわからねえところがこええのか？」

毛「雷もそうなんです。いっどこで炸裂してどこに落ちて来るかわからない。そりやあね、地震もたしかに怖ろしい。でもね、地震は地上にいるものみんなを平等に揺るんです。それにくらべて雷は、一〇〇〇人のひとが街歩いてるとき、もしわたくしの頭に落ちて来たら、死ぬのはわたくしひとりだけなんです。ほかの九九九人のひとはまったくの無傷。これが納得いかない。あるいは、我が家に落ちてきたら我が家一軒だけが全焼しちゃうんです。わたくしただだけがソソンすることになる。雷には、そういう不平等なところがあるんですよ」

師「おれあ、とおくで雷の音がしだと、もうわくわくうれしくなっちゃってますな。タダで大花火見物できるってもんだわ」

毛「昔、うちの子どもたちも親のわたくしに似ずそうでした。みんなきやあきやあうれしそうにはしゃぎ回るんですよ。そして三人とも、ときどきちらりちらりわたくしの顔みるんですよ。雷嫌いの父親がどんな顔して座っているのか笑いかみ殺したような顔でみるんです。怒鳴りつけようにもどろろいう切り口からどろろいう風に怒鳴りつければいいのかわからなくて、もう口惜しくつ」

師「怖がり屋のお父さんを怒らせると怖いぞ」っていつてやればよかったんじゃないやあねえのか」

45 雉子の眸のかうかうとして売られけり

毛「加藤椒邸の代表句。では最初の一句。

獅子の眼の茫々として昏れゆけり

『動物園にて』という前書があります。地面に前足揃えて投げ出してじつと前をみつめているライオンの眼が、夕暮れとともに昏れてゆく。このライオン、まさかじぶんがこんな大都会の真ん中のコンクリートだらけの狭い所で暮らすことになるとは夢にもおもっていないなかつ

たでしょう。

わたくし、中学校が上野公園の中にあつたものですから、帰りにともだちの家に遊びに寄りたりするとき、上野動物園の脇にさしかかると、日によつて時刻によつて、なんとも生暖かいような獣の臭いがふんとすることがありますね。まわりには自動車やらモノレールやらが走っているし、買物姿のおばさんたちがおしゃべりしながらすれちがっていくし、隣を歩いているともだちが宿題の話なんかしているしで、まったくのふつうの都会の空間なのに、その臭いがすると、この塀の向こうにはたしかに野性の世界が犇めいているんだなと、つくづくおもいましたね。大都会の真ん中で、獣たちの世界が仄暗い微かな臭気を放っているんです」

師「動物園といやあきこえはいいがよ、やつらにとつちや、ようするにみしらねえとおいとこに島流しされてきたうえ、コンクリンなかになんじがらめにとどこめられちまつただけのはなしだかな。で、そのあわれななれのはての姿をまいんちまいんちかぞえきれねえくれえのにんげんどもの見世物にされてよ、くそしょんべんたれてるとこまでめずらしそうにながめてられちやあ、もう涙もでねえ。ライオン、じつとすわつて茫々として昏れゆくしかねえ」

毛「その眼の奥には、故郷の大平原が風に吹かれてひろがっているのかもしれないね」

ト「都心の学生寮にすんでもだちは、ぼくがいついつても、じぶんのふるさとのはなしばかりしてる。ライオンとちがつて、じぶんできたくて東京にきているはずなのに、東京ではなし、ぜんぜんしないのである」

毛「東京というところは、ある意味、地方出身者の集合体といつてもいい。夜、おびたしいマンション群のおびたしい窓明かりをみているいつもおもうことなんですけど、あの窓の奥の住人たちは、おそらく、おたがいなんの行き来もなくなんの繋がりもない。

遠眼にはにぎやかで華やかで建物全体が豊饒の館のようにみえるけど、じつは孤独の集合体。東京という土地に住んではいても、隣近所とのつきあひもなければ、東京という土地ともけつきよくのところほとんど接点がない。

でも、故郷とだけは繋がっているんですね。びっしり燐光を放つ巨大なミラーボールのような建物の、その窓のひとつひとつの奥で、それぞれのひとがそれぞれの故郷におもいを馳せながらひっそりと住んでいる」

師「窓のかずだけふるさがあるつちゆうことだな」

毛「そういうことになりませぬ。それぞれの窓の奥で、それぞれの故郷が灯っている。そしてある日、転勤命令が下されて、あるいは亡くなって、その窓の灯が消えることはあつても、しばらくするとどこからかやって来た誰かがふたたびその窓に灯を点す。そんなことがくり返されているんですね。

沢庵のこりこりとして寂しかりけり

これも、ある意味、切ない句ですな。こりこりかりけりという音が、やけに明かるく頭蓋に響くひとりっきりの食事。すつとぼけた音だからこそ、妙に切ないんですね」

師「あつい茶漬けにたくわん、かかあの大好物だったな。朝昼晩、あきずに食つてたもんだ。

『沢庵のかりかりとしてうるさかりけり』年のわりにやあ齒じようぶだったからな。かむ音もうるせえし、茶漬けすすりこむ音もうるせえし、茶わんにあたる箸の音もうるせえし」

毛「元気いっぱい明かるい食卓だったんですね」

師「切なさのかけらもなかった。ひたすらうまそうにがつがつ食ってたからな。ただ、いまにしておもえば、あのころあ、ずっとおれのかせぎすくなかったから、かかあ、茶漬けにたくわんくれえしか食えなかったのかもしれないねえ」

ト「あんたはなにを食べてたのか？」

師「金がねえわりにやあ、おれにだけは、おれのすきなもん、かならず一品つけてくれてたな」

毛「奥さま、お茶漬けに沢庵、ほんとうに大好物だったんでしょかね？」

師「あのころあずつとそうおもってたんだがな。このころ、あのたくわんの音ふとおもいだすと、な、なんとなくシンとした気持ちになるんだわ」

毛「ほんとうに大好物だったのかどうか、いつかじっくり聞いてさしあげるときが来るといいですな」

師「一度きいてみてえ」

毛「つぎの句にいきましようか。」

生真面目にしんしんとつぐ秋の酒

外で飲むときは別として、家での晩酌、わたくし、じつに正確無比でしてね。午後七時にお風呂に入ったあと、とりあえずビール小瓶一本で食事を済ませてから、氷と炭酸水と梅干しふたつ載せた小皿持って二階の書齋に入り、書棚からウイスキーと大ジョッキと計量カップを取り出してベッド脇のサイドテーブルの上に並べる」

師「計量カップ？」

毛「ええ、料理のときに使うあの二〇〇CC目盛りのついたプラスチックの計量カップ。これが一番大事なんです。この計量カップで、ストレートウイスキーを正確に測るんです。きっちり一〇〇CC計って、それを大ジョッキにそそぎ、氷と炭酸水をたっぷり入れてまずひと息に半分飲む。そして別の書棚から選び抜いた本を梅干し舐めなめゆつくり読みながら、残りの半分を三〇分くらいかけてゆつくり飲み終える。壁時計に眼をやると、それがだいたい八時頃。」

このあたりからちよつとふんわりしてくるんですが、ふんわりしてきたところで、その日六本目の煙草に火をつける。その前に吸うのがだいたい五時くらいですから、三時間くらいの空きがあるし、お風呂で汗と一緒にニコチン絞り出していますから、この一服がけっこうばよーんとくるんです。二杯目をゆつくりと飲み終える頃は、もうかなりいい気持ちになっておりましてね、いよいよ最後の三杯目となるわけであります」

ト「そのときは何時なのか？」

毛「トムさん、それとてもいい質問です。というのは、わたくし、もうそのあたりからは、時計、ぜったいみないことにしているんです。いい気持ちになっているのに時計なんぞみて時刻がわかってしまったら興奮めですからね。もうぜったいみない」

師「一日三杯ってきめてるわけだ」

毛「そうです。一日ジョッキ三杯。ストレートに換算すると三〇〇CC。ただね、この三杯目の計量というのがちよつとむずかしいんです」

師「一杯目二杯目とおんなじように計ればいいだろが」

毛「ところが三杯目だけはちよつとちがうんです。つまり三杯目だけは一〇〇CCの目盛りよりこころもち上のところまでそそぐ癖がいつのまにかついでしまっているんですが、その『こころもち上』の位置がその日その日のわたくしのこころのもち加減で若干上になったり下になったりするからむずかしいんです」

師「そのくれえの量、ちつとくれえちがつてもかわりあんめえ」

毛「いえ、大いに変わりあるんです。なにしろストレートウイスキー三〇〇CCというのは、わたくしの限界ぎりぎりの量なんです。だから、ちよつとでも限界越えると、つぎの日がペアになつちやう。入れ過ぎたかなというときは瓶に戻し、戻し過ぎたかなというときはまたカップにそそぎ足す。かなりの酩酊状態で何度もくりかえさなければいけないのでこれがけつこうめんど臭い」

ト「飲みながら、どんな本を読んでののか？」

毛「たいていが随筆ですね。とくに食べ物随筆。というかわたくしの蔵書のほとんどが食べ物随筆なんです。じぶん自身は食べることあんまり興味ないんですけどね。吉田健一のものなんか、おそらくおんなじ作品三〇〇回以上は読み返しているでしょうね。あのかた、ほんとうに飲んで食べることが好きだったんでしょう。あのいきあたりばったりでしつちやかめつちやかでちんぷんかんぷんの、でもじつになんともやんちゃ小僧みたいな活きのいい文章読んでいると、いつも生唾出てきちゃいますね」

師「ベッドのうえで酒のつまみに梅干しなめながら食道楽どもの随筆読んでのわけだ」

ふかの眼の旨いしどく窄まりてあり

ト「南方の海でほんものふかをすぐそばでみたことがある」

毛「怖かったでしょう」

ト「いや、鉄の檻みたいなやつににんげんがはいって、そのなかからみるわけだからそれほどこわくはなかったけど、ちかよってきたときのふかの眼をみたときには、やっぱりゾツとした毛「たしかに、ふかというか鮫というか、硬いゴムのような皮膚に埋まっているあのちいさい黒い眼はゾツとしますね。黒いだけで、まったく光のない眼。暗黒世界への入口をみるようで、じつに物寂しい」

師「フカヒレスープ飲むと、極楽世界がひろがるんだがなあ」

毛「**鮎の背をぶあつき水の過ぐるなり**

川底で静かに揺れている鮎の背に、初夏の木洩れ陽が届いている。水がきれいだから、その姿がはっきりみえる。そして、はっきりみえるくらいですから、もの凄く深いというわけではないんでしょうが、とはいえ、『ぶあつき水』ですから、浅瀬でもない。『ぶあつき水』と

という言葉だけで、透明感と距離感をうまく表現していますね」

ト「このあいだ、岸辺の岩にリュックサックとカメラバッグをおろして川に素足をひたしていたら、底を一匹の鮎がおよいでいるのがみえた。つめたい水のなかで、鮎が、なんにもたず、すっぱだかでおよいでいるのを見てみると、こんどうまれかわれるとしたら鮎にうまれかわるのも悪くないとおもった」

毛「すっ裸といえ、わたくし、なにか物を持ったり、ポケットにいろいろ入れたらってことがほんとに嫌いでしてね。大学生のときに行った一ヶ月ほどの冬のヨーロッパ旅行なんかシヨルダーバッグひとつで通しました。これ、自慢話のひとつなんです。ダッフルコート、とつくりセーターにジーンズ姿で、持ち物はレストランやホテルに入るためのスーツ一式詰めたシヨルダーバッグだけ」

師「下着とか靴下とかの着がえはもってかなかったのか？」

毛「ヨーロッパの冬はかなり寒くて、どこのホテルも暖房利きすぎるくらい利いているということとを先輩たちから聞いておりましたから、それで名案おもいつきましてね、持つて行かないことにしたんです。けつきよく、それ、大正解だったんです。

最初の夜、ホテルの部屋に入ったら、案の定、むんむんに暖房利いている。バスルームもむんむん。ホテルに用意されているタオルで全身洗いながら、日本から履いていったパンツ、シャツ、靴下もそこで洗う。洗ったら、バスルームのカーテンレールとか排水管とかに掛けておく。ベッドに入るときはすっぱんぼん。すっぱんぼんに毛布一枚でも暑いくらいでした。つぎの朝、バスルームに行ってみたら、案の定、パンツもシャツも靴下も見事にバリッパリ。外に干すわけじゃないから、天候にも左右されない。ほんと、大正解もいいとこ」

師「もしもやぶけちまったりしたときや、どうするつもりだったんだ？」

毛「そんなもん捨てちゃって、現地でも新しいのひとつ買えばいいじゃないですか」

師「いわれてみりゃそれもそうだな」

毛「だから、いまでも、よく空港内をでっかい荷物いくつもごろごろ引きずったり、背負ったりしているひとみると、お馬鹿さんとしかおもえません」

ト「きょうのあんたの話、めずらしくためになった。ためにはなったがもつといい方法がある」

毛「教えていただけますか？」

ト「わざわざ毎日あらったりほしたりなんかしなくても、おんなじやつ、はきっぱなしにしていればいい」

46 万緑の中や吾子の齒生え初むる

毛「きょうの原句は中村草田男。万緑のバの音が句全体を支配していて、力強いゆたかな自然とその中で日に日に成長してゆく我が子のちいさくもけなげな生命力との対比がじつに鮮やか。緑と白との対比もまばゆい。何度読んでも、生まれたての句、詠みたての句のようで初々しいですね。では最初の一句。

盤石の警戒区域ひとひの蝶

警戒区域のびんと張り詰めた空間に蝶が一匹飛んでいる。静と動、剛と柔、これも対比の句ですね。尋常でない空気の中をひらひらと飛んでいる一匹の蝶の姿が、なんとも印象的です。出入り自由、お咎めなし。ひとひらの儂い生きものが、誰よりも大胆不敵、天衣無縫に飛び回っていることの不思議さ、美しさをさりげなく詠んでいますね。つぎの句です。

万緑に縁光^{ふち}らせてグラス立つ

『ガーデンワインパーティー』という前書があります。庭テーブルに空のグラスを並べてパーティーの準備をしているところなのか、あるいは、作者自身が飲み干したグラスをテーブルにトントと置いたところなのか、どういう状況にしろ、たったいま眼前に置かれたワイングラスの縁が、周囲の光を吸って、真円のリングのようにテーブルの上に浮いているんですね。ひとびとの語らいや食器のふれあう音が聴こえてくるようで、幸福感に満ち溢れたすてきな作品です」

ト「ガーデンパーティーで飲む水は家で飲む水とちがってほんとうにおいしかった。ふつうの水なのであるが、いつものように蛇口からマグカップにじかにそそぐのではなく、いったん氷のはいったおおきなピッチャーにうつしてから、それをおとなのワイングラスにそそいで飲むと、ぜんぜんちがう飲みものにおもえてくるのであった」

毛「ふつうのお水なのに、いつもとちがうやりかたで飲むと、一変、上等なお料理コースの中の『お飲み物』となるんですね。場所を、ダイニングキッチンから庭に移した時点ですでに食事にたいするところがまえがかなり変化しているわけですから、もうまるで気分がちがってくる。」

満身に花疥癬^{かいせん}のごとく生え初むる

『雨の日の桜』読むだけで、こちらの全身が痒くなってきたきそうですね」

師「桜、雨んときみにいったらよ、雨吸って真っ黒んなってるぶつとい幹から、花がじかに生えてんのがけっこうあった」

毛「たしかに、あれ、いいお天気のもとでぼんやりお花見していると見落としますね。でも注意してみると、太い幹から直接咲いている花がけっこうあるんですよ」

師「傘さしながらじつとながめてつと、黒い幹のあっちにもこっちにも、瘡ぶたみてえにうすく血をにじませて生えていやがるんだな」

ト「ぼくは一度、ある島で、瘡ぶただらけになったことがある。なにが原因だったのか、ある朝、右腕の皮膚の裏でチリチリチリッとちいさく渦巻くようないやな感じがしたかとおもったら、そのあたりに熱が寄ってきて、だんだん痒くなってきたのである。シャツをまくると、うすい皮膜のしたにカズノコみたいに粒々ができて、艶々と光ってる。それが、みるみるうちに右腕ぜんたいにひろがったから、もうたまらない。痒みは爪でかくくくらいではおさまらなくなってきた、ふとい針で腕ぜんたいをブツブツ刺したくなった」

毛「痒み」というのは厳密にいうと『ゆるい痛み』の状態なんだそうです。よく、蚊に食われた

ときなんか、ぶつくりふくらんだところを爪のさきでギョツとやると痒いのが治るよって、母に教わりましたけど、あれはおそらく、ギョツと痛みつけることによって、その痛みの中に、同類である痒みを取り込まれるからなんでしょうね。

痒みというのは、その姿も所在もなんとなくハッキリしないけど、痛みというのは、ハッキリとした姿しているし所在もハッキリしている。だったら、多少痛くとも、この際ハッキリさせたほうがスッキリするから、ということでも爪のさきでギョツとやるんだとおもいます。トムさんがふとい針でブツブツやりたくなつたのも、だから正常な反応だったといえるんでしょうね」

ト「けつきよく、それが全身にひろがってしまい、めったやたらかきむしって皮膚がやぶれて、一週間くらいしたら、全身瘡ぶたにんげんとなつたのであつた」

毛「師匠のころになつた桜の幹の花びら。『あれはね、滲み出てきた暗い悲しい樹液が外気にふれて白く瘡ぶたになつたものなんだよ』っていわれば、なんとなく納得しちやいそです。詩とか俳句なんていうやつも、詩人や俳人のこころの傷跡に咲いた瘡ぶたみたいなものなのかもしれないね。」

満塁の中や投手の腕上がる

『ナイター放送・九回裏』という前書があります。球場の大観衆と全国数百万人の眼がみつめる中、ピッチャーがゆつくりと両腕を上げた瞬間の緊張感を、じつに簡潔に表現していますね」

師「この一投で数百万人の明暗わかるわけだかな」

毛「打ちとっても打たれても、このマウンドに立てるといふことは、おいしいですね。野球の好きなひとなら誰でも一生に一度はこんな場面に立ってみたいとおもっているんじゃないでしょうか。もちろん現実にはまず不可能なことです。せめて想像するくらいは勝手でしょつてことで、その選手にじぶんの姿を重ねてみたり、あるいは完璧になり代わつてみたり、たぶんしているとおもいますね。」

わたくしのような、運動音痴で野球などほとんど興味のない者でも、たまに電車の中なんかで、気がついたら、じぶんがとんでもないスーパースター選手になっていることがありますからね」

師「おとくいの、ひま人の妄想」

毛「先日、秋葉原に行く途中の電車の中で、突然試合が始まりましたね。ニューヨーク・ヤンキース対ボストン・レッドソックス戦。ヤンキースのピッチャーとして、若かりし頃のわたくし通称モーリンがマウンドに立っている。」

このモーリン、もの凄いやつでしてね。クールな表情、しなやかなモーションからくり出されるストレートは一六〇キロを軽く超えているし、変化球はすべてまさにみたこともない魔球ばかり。その試合でも絶好調でして、中盤過ぎて、ひとりの走者も出してない。

たった一度だけ、ホームラン打たれたんですが、でもそこに、これまたもの凄い外野手がいましてね。外野フェンスにひらり飛び乗ったとおもったら、フェンスの上でさらに眼のさめ

るような大ジャンプして見事キャッチしてくれた」

師「ピッチャーもすげえが、外野手もすごかった」

毛「ただ、そのすげえ外野手、よくみると若かりし頃のわたくしなんですわね」

師「ピッチャーやってたはずのあんたが、とつぜん外野手になって超ファインプレーしちゃったわけだ。その試合、けっきょくどうなった？」

毛「モーリン投手、それまでに完封勝利やノーヒットノーランは何度もしているんですが、完全試合だけはまだ一度も達成したことがない」

師「その試合でその可能性が濃厚になってきたってえわけだな」

毛「ええ。九回表までは完璧に抑えたんですが、とはいっても、じぶんのチームが勝たなきゃお話にならない。あいにくその日は、相手ピッチャーも絶好調でして、ヤンキースも何人か走者を出してはいるものの無得点に抑えられている。なんとかしなけりゃいけない」

師「なんとかできたのか？」

毛「完璧に抑えたあとの九回裏ツーアウト走者なしでバッターモーリンの登場となりましてね。

五球でスリーボール・ツーストライクと追い込まれた」

師「息づまる場面だ」

毛「この句とは状況はちがいますが、緊張感の度合いは、この句よりもはるかに高いかもしれません」

師「勝ち負けだけじゃなくって、完全試合もかかっているからな」

毛「六万の大観衆は水を打ったようにシーンとしている。そのとき、五球投げ込まれているあいだ表情ひとつ変えずほとんど不動の姿勢でバットを構えていたモーリンが、やおら左手一本で持ったバットの先端をバックスクリーン上段に向かってゆっくりと上げたんです」

師「ホームランの予告ってえことか？」

毛「大観衆の地鳴りのような静かなどよめきが膨らむ中、そのバットをゆっくりと下ろしてもとのバッティングスタイルに戻ると、そこでこんどは眼をつぶった」

師「眼、つぶった？」

毛「ええ、眼をつぶった。それをみた六万の大観衆のどよめきがそのときさらにずんつと膨らんだのはいうまでもありません」

師「バッターボックスに立つてるあんたが眼をつぶったのを、大観衆、とおくっからよくみえたもんだな？」

毛「わたくしも、それ、すこし変だなとおもったんですけど、でも『どよめきがそのときさらにずんつと膨らんだ』んですから、やっぱり遠くからでもよくみえたんでしょね」

師「なんで眼をつぶったんだ？」

毛「これぞ東洋の神秘。無私、無心、無欲、というよりも、無そのものになりきって、心眼つまり心の眼で飛んでくる球をみようとしたりにちがいありません」

師「で、どうなった？」

毛「どよめきの渦巻くぶあつい空気を裂いてうなりをあげて飛んできた相手ピッチャー渾身の内

角低めストレートを、眼をつぶったままバットの真芯でとらえると、予告通り、バックスクリーン上段へ大ホームラン」

ト「六十三歳が、電車のシートに座って、ずっとそんなことかながえてたのか？」

毛「奇跡的偉業に総立ちの大観衆の中、ヒーローインタビューのマイクを差し込まれて、それまでのクールな表情とはうって変わってのじつに青年らしい誰からも愛されること間違いないの爽やかな笑顔で応えようとしたところで秋葉原駅に着きました」

幾万の眼を吸いあげて大花火

去年の夏、師匠とふたりで江戸川の花火大会、行きましたっけね」

師「缶ビール、しこたま買いこんでな。あんときやすげえ人出だったな」

毛「千葉側、東京側合わせれば、すくなくとも二〇万人は集まったって話でしたからね」

師「あんなまちかでのみたのははじめてだったがよ、なんてったって、まずあの音にびっくりこいたな」

毛「ふたりとも土手の上で両手をうしろについてみあげていたんですが、大花火がひらいてバツツーンというぶあつい音がしたかとおもうと、その風圧がまずお腹を直撃してから地表のすべてをなぎ倒すかのよう放射状にざあツと音立ててひろがってゆくんですよね。なんだか広大な円形ドミノ倒しの中心にいるようですね」

師「花火があがるたびに、そこらへんが昼みてえにあかるくなると、あつちの土手、こつちの土手にへばりついてるにんげんどもがずらーッと浮かびあがってきてな。もうほんとに、土手にびっちりすきまなくへばりついて、上みあげてる」

毛「ま、師匠もわたくしも、その中のひとりだったんですけれどね。それにいたしましたも、会場だけでもすくなくとも二〇万人ということは、つまり、すくなくとも四〇万粒の眼玉がおなじ花火を同時にみていることになる。花火は、さまざまなひとたちのさまざまなおもいや願いを一身に浴びて、パツと生まれ、パツと消えてゆくんですが、その一瞬一瞬の姿は、四〇万粒のひと粒ひと粒に同時に吸い込まれてゆき、思い出となって刻み込まれる」

ト「夜、ふとんかぶって眼をつぶると、いまでもときどき花火がみえる。ふしぎなことに、このところのみにみた花火とまったくおなじ形、おなじ音、おなじ順番でひらくのである」

毛「ママと一緒にに行ったことがあるんですね」

ト「花火がひらいておおきな音がするたびに、ぼくの手をにぎるママの手がギュッギュツとしまるので、ふとみあげると、泣いているのであった」

師「いろいろあったんだろうな」

ト「なぜ泣いていたのかはいまだにわからないのであるが」

毛「ママを呼んで、日本で一緒に暮らす予定はないんですか？」

ト「ぼくもママも、いつかはそうするつもりでいたのであるが、このごろになって、ママのようすがすこしおかしいのである」

師「日本のこと、変な国って、まだおもってんのか？」

ト「変な国とおもっているのは事実であるが、ものすごく興味をもっているのも事実である」

師「なら、いっぺんくれえ来てみりゃあいいじゃねえか」

ト「ママの口からはつきりときいたわけではないのであるが、どうやら好きなひとができたらしい」

毛「えッ？」

師「なんでわかった？」

ト「電話の声だけだから、はつきりとはわからないのであるが、ときどきナマリがまじるのである。ぼくが一度もきいたことのないナマリ。こんなこと、はじめてであった」

毛「つまり、どうやらどこかのお国訛りでしゃべるひとと知りあったんじゃないか？しかも、その訛りが伝染っているんだとすれば、かなりそのひとから強い影響を受けているわけであり、強い影響を受けているということは、かなり強く惹かれているということになるわけですね」

ト「それ以外にかんがえられないのである」

毛「もし、ほんとうにママに、好きなひとができたんだとしたら、トムさんにはどうしようもできないことなのかもしれないですね。でも、女手ひとつでトムさんというひとり息子を立派に育て上げて、いまは日本という遠い異国で、独身マザコンの流れ者とはいえなんとかその日その日を送ることができ、不法侵入とはいえ一戸建ての家に住めるくらいまでに物心ともに援助しつづけてきてくださったわけですから、そろそろご自分の幸せをかんがえられてもぜんぜん罰はあたらないとおもいますけどね」

師「マザコントムにとつちやつれえだろうがな。ま、このさい、おめえもそろそろいい子みつけたらいい」

ト「みつけた」

毛「えッ？」

師「いつ？」

ト「ママのそのナマリに気がついたころ」

師「どこで？」

ト「大学の庭で」

毛「デートは？」

ト「まだ一度もしたことがない。というより、まだ名前も知らないし、もちろんはなしたこともない」

師「じゃあかの女は、まだおめえのこと、ぜんぜん知らねえわけだ」

毛「つまり、『みつけた』というのは、『恋人ができた』ということじゃあなくて、大勢の学生に混じって歩いている彼女の姿をそのとき『初めてみかけた』ってことなんですね」

ト「そう。みつけた」

師「まあ、みつけただけでも上等だがな」

ト「こんど、どこかですれちがうようなことがあったら、名前、きいてみるつもりである」

師「初デートは、こんどの江戸川の花火大会あたりがちょうどいんじゃないかねえのか？」

ト「おなじ花火を、四つの眼でみてみたい」
毛「雨が降ったら、オジャンですけどね」

47 鮫鱈の骨まで凍ってぶちきらる

毛「加藤楸邨の『鮫鱈の骨まで凍ってぶちきらる』鮫鱈の吊るし切りですね。

ぶら下がったワイヤの先の太い鉤針に鮫鱈のあごを引っ掛けて吊るし、皮や身や内臓を包丁で削ぎ落としてゆくんですけど、ほんとにもう、あますところなくぜんぶ食べられるんですね。昔、水戸の父の実家で実際にみたことがあります。

蜜豆のほどよく冷えて青簾

甘味処の片隅、軒先の風鈴の音が聞こえてきそうですね」

ト「はじめて蜜豆を食べたとき、あの寒天にはびっくりした。ゼリーとおもって口にいたら、歯のさきでサクッと切れるし、切れたとおもったら、口ぢゅうに磯のような海のような匂いがひろがったので、なんじゃこれはとおもった。ただ、それは一瞬のことで、その歯ざわりにもおいもすぐ好きになった。とくに、黒蜜がまぎってくると、もうほんとおいしくて、ゼリーだとうちはならないだろうなと、つくづくおもったのであった」

毛「誰がかんがえ出したんだか知りませんが、あの寒天。海で捕れた天草を遠い内陸山間の地に運びぐつぐつ煮溶かしてから天然の冷気で凍らしさらに乾燥させたものを、いざ食べる段になると、こんどはそれをまず水で戻しぐつぐつ煮溶かしさらに冷蔵庫で冷やして固めるわけですから、シンプルに透きとおっているわりには、気の遠くなるほど手間暇のかかった食べ物ですよね。」

大空のほころび綴じるか揚雲雀

舞い揚がっていった雲雀が、春の大空のひとつで浚刺と鳴いている。その声を聴いていると、まるで大空のほころんだ箇処を、そのちいさな嘴で縫い綴じているかのよう」

師「さかな釣れねえときなんか、川原にごろんとあおむけんになると、空の奥でチュピチュピやってな。ほかになんにもきこえねえ。たまにとおくと鉄橋わたる電車の音がするだけ」

毛「あんなに高いところで鳴いていて、よく怖くないもんですよね」

ト「高所恐怖症の雲雀なんかは、どうしたらいいのであろうか？」

師「むずかしい問題だな」

毛「舞い揚がってしまう習性は、じぶんの意志で変えられるものではないでしょうかね」

師「ま、地上一メートルくれえのところでチュピチュピやるんだらうな」

毛「」
鮫鱈の声大皿に静かなり」

ト「鮫鱈も鳴くのか？」

毛「この作者には聴こえたんでしょうね。さきほども申しあげましたが、あんな巨きなぼつてりとした体が、吊るし切りにあうと、もうほんとに跡方もなくなっちゃうんですよ。ぴかぴか光る太い鉤針の先には、なにひとつ残っていない。風が吹いているだけ。」

そして鮫鱈鍋のかたわらに用意された大皿をみると、そのぶつぶつに削がれた皮やら肉片や

ら内臓やらがずらりと並んでいる。ものの見事にばらばらにされちゃってね。たしかに、鯀の口惜しさ、声なき声のようなものが、大皿の上に静かに漂っておりましたっけ」

師「そもそも、あごのしたに鉤針ぶっ刺されて、大口パックリ状態でひとまえにぶらさげられるんだーら、これだけでも、じゅうぶんくやしかりょうな」

毛「胃カメラ検査のとき、あの変なマウスピースみたいなやつをくわえさせられると大口パックリ状態になりますけど、あれ、すごく屈辱的でもんね」

師「で、ぶらさげられたあげく、無抵抗のところをこま切れにされちまうんだーら、鯀、たまったもんじゃあねえ」

ト「きているだけでからだぢゆうが痛くなってくる」

毛「魚には痛覚というものはないんだそうです」

師「てえことは、鯀、空中にぶらさげられたまんま、じぶんがこれから死んでゆくんだってえこと、わかつてねえわけか？」

毛「体の内側のあちらこちらがしだいにひんやりと軽くなってきた、あごに刺さっている鉤針の食い込みもなんとなくゆるくなってきたかなとおもっているうちに何も聞こえなくなる。

鯀鍋にかぎらず、食卓に向かったら、やはり、まずは胸の前でしっかりと合掌すべきでしょうね。

夕闇のおもみ仄かに薔薇沈む

近所に有名な精神科の病院がありまして、その庭の薔薇園がすばらしいんです。たまに散歩の足をのばして出かけるんですけど、夏の夕闇迫る頃の薔薇がまさにこれなんです。あたりに漂っている残光がぶあつい花びらに降りていて、その仄かな重みが薔薇を柔らかく押さえつけているんですよ。

それにいたしましたしてもあんな大きな薔薇園、手入れ大変でしょうねえ。先日妻に、しばらく家を留守にしますからそのあいだ庭の手入れお願いいたしますと頼まれて、生まれて初めて水やりというものをやったんですがね。炎天下の水やり、傍目には涼しげにみえるんですが、これがもう大変でして、一時間やっただけでくったくた」

師「でも、ま、なんとか水やりデビュー果たしたわけだ」

毛「ところが、リビングに戻りソファーに深々と腰をおろし、隅々までしつとりと水気を帯びた庭を眺めながらやれやれと煙草に火を点けたとたん、どしゃ降りのにわか雨となりましたね」
師「天気予報、きいてなかったんだ」

48 降る雪や明治は遠くなりけり

毛「いよいよ最後となりました。おふたりとも長いあいだほんとうにありがとうございました。とくに師匠、最後まで生きてくださってここより御礼申し上げます。

最後の原句は『降る雪や明治は遠くなりけり』中村草田男。日本人なら誰でも知っている作品ですね。

土砂降りや名刺はオジャンとなりけり

洋服や体が濡れたことより、じぶんの名刺がオジャンになったのがなによりも悔しかった」
ト「刷りたての名刺だったんだろうな」

毛「このすぐあとで大事な商談でもあったんでしようね。洋服や体が濡れていてもむしろ仕事熱心の印象与える効果あるかもしれないませんが、名刺は、あとあとまで先方の手許に残るものですから、まさかよれよれの名刺差し出すわけにもいかなかったんでしよう」

ト「日本にきて、びっくりしたことのひとつが、この名刺というものであった」

毛「外国でも、名刺、やりとりするんでしょ？」

ト「でも、日本の名刺のようにあんなにいろんな肩書き印刷してある名刺はみたことがない」

師「おれの知りあいの爺い、はたらいでもいねえくせに、やたら肩書きびっしりの名刺もつててな、あうやつあうやつにくばりまくってる。ねんがらねんじゅうあたらしい名刺つくっちゃあ、そのたんびに肩書きふえてる。こないだも、またあたらしいやつくれたんだが、あつい高級和紙のまんなかのてめえの名前のまわりに、こまけえ文字が黒々と蟻みてえにとりまいててな。『有限会社江戸川製作所・資材部・元部長』からはじまって『7区老人会ゲートボールサークル・ゴッドハンドブラザーズ会長』『7区児童危機管理団体・交通部・顧問』までびっしり。かぞえてみたら三十五個あった」

ト「『児童危機管理団体』ってなんだ？」

師「たまに交差点の信号機んとこで黄色いワッペンむねにボーツとつたつて、登校中のがきどもに手えふってる。肩書きもおおいが、おえらい知りあいもそうとういるみてえでな。つこないだも、じぶんちの隣にとんでもねえ大物がひっこしてきたつてんで、あうやつあうやつに自慢しまくってた」

毛「ほう、とんでもない大物つて？」

師「中曽根元首相の甥っこと小学校の同級生で、一年間、席が一緒だったんだそうだ」

毛「それだけ？」

師「それだけ」

毛「こんどまたあたらしい名刺いただいたら、師匠、わたくしにもみせてくださいね。三十六番目の肩書きが楽しみ。『日本国・元首相・中曽根康弘氏の甥と小学生のとき一緒に席に座っていたこともある男の、隣人』なんて、肩書きに読点入ってたりして。つぎの句です。

ふるさとや座る処の無かりけり

ほかのどの土地でもない『ふるさと』での作句。ひさかたぶりに訪れたふるさと、作者どこに行ってもじぶんの座る場所がないんですね。胸のうちで『ただいま』とつぶやいているのに、『お帰りなさい』という返事がどこからも聞こえてこない。じぶんの生まれた土地なのに、じぶんはもうまったくの異邦人になっちゃっている。嘘だろうっておもって『お邪魔してまーす。あ、みなさんお元気そうですね。わたしのこと憶えていますか？』っていう顔で薄く微笑みかけても、人も風景もみんなきよとんとした表情している。作者はすみからすみまでぜんぶ憶えているのに、むこうは作者のことほとんど憶えていない」

師「あんがいそんなもんかもしんねえな」

毛「わたくしにも経験があります。」

親友だとおもっていたやつでさえその再会の反応はこちらが期待していたほどのものではなかったし、ましてやほかのひとたちなんか、わたくしが上野に住んでいたこと、そして上野からほかの地に引越していったことさえもう忘れていたみたいなんです」

師「おれが死んでこの世からあの世に引越しても、そんなもんよ」

毛「でもね、『お帰りなさい』という言葉は聞けませんけど、わたくしにとって、上野はいまでもやはりこころの拠り所なんです」

師「ずいぶん変わったけどな」

毛「たしかに昔の面影かなりなくなりましたが、それ、あんまり寂しくないし悲しくないんですよ。むしろ嬉しい」

師「うれしい？」

毛「嬉しい。だって、あの頃の風景、もう誰にもみられなくてすむんですからね。わたくしの眼の奥に沁みついているあの風景、もうわたくしだけのものなんです。だーれにもみせてあげない」

ト「ぼくのこと親ばなれしていないマザコンといってるくせに、あんただってふるさとばなれしていないフルコンではないか」

毛「そしてその風景がつねに頭の片隅にちらついている。わたくしが設計した現在の市川の家、わたくしの書斎兼寝室、二階の一番西側にありまして、江戸川をはさんだはるかかなたの上野に向かって窓を開けてあります。寝るときは、その窓の方向に体を向けて寝ます。それほど意識していたわけではないとおもうんですが、気がついたらいつのまにかそういう風になっ

ておりましたね」

師「かなり重症だわな」

毛「でも、これ、わたくしだけではいとおもいますよ。意識的にしろ無意識的にしろそういう暮らしかたしているひと、けっこういらっしやるはずですよ。こころ屈したときなんか、つい、はるかに正座している『ふるさと』に向かって眼をやっているはずなんです」

ト「たしかに、つい、海のむこうのママの住む町にむかって眼をやってしまう」

毛「そして、つい電話しちゃうんですよ」

ト「このごろは、あまりしなくなりましたし、ママからもかかってこなくなりました」

毛「ママ、きつと新しい人生に忙しいのかもしれないですね。トムさんはトムさんで、恋人みつけたわけだし」

師「名前きいたか？」

ト「きくもきかないも、あれから半年ちかくなるけど、まだ一度もみかけてない。ちよつどもみかければ、みのがすはずはないのであるが」

毛「じゃあ、おもいは募るばかりでしょうね」

ト「名前だけでもわかれば、さがし方がるのであるが」

毛「ママには話したんですか？」

ト「はなしてない。はなすような問題ではないし」

師「そりゃ、ま、そうだわな」

ト「ぐるんぐるんになった頭のなかを整理しようと、お正月に日記帳かってきたのであるが、どこから、なにを、どう書けばいいのかわからなくて、まだ一行も書いてない」

毛「名前すらわからないんじゃないか、書きようがありませんよね」

ト『降る雪や。ページは白く暮れにけり』

毛「白いページがふたりの日々の出来事でびっしり埋まる日、あんがい近いうちにやってくるかもしれないよ。トムさんの山の家、けっこうロコミで有名なすから、彼女のほうからひよっこり訪ねて来るなんてことだつてないとはいえない」

師「不法侵入の家が、ふたりの縁をとりもつこととなるわけだ。屋根の穴くれえ、なおしといったほうがいいぞ」

毛「**鞆たづのますぐになりて夕暮れぬ**

夕暮れの公園の片隅で、数連の鞆たづがますぐに下りている。ついさきほどまではこどもたちに乗られて揺れていた鞆たづが、いまは、地面に吸い寄せられて、身じろぎひとつしない。夕暮れの公園に漂う眼にみえない引力というものを、垂れ下っている鞆たづの姿を借りて見事に視覚化してもおります。無人の静けさの中に、こどもたちの嬌声が聴こえてくるよう、動きを内包したすてきな作品になっていますね」

ト「この地球上のすべての鞆たづは、ひとが家にかえてしまつてしまつと、みんな地球の中心にむかつてますぐにたれ下がるわけだ」

毛「鞆たづにかぎらず、この地球上のあらゆるものは、みんな、地球の中心に向かって垂直に引つ張られているんですね。引力は、地球上のありとあらゆるものにたいして、わけへだてなく平等に作用している。その公平さ、神の如し。あたりまえといえばあまりにもあたりまえのことではありますけど、やっぱり、引力つて凄いなとおもいますね」

ト「この世から引力がなくなつたら、どうなるんだろう？」

師「かかあが、どつからかにこにこ音もなくただよつてきたりしてな」

毛「師匠喜んだのもつかの間、師匠自身が意志に反して、どつかに音もなく漂い去つてつちやつたりしてね」

師「それ、こまるわな」

毛「体がふわふわ浮かぶのは楽しいかもしれませんが、じぶんの意志通りに動かないのは困るでしょうし、なによりも、そうなると意志それ自体がふわふわの無重力状態になつてしまつて機能しなくなるかもしれませんね。意志そのものが無気力になつて使えものにならなくなつちやう」

ト「引力は、にんげんの体もこころも支配しているということか？」

毛「引力、恐るべしですね。現にいま、われら三人、座布団にびったり引き寄せられながら、盃の底にびったり張りついているお酒を飲んでいるんですからね。それでは、引力の充満して

いるこのお部屋の真ん中で、最後の作品にまいりましょうか。

降る雪や耳も遠くとなりけり

わたくしはまだ大丈夫ですけど、ま、いずれいろんなものが遠くなるんでしょうねえ」

師『浮子(うき)遠く意識も遠くなりけり』釣りしても、ふっと妙にいいところもちん
なって、そのまんまどっかに吸い込まれちまいそうになること、しよっちゅうだーらな」

ト「はいどこかかあみつける」

毛「あれから、奥さまの動向は？」

師「ちらほら、うわさだけはきくんだがな」

毛「ひっそりと筆筒の奥に眠ったまんまの薔薇の刺繍のハンカチ、いつになったら奥さまに渡す
ことができるのやら」

師「しめっほい日がつづいてたからよ、こないだ天気の良い日にちよっくらひっぱりだして洗っ
ていちんち干しといたら、おろしたてみてえにきれいになったなあ」

毛「わたくしもぎのうのお昼、天気が良かったんで、猫、ひさしぶりに庭で洗ってやりましてね。
最後にドライヤーで乾かしたら、毛がふっくらとふくらんじやったせいもあるんですけど、『えっ?』って
ど、なんとなく少年らしきがない。あいかわらず細身ではあるんですけど、『えっ?』って
おもうくらい一人前の猫になってるんです。去年、迷い込んできたときは、片手のてのひ
らにちよこんと乗るくらいだったのが、気がつかないうちに、すっかり立派になっていまし
た。にんげんとちがって、ほんとにあつという間に成長していました。こころなしか表情に
もゆったりとしたおおらかさが漂っているんですよ。

体がさっぱりしたせいか、その場で気持ち良さそうな寝息を立て始めちゃいましたね。それ
みていたら、よくぞまあ我が家に来てくれたよなあと、しみじみとした気分になったものの、
あまりにも立派になってるんで、ちよっと小憎たらしくなりましたね。

『迷い猫寝息も太くなりけり』

すっかり家族の一員であります」

ト「名前は？」

毛「まだつけておりません」

了

目次

プロローグ

1

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

1

閑かさや居間にしみ入る蟬の声

閑かさや烏賊にしみ入る蟬の声

閑かさや黐にしみ入る蟬の声

閑かさやビラにしみ入る蟬の声

閑かさや地下室にしみ入る蟬の声

ひやゝゝと壁をふまえて昼寝かな

4

ヒヤゝゝと屋根をふまえて忍者かな

ヒヤゝゝと甕をふまえて値ぶみかな

ひやゝゝと影を踏まえて狐かな

ひやゝゝと花を浮かべて昼寝かな

ひやゝゝと禿を抱えて昼寝かな

ひやゝゝと盃をかさねて昼の酒

荒海や佐渡に横たふ天の河

6

荒海やとどに横たふ天の川

名月や池をめぐりて夜もすがら

7

名月が盃をめぐりて夜もすがら

臨月や光纏いて夜もすがら

迷い猫声うろうろと夜もすがら

月こよひ部屋をさぐりて夜もすがら

蚤虱馬の尿する枕もと

9

軒白み夢魔の去りゆく枕もと
蚤虱妻の尿する枕もと

道のべの木槿は馬にくはれけり

10

釜の辺のおこげは馬にくはれけり

寄せ鍋や生煮え肉も喰われけり

道のべのお告げは犬も食わぬなり

五月雨をあつめて早し最上川

13

万感を浮かべて黒き最上川

夏草やつはものどもが夢の跡

13

枯れ草や上物どもが夢の跡

枯れ草や糞餓鬼どもは嫁のあと

浅草や花魁どもが夢の跡

行く春や鳥啼き魚の目は涙

14

逝く春や鳥啼き魚の目は涙

つゆ晴れや鳥啼き魚の目は涙

石山の石より白し秋の風

15

石橋の石より強し妻の杖

茅葺きの茅よりさびし秋の風

【お花見】

16

怖ろしや桜だらけで恐ろしや

雨戸引けば水吸いあげし桜かな

散る桜ちりぬるさくら薄荷糖

蕎麦を呑むをとめの喉のくびれかな

腸検査うすばかげろうとなりにけり

腸壁をくぐるがごとき宵桜

この闇に咲いているのか桜よさくら

花びらを頭にのせて犬の糞

乳母ぐるま地震に踊れる春の午後

道端にへたばりつきし落花かな

みあげれば良性ポリープばかりなり

秋深き隣は何をするひとぞ

20

開けやすき隣は何をする人ぞ

秋深き隣は箸を擦る人ぞ

腋臭き隣は何をする人ぞ

欲深きモナリザ何をする人ぞ

古池や蛙飛び込む水の音

22

閑かさや蛙飛び込む水の音

夏草や蛙飛び込む水の音

旅に病んで蛙飛び込む水の音

蚤虱蛙飛び込む水の音

物いへば蛙飛び込む水の音

古池や岩にしみ入る蟬の声

くあらためましてく

23

古池や蛙呑み込む水の音

カラオケや飲まず歌わず見ず知らず

古糸やおかず飛び込む水の音

古池や蛙飛び込む水ノート

古家や買わずに住み込み雨の音

枯枝に鳥のとまりたるや秋の暮

25

カレンダーに黒丸つけたるや秋の暮

枯枝に鴉のとまりたるや秋の釘

俎板に鴉のとまりたるや秋の暮

塚も動けわが泣く声は秋の風

27

ヅラよ動くなわが泣く額に秋の風

垢も積もれわれ棲む部屋は儼だらけ

つまみ寄せ我泣く前へ柿の種

蛤のふたみに別れ行く秋ぞ

30

いが栗のふたみに分かれ行く秋ぞ

花売りのかたみの轍秋の暮

あやとりの瞳に映れ窓の秋

蛤をつまみに酔えば行く秋ぞ

むざんやな甲の下のきりぐゝす

3 2

スザンナや臉の上のキリぐゝス

むざんやな座布団下のキリぐゝス

旅に病で夢は枯野をかけ廻る

3 3

たまに飲んでトメは枯野をかけ廻る

帯を解いて嫁は我もと食べまくる

雨も止んで夢は緑野をかけ廻る

春の海終日のたりのたりかな

3 5

春の海終日どたりどたりかな

朝の海秋桜ゆらりしなりけり

春の海丸干しきらりきらりかな

凝視めれば綾なす堂ほたるかな

冬の家終日ピシリピシリかな

鼻の膿終日ぼたりぼたりかな

葱買うて枯木の中を帰りけり

3 7

乗り越して枯木の中を帰りけり

是非問うて枯木の中を帰りけり

ねぎろうて枯木仲間と帰りけり

寂として客の絶間のぼたん哉

3 9

寂として客の絶間の鉦かな

寂として大統領の居ぬ間のボタンかな

席混みて連なる客の手酌かな

咳払いして客の絶間の鰻かな

月天心貧しき町を通りけり

4 1

寿司天井貧しき町を通り過ぎ

雪しんしん貧しき町に灯を点し

春爛漫お花がただで咲いており

ゆく春やおもたき琵琶の抱きぐゝころ

4 3

ゆく春や冷めたき岩の夕ごろ
平成の塵なき庭の静ころ
ゆく春やおもたき腹の抱きころ
夕月や路傍の石も眼をとじて

我と来て遊べや親のない雀

46

影踏みて遊べや親のない雀
腹抱え笑えや骨のないスルメ
彼と来て並べや親の眼の前に
ホラ吹きて腕組む舌のないグルメ

雪とけて村一ぱいの子どもかな

48

雪とけて腹一杯の小川かな
首もげて花一輪の徳利かな
牛鳴いて村いっぱいの陽射しかな
土砂降りに軒一列のおしめかな
満月に幹いっぱいの痘痕かな

瘦蛙まけるな一茶是に有り

50

その蛙跳ねるな一句出来るまで
やせ我慢やけど覚悟のお湯加減
乗り換える駅まちがえてここに居る

目出度さもちう位なりおらが春

52

見る度にチューしたくなりおらが孫
ひさびさに旬食らうなり里の春
会いたさも中くらいなり君江ちゃん
出目金魚ひらきつばなしで昼寝かな

やれ打つな蠅が手を擦り足をする

55

それ喰うな蠅が手を擦り足をする
鈴打てば赤子手をふり足をふる
やれやれと窓が眼をとじ幕をとじ
冬の海蛸が手を攣り足を攣る

朝顔に釣瓶とられて貰ひ水

58

あさ顔に光つどいて夢溶けて
朝顔をしんと映して盥水

蒲団着て寝たる姿や東山

59

蒲団着て寝たる姿や日本国
蒲団着て起きたる姿や情けなや
風呂沸きてつめたき雫肩に背に
苦勞して着たる浴衣もばらばらに
ゆらり来てふたたび寝たる大鯰

夕立にひとり外みる女かな

62

棒立ちになりて指呼するスカイツリー
夕蟬に小鼻汗ばむ妊婦かな
夕涼みふとすれちがいたる湯の香り
総立ちにひとり座したる女かな
遊星の縁青らみて夏木立

春雨や抜け出たままの夜着の穴

65

春雨や抜け出たままの蛇の殻
はるさめの湯気も静かに春の雨
ハンサムに歩みはこべる鹿の秋
鐘の音に秋のまぶたの閉じてゆくかな
春雨やどこへ行ったのポチの馬鹿

長々と川一筋や雪の原

70

さらさらと傘をかするか春の雪
みあげれば青一色の雪の原
鉄橋を真一文字や終電車
蠟燭の火はひとすじに顔と顔
かなかなの声一筋や秋刀魚焼く・・・他

世の中は三日見ぬ間に桜かな

74

この最中すつかすつかの中身かな
ガウデイの三日坊主の後始末
暑き夜の形きまらぬ枕かな
湯煙りも月下に縮む寒さかな

目に青葉山ほととぎす初鯉

間にあえば山ほどの傷つくらずを
水桶のびしゃりと置かれ夏は来ぬ
目に青葉翳し透かせば子らの声
みつめればはにかむがごと雪は解けゆく
目脂をば山ほど溜めて初ギネス

7
7

がつくりと抜け初むる齒や秋の風

ずっしりとゆら揺れる枝に小鳥かな
たっぷりと油浮かべて兜虫
しゃくとりがなにを測るかこの夕べ

8
1

いもを煮るなべの中まで月夜哉

井戸深く消えゆく雪のゆくへかな
身を振り嘆く空き家に蔦からみたり
糸を引く白身まばゆき夏あさげ
いとをかし清少納言ちとせ越え

8
3

いくたびも雪の深さを尋ねけり

白足袋のけさの白さや初詣で
会うたびに相手の名前を尋ねけり
浅漬けに雪の深さをおもいけり
いくたびも雪の深さを訪ねけり

8
6

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

秋の夜は彫り深まりし仏かな
落葉焚いて天を仰げば喉仏
襖あけて亡母は来たりし秋午前

8
9

柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺

柿くへば種がにゆるにゆり法隆寺
錠かえば妻とふたりの秋の夜
たたずめば影も佇む冬三時
旬食えば金がなくなり風流人
雁がねや夜を従がへて音もなし

9
1

春風や闘志いだきて丘に立つ

94

春風や障子しばみてふくらみて

ビル風に帽子抱きて涙ぐむ

こっそりと冬至来たりて街に立つ

春の宵尼ら光りて堂に満つ

春風やどこかで誰か転んでる

去年今年貫く棒の如きもの

98

去年今年ひとりぼっちの落とし物

春の夜をすぎゆく能の如きもの

こぞことし毎年かくの如しかな

ひっそりと汗ばむ桃のひとりごと

回る寿し居並ぶ通のごとき顔

くろがねの秋の風鈴鳴りにけり

103

黒こげの秋刀魚ためしにやってみる

クロールの音微かにて夏の庭

頬骨に秋の風格ただよへり

ふうわりと硬き風船ゆれており

雉子の眸のかうかうとして売られけり

106

獅子の眼の茫々として昏れゆけり

沢庵のこりこりとして寂しかりけり

生真面目にしんしんとつぐ秋の酒

ふかの眼の盲いしごとく窄まりてあり

鮎の背をぶあつき水の過ぐるなり

万緑の中や吾子の歯生え初むる

110

盤石の警戒区域ひとひらの蝶

万緑に縁光らせてグラス立つ

満身に花疥癬のごとく生え初むる

満塁の中や投手の腕上がる

幾万の眼を吸いあげて大花火

鮫鱈の骨まで凍ててぶちきける

115

蜜豆のほどよく冷えて青簾

大空のほころび綴じるか揚雲雀

鮫鱈の声大皿に静かなり

夕闇のおもみ仄かに薔薇沈む

降る雪や明治は遠くなりにつけり

117

土砂降りや名刺はオジヤンとなりにつけり

ふるさとや座る処の無かりつけり

鞆のますぐになりて夕暮れぬ

降る雪や耳も遠くとなりにつけり